
純情白雪姫

祭歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純情白雪姫

【Nコード】

N2240L

【作者名】

祭歌

【あらすじ】

雪のかんばせ、林檎の唇。漆黒の髪。

白雪の如く美しいエビリス王国の姫君アルマリアが嫁ぐことになったのは、とあるウワサの変わった王子で……？「いやー！この変態王子アルマリア様になんてこと仰るんですかー！」「実家に帰りますとか言われちゃったらもう後がないですよ？！」「……あの、大丈夫ですか、ヴィルヘルム様」悲鳴を上げる従者と侍女と、変人王子に囲まれながらの波瀾かもしれない万丈結婚生活。

ぬるくてゆるい恋愛ファンタジーです。
ただいま聖女編更新中。薔薇と木の実と雨の罪。

初めまして、御機嫌よう。

エビリスの白雪姫。

そう謳われる姫君がいた。

美しき彼女の名前はアルマリア。

か弱き王妃が難産の末に産み落とした、王国の大切な大切な愛娘。真白のかんばせに真白の心。まるで神の使いのような微笑みを浮かべ、淑やかに紅茶を飲むその少女。

御歳十七歳。

どんなに大切にされていようと彼女はかの王国の王女であり。

どんなに惜しまれようと姫君の少女は嫁がねばならぬ。

それがエビリスの絶対の決まり。

変わることなき王女の掟。

それ故かの姫君アルマリア。

とある大安吉日に。

隣国の王子へと嫁いでいった。

*

アルマリアは壮麗な部屋の中で、優雅にお茶を飲んでいた。

「……………どうして、殿下はいらっしゃらないのでしょ？」

ぼつり、と彼女は呟く。呟きがてら、かちやりとカップをソーサーに戻した。

エビルス国の隣国、リュフアーニア聖国。
聖王国、と呼ばれる大国である。

その王宮の一室で、この国の第一王子に嫁いできたアルマリアは、一向に現れない花婿に思いを馳せていた。??そろそろ眠いのですが。

「も、申し訳ありません、アルマリア王女殿下。ヴィルヘルム王子は、その、今こちらに……、そ、その……」

「ああ、ああ、ごめんなさい。貴女を責めた訳ではないのですよ。ただ、どうかなさったのでしょうか、と不安に思っただけですので」

蒼白な顔でおろおろと謝ってくる侍女に慌てて言い、ふう、と溜め息をつく。

はつきりと言ってアルマリアにとって婚礼なぞどうでもいいことだ。

こんなもの、義務に過ぎないのだから。

ただ、いつまでもここでぼんやりとお茶を飲んでいるのも暇であるし、そもそも異国の王宮で他国の姫が普通にお茶を飲んでいるのだろうか、とも思うので。

ちらりと己の姿を見やる。純白の、それでいてきらびやかな衣装。これで永遠の愛とやらを誓うらしい。……愛も何も実際の顔すら知らないのだが。

リュフアーニア聖国のヴィルヘルム王子。

特に女癖が悪いとも、金遣いが荒いとも、権威を笠に着るボンボン根性丸出しの男、などという悪い噂は聞いていない。大体物腰柔らかかで穏和で気さくな人物だと聞く。

だが、ひとつだけ、気になる話を聞いた。

それは、王子が……???

??バン!

不意に、大きくドアが開かれた。周囲から小さく悲鳴が上がる。

「ああすみません！ 遅くなりました姫！ 先程まで検死をしていましたもので」

……王子が、聖王国では稀にみるほどの死体好きだという話。

初めまして、御機嫌よう。(後書き)

お寄りいただきありがとうございます。
少しでも楽しんでいただけますように。

よつご、エビリスの白雪姫

「おっ、おっ、王子?????!」

き????????ん、と耳に響くほどの怒声が上がった。

吃驚してアルマリアが固まっていると、先程どもり気味に彼女に言い訳していた少女が、顔を真っ赤にして鼻息荒く仁王立ちしていた。

「王子！ 今日だけは止めて下さいと申しあげました筈でしょう！」

「しかしだな、今日はひびの入り方がとても美しいご夫人の遺体で

……」

「あああああ変態発言はお控え下さいませ！ この部屋にはアルマリア殿下がいらっしゃるんですよ?!」

ぱっ、と侍女がアルマリアを振り返る。急に話を振られた彼女は、ばちばちと目をしばたいてから、

「あ、わたしのことはお気になさらず」

どうぞ続けて下さいな、と微笑んだ。

ざっ、と青ざめる侍女に、おお、と頬を綻ばせる王子。

「やあどうも。貴女がアルマリア殿下でいらっしゃいますね？ 私はリュファーンニア聖国が第一王子、ヴィルヘルムと申します。此のたびは約束の時間に遅れてしまい、申し訳なく?????」

「遅れ過ぎです!!」

「……エンナ、少し黙っていてくれるかな。お待たせしてしまった姫を、さらにお待たせするのは心苦しいことだと思わないか？」

「ななななな、何をしゃあしゃあとっ?????」

ぶるぶると青紫の顔で震え出すエンナと呼ばれた少女を、アルマリアは不安気に見上げた。大丈夫かしら。血圧が上がり過ぎて倒れてしまいそう。

どうしましろう、と思いながら、王子に視線を移すと、彼はふわりと優しく微笑んだ。

「どうかなさいましたか、姫？」

とくり、と胸が高鳴る。

思いがけず、綺麗で優しい声だった。

徐々に火照ってきた頬を片手で押さえ、アルマリアは小さく、咳くように言っ。

「あの、殿下」

「はい」

「今日は、婚礼は無理なような気がします」

ぎゃ?????! とエンナが叫んだ。

ヴィルヘルムは変わらず穏やかな笑みを浮かべている。

「おや、どうしてですか？」

「だって、もう大分日が傾いております。内輪のみの婚礼なのですし、また日を改めてでも……」

言いかけた時。

すうっと白い指が前髪に触れた。

よつごそ、エビリスの白雪姫 2

びくんっ、と睫毛を震わせる。

「で、殿下……?」

おそろおそろ見上げると、ヴィルヘルムは困ったような表情をしていた。

「姫、そう仰って、もう戻ってはいらっしゃらないおつもりですか?」

「……は、はい?」

意味が分からず首を傾げる。すると彼は大仰な仕草で肩を竦めた。

「私を見た女性、もしくは婚約話が上がりがけた女人は必ずそう仰って、二度とお顔を拝見することがありません。どうやら趣味が合わなかったようで」

本当に困ったように言われて、アルマリアは漸く、彼の言う意味が分かった。

そして慌てて否定する。

「ま、まさか殿下! そんなことはありません。だってわたし、もうあの国のものではない、と陛下に言われましたから」

「え?」

「わたしが申し上げているのは、もう日も暮れてきていますから、という意味で、つまり他意はないのです。信じて下さい殿下」

今度は彼女が困ってそう懇願すると、ぼかんとしていた王子は、ぱっと花咲くように微笑んだ。その後ろでは、エンナが心底安堵したようにへたり込んでいる。

「ああ！そういうことですか。分かりました、そうですね。もう遅いですし、集まっているのは暇人ばかりですし、また明日か、明後日か……貴女が良ければいつでも構わないですしね」
「ああ、分かっていたただけて嬉しいです」

ほっと胸をなで下ろす。??自分は、もうあの国には戻れない。だから彼に嫁ぐのだ。これもそれもあれも全てが義務だけけれど。

「それでは姫、今宵はこの城に泊まって下さいますか？」

「よろしいのですか？」

「ええ、本当は今日、ここが貴女の家になる筈だったのですが……すみません」

「いいえ、いいえ！ お気になさらないで下さい。??それでは、ご好意に甘えさせていただいてもよろしいでしょうか」

小首を傾げてそう問うと。

第一王子と侍女は強く頷いた。

幕間 ? ヴィルヘルム王子の胸中?

死体愛好家ヴィルヘルム。

そんな未来の夫をぼんやりと見つめる小さな少女を、彼はつぶさに観察していた。

雪の如く真白の肌に、けぶるような睫毛。林檎のように、紅を塗らずとも赤い唇。そして煌めく漆黒の髪。

真つ直ぐにこちらを射抜く同色の瞳に、何か侵し難いものを感じる。

綺麗な姫だ、としみじみ彼は思った。

なんだかんだで簡単には折れなさそうな精神が、滲み出ている。

骨の形も素晴らしい。死体に変わればさぞ自分好みの娘だろう。エンナも王も、随分上等な相手を探してきたものだ。

「姫、何か欲しいものはありますか？」

視線を逸らさない少女に向かって、そう、柔らかに問いかける。

彼女はきょとんと瞬いて、ことんと首を傾げた。……癖なのだろうか、彼女は何かを尋ねる前や、疑問を持った時、先ず首を傾げているような気がする。まだ会ったばかりで定かではないが。

「欲しいもの、ですか? いいえ、特には……どうしてでしょう」

「この国では、婚礼後に、相手に贈り物をするのですよ」

「贈り、物ですか……? 指輪ではなく」

ヴィルヘルムは苦笑した。

「もちろん、指輪はありますよ。けれどそれは婚礼中に交わし合う

のです。……エビリスは違ったのでしょうか」

ふと疑問に思い聞くと、彼女はふるりと首を横に振った。

「いいえ、同じです。ただ、贈り物の習慣はなかったのだからなるほど……」

まあ、面倒な作業ではあるが。好き合っているならばともかく、自分たちのように嫌い合っていないがよく知りもしない相手では、やり難いことこの上ない。

この姫君も、何処か心惹かれるものはあるが、だからといって熱情も仄かな恋情も抱けない。

もう暫くすれば違うのかもしれないが、今は。

「??では、殿下は何か欲しいものはありますか？」

唐突に落とされた囁きに、危うく思考が停止しかけた。寸でこのころで踏みとどまり、微笑みながら訊き返す。

「え？ 私、ですか？」

何故。

と、彼女は当然のように言った。

「だって相手に贈り物をするのでしょ。私も何か貴方に差し上げなければ。何がよろしいですか？ あまり持ち合わせがないので、たいしたことは出来ませんが……」

少し申し訳なさそうに。

ヴィルヘルムは驚いた。相手、と言ってもこの習慣は、大体男が

女に贈るものだ。女は家庭に入れば嫌でも多くのことを奉仕することになるので、これは前払いの意味もある。

だから、まさかそんなことを言われるとは露も思っていなんだが

……???

(面白い姫君だ)

異国から来たのだから当然なのかもしれないが、それにしても面白い。彼の発言にも決して動じた様子を見せなかった。どちらかと言えばエンナの血圧の上がり具合を心配しているようであった。

「姫」

「はい？」

期待に満ちた目が向けられる。恐らく、何か欲しいものを告げてくるのだと思っっているのだろう。ヴィルヘルムは再び苦笑した。

「姫、私は貴女の欲しいものを聞いていませんよ」

幕間 ? ヴィルヘルム王子の胸中? (後書き)

婚礼、そして婚礼前のひと苦労

あんまりな前日と違い、婚礼は肅々と清やかに行われた。

アルマリアは真っ白な婚礼衣装を脱ぎ捨て、さっさと簡素なドレスに着替える。

「婚礼つて、面倒ですね……」

誰にもなく彼女は呟いた。

しんと静まり返る室内には、侍女のひとりも居ない。アルマリアが暫く一人で、と願ったからだ。

そうしながら、彼女は婚礼中と、その少し前に、思いを馳せた。

*

大抵のことには動じぬアルマリアと言えど、やはり婚礼となればそれなりに緊張していた。

すう、はあと息を整えつつ、着替えに向かおうと歩を進めていた、とき。

「姫、大丈夫ですか」

ヴィルヘルムに声をかけられたのだ。

吃驚して振り向くと、少々申し訳なさそうな表情の王子が立っていた。

アルマリアは首を傾げつつ、はい、と頷く。だが王子の顔は晴れない。依然として曇ったままだ。

『あの……？』

堪らずアルマリアが尋ねると、彼は困ったように片手で両目を覆った。

『婚礼の儀では、誓いの口づけをしなければなりません』

『……はい？』

まあそうでしょうね、と彼女は思った。??それが如何したのだらう。

と。

『いいのですか？ 貴女は私を好きな訳ではないでしょう？』

そう続けるヴィルヘルムに、アルマリアはゆっくりと目を瞬いた。

『殿下、随分と純情なことを仰りますね……』

驚きのあまり、彼女はうっかりそう口を滑らせてしまった。はっとして慌てて口を押さえる。だが、王子は気にした風もなく、ただ困ったように微笑んだ。

『いえ……私はいいのですが。貴女がお嫌でしたら、申し訳なくですね……』

『それでも、わたしは王女ですから』

分かり切ったことだ。そして、考えてはならないこと。幸い相手は奇癖と嗜好を覗けばそれなりに好感の持てる人間だ。だからきつと、いつか彼を好きになれるかもしれないし、例え好きになれずと

もそれなりに平穩に暮らせるだろう。燃えるような禁断の恋もする相手が居ないので、そこも安心だ。

『ですが……』

にこりと微笑む彼女に、しかしヴィルヘルムはまだ不安気になっている。

『口づけをするとき、貴女は固まってしまいませんか？……その、もし初めてなら』

……アルマリアは今固まった。

確かに、彼女は口づけというものをしたことがない。そもそも異性と至近距離になるような状況に陥ったことすらない。？？これは、確かに、少し不安だ。というか一応淑女にそんなこと聞かないで欲しい。ああでも危ういのも確か。ど、どうしよう。

その思いが顔に出してしまったのか、王子はやっぱり、というような表情をした。

『どうしましょうか……』

『だ、大丈夫ですよ、きっと』

『しないわけにはいきませんし……』

『……あの』

聞いていない。

アルマリアは困ってしまった。口づけのこともだが、ここぞうだうだしている暇もない。気がする。

再び声をかけようと試みたとき、ぱっと彼はこちらを見た。どつきりした。

『今、練習しましょうか』

『?????はい?!』

『ですから、本番で固まってしまわないよう、今……ああ、すみません、やはりお嫌でしょうか』

『えっ、い、いえ……! そんなことはありませんが……その、良いのでしょうか』

口づけの練習、なんて。

何故か分からないが、ときどきと胸が高鳴り、彼女はさらに困惑を極めた。だが。

『本番で固まってしまつより、ずっと良いと思つのですが……どうでしょう』

困つたように言う王子を見て、アルマリアは決心を固めた。ぐつと拳を握り締め、毅然と顔を上げる。

『ええ、では、宜しくお願い致します』

ヴィルヘルムはほっとしたように微笑んだ。

……はつきり言って、二人して色気も甘さの欠片もなかった。

だが。

婚礼、そして婚礼前のひと苦労 2

『それでは失礼して』

そう言うのが早いが、するりと手首を取られた。

優しく一撫でされ、手の甲に口づけを落とされる。びくっ、とアルマリアは震えた。やはり、少し怖い。けれど。

硬い手は次に頭の後ろへまわり、首筋を触るようにして固定される。一気に距離が縮まり、おとがいを掴まれた。くい、とそのまま上げられる。

目の前に、端正な顔があった。

ヴィルヘルムは奇行で忘れられがちだが、とても整った容姿を持っている。思わずくらりとくるほど。

身体が熱い。いつの間にか彼女は抱きしめられていた。

『で、でん、か……』

か細い声で王子を呼ぶ。何ですか、と優しい声が返ってきた。どくんっ、と心臓が跳ね上がる。これはなに。

おとがいを掴んでいた手が、頬を撫でる。慈しむように。

ふ、と唇が触れた。その瞬間身体中を甘い電撃が奔った。沸騰する。

ちゅ、と深く唇が合わさる。息が出来ない。どこかぎこちない動きで、口づけは交わされる。

食むようにヴィルヘルムの唇が動いた。ちゅ、と吸われる。心臓

が破裂しそう。これが、口づけ？

不意に熱いものが唇をこじ開けた。その、ヴィルヘルムの舌に齒列を蹂躪される。口内を舐め回される。

『っあ、んむ……っ』

堪えきれずアルマリアは喘いだ。だが、唇は、舌は、離れない。深く貪られ、息は浅くなる。ちゅ、ちゅぱ、と舌先が触れ合い、音が鳴る。

『んうっ……あ、ん』

もぞりと唇が動いた。ふっと、漸くそれは離れる。はっ、はあっ、とアルマリアは荒く息をついた。だらしなく唾液が漏れそうになる。が、目を瞑った瞬間、口を食まれた。文字通り、唇、を。

震えるアルマリアの唇をヴィルヘルムの舌先がゆっくりと、丁寧に舐めていき、唾液を食べた。

『でん、か……っ』

アルマリアは潤んだ瞳を王子に向けた。するとどこか熱を帯びた眼差しが返ってくる。

『姫……っ』

囁くように名を呼ばれる。

彼は再び、アルマリアに深く口づけた。ただし、今度は舌先は入ってこなかったが。

けれども、また甘い痺れに襲われ、アルマリアはふらりとへたりこんだ。

ああ。

これは何。

この心臓を壊そうとする、衝動は。

婚礼、そして婚礼前のひと苦労 2 (後書き)

そして嵐の前、姫君のはじまり

そこまで思い出して、アルマリアは一人、ぼっ、と真っ赤になった。白い肌なのでまるで林檎のようだ。

「でんか……」

頬を押さえたままそう呟いたアルマリアは、思いのほか甘い自分の声にぎよっとした。

ぶんぶんと首を振る。

そして彼女はぺたりと座り込んだ。

*

婚礼、誓いの口づけ。

アルマリアはそれを、仄かに赤く染まった頬で臨んだ。

観衆に見守られる中、ゆっくりと距離を近付ける王子と口づけを交わす。

深く、長い口づけは、直前にした口づけの、最後のものに似ていた。

だが、あんなに息苦しくはない。違わないことは口が触れ合っていることと、この口づけがどこかたどたどしいこと。

長い長い口づけのあと、ちゅ、と小さく音を立てて離れた唇。

そのあとの婚礼の儀のことは、あまり覚えていなかった。

……気絶しそう。

婚礼つて、面倒なだけじゃないのね。

面倒なんて、思っている暇もないほど大変なんだわ。

秘かに息を吐いた。

それでは、どうぞ宜しく願います。

「姫、大丈夫ですか」

扉越しにかけられた声に飛び上がる。

「はっ、はい！すみません殿下、今開けます」

わたわたと扉を引くと、ヴィルヘルムはまたも申し訳なさそうに立っていた。

促すと彼は室内に入り、所在なさげにドアの直ぐ前に立つ。不思議に思いながら席を勧めれば、漸く座り込む。一体どうしたというのだろう。

「姫、すみません…私は、その、」

もごもごと口ごもりながらヴィルヘルムは、しかし意を決したように顔を上げた。アルマリアはどきりとした。何か重大なことだろうか。もしか、実は秘密の恋人がいるんです、なんてことは……??

「私は、姫同様、誰かと口づけを交わしたことがなくて」

???なかった。

ほっとしつつもアルマリアはことんと首を傾げる。

「初めて、だったのですか？」

「ええ、ですから、私も不安がない訳でもなかったのです」

「……まあ。それは……」

「もちろん私は男なので、姫ほど不安だったとは言えないかもしれないのですが……」

「それでも、不安でしたと?」

「はい。ですから、直前に口づけを交わせて、良かったと思っています」

ぽかんと彼女は彼を見上げた。

「まあ。そうなんですか」

そういえば、少しぎこちない、??慣れていないような、仕草だった。

……だったが。

「そ、それであれですか? 信じられません」

「す、すみません」

「あ、いえ、責めているのではなく」

それにしても上手かった、と……何を言ってるのだ自分は。アルマリアは赤面した。

「……それに、こんなに貴女を……」

アルマリアはぱつと頭を上げた。ぱつりと落とされた眩きが、よく聞こえなかった。

「殿下? すみません、もう一度お願い出来ますか?」

「い、いえ、なんでもありません」

少々慌てたような口調だ。訝りながらも一応は納得する。

「それで殿下、」

「ああ姫、私のことはヴィルヘルムで構いませんよ。殿下は貴女もそうでしょうか？」

「え……」

吃驚して口を覆う。それから再び真っ赤になって、小さく呼びかける。

「ヴィ、ヴィルヘルム、さま」

「慣れたらヴィルとお呼び下さい」

にっこりと微笑まれ、這々の体で頷く。心臓が、保たない。

「あ、でしたら、わたしのことも……」

「アルマリアさま、と？」

「アルマリア、とお願いします」

アルマリアは丁寧に頭を下げた。

ヴィルヘルムは了解したとばかりに笑う。

「それで、先程言いかけたことは何ですか？」

「あ、ええ、その」

口ごもり、視線を泳がし、ちらりと王子を見上げる。

「今日から私は貴女の妻ですが、どうやって過ごせば良いのでしょうか」

「え？」

「つまり、昼間は部屋に居て、夜は、でん……ヴィルヘルムさまと

「一緒に寝室にゆけばよろしいのでしょうか」

ぴたり、と王子が固まった。

「は、ああ、その……」

「妻とは何をすれば良いのでしょうか。わたし、いまいちよく分からなくて。とりあえず、夫の添い寝をすれば良いのでしょうか」

再び、王子が固まる。

「あ、そ、そうですね……恐らく、それで構わないかと」

微笑まれ、アルマリアはぱっと花咲くように微笑んだ。

「そうなのですね！では寝室に参りましょう。もう夜もふ更けて参りましたし」

「そ、そうですね……」

アルマリアは何故か放心気味のヴィルヘルムの手を引いて、寝室へと向かった。

それでは、ご静宜しくお願いいたします。(後書き)

幕間 ? ヴィルヘルム王子の胸中2 ?

これは一体どうしたことが。

ヴィルヘルムは隣で背中を向けて眠る少女を横目で見ながら、ぼんやりと思った。

すやすやと至って健やか、包まずに言えば危機感も色気もない寝息が届く。

どうやら、と彼は思考する。

どうやら彼女は、あまりそういう教育を受けていないようである。というか、そもそもエビリスの秘されたこの姫は、どこぞの国に嫁ぐという予定がなかったのではなからうか。

そんな疑惑まで浮かび上がってくるほどのこの少女は無防備だ。

ふう、とヴィルヘルムは溜息をついた。

もうとくに消灯したため、部屋は薄暗く、顔の輪郭すら定かでない。

そんな中、このリュファニア聖国の王子は微かに頬を赤く染めていた。

今まで散々遺体に白骨死体を愛でてきた彼だが、生身の少女がこんなに間近で、しかも同衾?? 正確に言えば添い寝だが?? されることになるうとは。結婚したのだから当然なのだが、なれない。

エビリスの白雪姫。

ふつくと小さな唇は薔薇のよう。さらりと寝台に流れる髪は夜闇の如く艶やかに美しい。日に焼けることなど知らぬ気な白い肌は、非常に目に痛く、心臓に悪い。

大昔、その微笑で世界の全てをひっくり返したという、神の愛し子。その貴人よりも美しいのではないかと錯覚するほどの鮮烈かつ

清冽な美貌。

白雪姫、そう、各国に認めさせるほどの。

(……それにしては、従順過ぎるような気もするが)

死体愛好家と揶揄される自分に、文句も言わずに嫁いでくるとは、そう思ってから、彼はすぐさまその考えを改めた。??従順、とは違うように思う。綺麗で深い瞳は決して愚かなようにも、ましてや諦めを含んだ憂いのようなものも感じさせなかった。

ただ、その色の深さに囚われそうになった。

「……ん、……く、ろ……」

(……くろ?)

ふいにアルマリアが吐いた寝言に飛び上がりそうになりながら、怪訝に首を傾げる。くろ?

「……姫、くろとはなんですか?」

聞こえるはずはないと分かっているが、ついそう尋ねてしまう。暫く耳を傾けてみたが、返事はない。

思いもよらず毒気を抜かれたヴィルヘルムは、ふっと苦笑して毛布を押し上げた。

「おやすみ、姫。?????良い夢を」

すう、と柔らかな寝息に。

溶けるように彼は目を閉じた。

緩やかに心地好い眠りの海へと落ちてゆく。

「…………くる…………は…………な、ので、す…………」

それ故彼はまるで遅れた返事のような少女の寝言を聞き逃したの
だった。

朝の目覚めに鳥と侍女

ピチチチチ、という朗らかな鳥の声でアルマリアは目を覚ました。

未だはつきりしない頭で、ごしごしと瞼を擦る。くぁあと小さく欠伸をして、するりと寝台から下りる。昨日と違い、思いのほかすつきりとした眠りにつけたことを不思議に思いながら、なんともなしに髪を指先で緩く梳く。

はた、と彼女は動きを止めた。

「あら……?」

ぱつと口元に手を当て、瞬きをする。一気に眠気は霧散した。

殿下?? ヴィルヘルム様が、いらつしやらない。

たちまちアルマリアは不安になった。まさか寝相の悪さで追い出してしまったのかしら。いえ、そういえば私の寝相ってどうなのかしら。というか本当にどうしてヴィルヘルム様はいらつしやらないのかしら。まだ朝は早いですし、もう起きたなんてこと、あるとは思えないけれど。

などと一人ぐるぐる悩んでいると、控えめなノックが聞こえてきた。

「姫様、お召しかえに参りました。お起きでいらつしやいますでしょうか?」

「は。はい。どうぞお入り下さい」

何処か聞き覚えのある声に首を捻りながら入室を促す。すると、「失礼します」と滑らかな口調で言って、赤毛の侍女がしずしずと入ってくる。その顔を見て、アルマリアはあつと声を上げた。

「あなた、私りがきた日に案内をしてくれた……」
「覚えていていただけで光栄です」

ヴィルヘルムを大いに叱り飛ばしていた少女は、はにかむように微笑んだ。

野に咲く可憐な花のような、羨ましいほど可愛らしい笑みだった。結われた赤毛はアマリスのような綺麗な紅。長い睫毛に覆われた瞳は琥珀色。あの日は眠さと一応の緊張とで見えていなかったが、随分綺麗な容姿の少女だ。

アルマリアはついじつと魅入ってしまった。——なんて可愛らしいの。

質素ながら品のある侍女服の裾を摘み、彼女はふわりと腰を屈めた。

「エンナと申します。不肖ながら、本日より姫様付きの侍女となりました。どうぞ宜しく願います」

アルマリアは目を丸くした。ついで、ゆつくりと優雅に一礼する。

「こちらこそ、これからお世話になります。どうか宜しく願いますわ。ですが……あの、宜しいのでしょうか。確かあなたはヴィルヘルム様の侍女と窺っておりましたが」

ぴき、とエンナの表情が固まった。その顔色が氷点下に染まったかと思えば、ぎりぎりぎり、と歯軋りの音が聞こえてきた。え、と驚いていると、

「——腐れ縁なのですよ。やっと……やっと離れられるのです！あの死体馬鹿が！」

地獄の底から呻くように彼女は唸った。

本来なら、不敬ですよとでも嗜めるべきなのだろうがどうにも言い難い。というよりアルマリアはあまりの剣幕に圧倒されてしまった。そんなに大変だったのだろうか。

(まあ…死体が何よりもお好きというお方ですものね……)

お付きの侍女としては卒倒したくなる嗜好なのだろう。恨みつらみが最後の一罵声に込められていた気がした。

そういえばヴィルヘルムは本当に何処にいるのだろうか。

「あの、エンナ？」

「！ し、失礼致しました。何でしょうか」

「ヴィルヘルム様はどこにおられるのでしょうか」

ことり、と首を傾げる。エンナは再び青くなった。

「あ、ええと……そのう、」

途端に齒切れの悪くなったエンナの様子から、アルマリアは何となく思い至った。

(ああ……死体を探しにいかれたのかしら)

本当に好きなのね、と少々呆れる。

だが、それ以外ではこれといった面倒な性格ではないようだから、アルマリアは実をいうととてもほっとしていた。気を遣うのも、愛を捧げるような真似をすることも、得意ではない。妃でいることだけを望まれているなら、それほど分かりやすく楽なことはなかった。――なんて、不謹慎なことを言っては駄目ね。

ともかく彼女はもう王子のことは追求しないことにした。

「ではエンナ。着替えを手伝っていただけますか？」

ふわりと微笑って言うと、エンナは頬を赤らめながらほっとしたように頷いた。

朝の目覚めに鳥と侍女 2

エンナは腕の良い侍女だった。

複雑に結い上げた黒髪に、白薔薇を挿し、それを彩るように真珠と紅玉の髪飾りを連ねていく。何枚も淡いレースの布を重ねた上衣に、滑らかな翠のドレス。裾から影のように覗く光沢を持った黒の衣がはつと目を惹き寄せる。

「いかがでしょうか」

耳元に降った声に、アルマリアは微笑んだ。

「素晴らしいわ。ありがとうございます」

お世辞ではなく、彼女の腕は良かった。『白雪姫』たるアルマリアの美しさを嫌味でなく引き立てている。アルマリアは実を言うと、自分の容姿があまり好きではなかったけれど、エンナのおかげで今日はそんなに気にならなかった。本当は、いつも着替えるとき、鏡を見ると、うんざりしていたのだ。

「勿体のうお言葉、光栄の限りでございます。??ではアルマリア妃殿下、本日のご予定を申し上げます」

にっこりと嬉しそうに笑いながらきっぱりとしたエンナの言葉に、アルマリアは笑顔のまま固まった。

「……………え？」

*

近衛隊第二部隊、通称「検死隊」隊長リカルド・デューヒエンは己の主を胡乱な眼差しで見つめていた。

「……殿下」

「んー？」

「で、ん、か」

「だから何だ？」

「あんた、何してんですか」

リカルドの守護すべき主ヴィルヘルム・クロツセルⅡリユファニアがだらしなく頬を緩めたまま振り向く。一国の跡継ぎともあるうものが、地べたに直に座り込みながら。

「何って、検死じゃないか」

「いやそれは分かりますけど」

「じゃあ何だ。今忙しい」

「検死なら私がやりますよ！あんた、エビリスからいらっしやっただアルマリア姫の傍にいらなくて良いんですか？！」

「何でそうなる。??おお、この青白く、こけた頬、生気のないかつ開いた眼、仄かにこびりついた血……なんて美し」

「あああああやめて下さいやめるこのアホですかあんたはっーかホント姫のところに行って下さい！」

うつとりと死体を眺めやる主に、リカルドは総毛立ちながら頭を

掻きむしった。この王子は本当に、何年傍にいてもとんでもない記憶しかない。

傍で土を調べていた部下達は、何ともいえない表情でちらりとヴイルヘルムをうかがっては目を逸らしている。他の部隊のものよりは慣れているといえ、異様なことこの上ない。

そんな彼は、煩そうに眉を寄せてから、じろりとリカルドを睨んだ。

「一応言うが、あの方は今、妃殿下だ。彼女は彼女でやることがある。おそらく、今エンナが事細かに伝えているだろう。嬉々として行ってもどうしようもないだろう」

思いのほか冷静な応えに、ちょっと詰まる。が、リカルドはすぐに無然と言い返した。

「それはそうかもしれませんが、せめてかの方が目覚めるまでお傍にいてさしあげたら良いでしょう。何でまた朝っぱらから」

「……私にも理性くらいはある」

「はあ？」

また意味のわからないことを。

死体を見てはうつとりと頬を染めゆるめている男のどこに理性があるのだ。

思いつきり疑わしそうに見返すと、王子はひとつ咳払いしてからゆっくりと立ち上がった。

高価そうな袖をまくりあげ、ぐるりと辺りを見回す。

「それに、」

低い声で彼は呟いた。

「ここ数日続いて現れる、彼ら変死体の死因を確かめなければなるまい」

リカルドは難しい顔でうなずいた。

朝の目覚めに鳥と侍女 2 (後書き)

警邏隊とリカルド隊長

エルストリッド五番街。扇子屋サルストリトス裏。

首筋に小さな穴二つ。そして腹から吹き出る臓物。

生きていたころはさぞかし愛でられていたのだろう、乱れたその髪は未だ艶を持ち、肌はあかぎれ一つなかった。

リカルドはそれを、全く顔色を変えず観察し、ふと目を伏せた。すると、同様に『検死隊』の隊員達も、揃って目を伏せた。手をこっそりと合せるものまでいる。

それを、ヴィルヘルムは何も言わずに見、己も同じように、そうとは分からないよう黙祷し、??暫くしてから静かに口を開いた。

「……： 集団墓地の手配、は必要ないな。????? 保護者がきた」

複雑そうな声に、リカルドが振り向く。視線の先では息を切らせた老夫婦が走ってきていた。そして、そのすぐ後ろでつかつかと、きつい眼差しで歩いてくる男。

「マリーシャ！」

青ざめた顔で老女が叫んだ。驚くべき早さで駆け寄ったかと思えば、ふらりと気を失う。それを慌てたように、老人の腕が支えた。嫌な光景だ、とリカルドは思った。

ざり、と石畳を踏んで王子が立ち上がる。

急に生を失った孫を惜しむ姿はもちろん、?????

「殿下。不肖の娘のせいで、お手をわずらわせてしまい申し訳ありません。まったく、躰がなっていないかったもので」

「??そうまるで娘のことをゴミ屑のような眼で見る親の姿が。」

(……くそ、)

忌々しくて堪らない。何を言っているのだ、謝るやつがあるか、こついう場合悲しむのが親だろう。そう、怒鳴りつけてやりたくない。

だが、してはならない。

そんなことをして、調査を滞らせるわけにも、労力を無駄にするわけにもいかないのだ。

「いや、そんなことはない。??楽にしてくれグルーツ子爵。二、三お聴きしたいことがある。よろしいか?」

ヴィルヘルムは薄い笑みを浮かべて、優雅に腕をなびかせた。こちらへ、と示しているのだろう。過度な仕草は、彼が密かに怒りを携えているように見えた。故にリカルドは少々ひやりとした。

この主は、いつも何をするか分からないから嫌なのだ。

警邏隊の人間と協力して、ゆつくりと死体を運ぶ。なるべく姿が変わらないよう、慎重に。

ヴィルヘルムは検死隊の数人に何事か命じ、警邏隊の隊長らしき男の肩を叩いて被害者の保護者達のもとへ向かう。リカルドはその様子を確認してから、副官のベルクに王子の傍で護衛をするよう言ってから、死体の方へと向かった。

「まだお若かったのになあ……お可哀想なことだ」

ぼつりと零すような声に、目をしばたたかせると、それは顔なじみの警邏隊の男のものだった。

「ビル、ここ担当だったんですか」

「おやりカルドさん。そうか、あなたはヴィルヘルム殿下の近衛隊長だったな」

「ええ、……まあ」

不幸なことに。

「お知り合い、だったのですか？」

ビルは上級貴族ではないが、下級貴族の、神職の家系の者だった。それで警邏隊に入ったのだから相当の変わり者ではあるが。

だが、神職の家系である限り、上級貴族と関わることも少なくない。ここは、聖王国なのだから。

「いいや、つい最近、隊長??うちの隊長と話しているのを見たくらいだよ」

ビルはしょんぼりと肩を落とした。

何だか妙な哀愁が漂ってきて、リカルドはつい彼の背中を慰めるように叩いてしまった。

以前知り合ったとき以来、どうしてか彼とリカルドは馬が合ってしまい、何故か未だに仲がいい。

そして何故かいつもリカルドはビルを慰めている。何でだ。

「いつもすまんなあ、リカルドさん」

「そんな、それは言わないで下さいよ」

……俺は孫か、とリカルドはちょっと思った。

それから痺れを切らした部下に呼ばれるまで、リカルドとビルは
もそもそとしみったれた会話を買賣し合ったのだった。

警邏隊とリカルド隊長（後書き）

最後の会話はアレですね、おばあちゃんとおばあちゃんを背負った孫の、

「いいつもすまなあいねええ……」（よぼぼ）

「もう、それは言わない約束でしょ……！」
であってるかと！

……失礼しました。

お姫様と語学と侍女心

結婚てほんつとに面倒なのね。

アルマリアはうんざりしながら聖書を繰っていた。エビリスとリユファーニアは同宗教圏だが、それぞれの国で微妙に内容、というか文章が異なっている。さらにリユファーニアは、聖王国と名乗っているだけあって、公用語ではなく独特のリユレス語で記していた。それほど信心深い方ではないアルマリアとしては、正直面倒臭かった。だが、まあこの聖書は今本来の目的では使われていない。今は聖書の時間ではなく、リユレス語の講義の時間である。

??そう、リユレス語。

王子妃として教育される中、一番面倒で厄介な科目がこれだった。公用語と違い、分節事になんだかよくわからないなんちゃら詞がついて、かと思ったら主語が真ん中にきたり、修飾語が単語を一つ越えておいてあったり。

さっぱり分からない。

筆ペンをインクに浸し、リユレス語の聖書を量産された紙に四苦八苦しながら書き写す。一頁写すごとに手を止め、悩みながら訳していく。……あっていない気がするのは、多分気のせいではない。

『アルマリア様、おできになりましたか?』

柔らかに、しかし容赦なくリユレス語で教師が訪ねてきた。

ため息をつきつつ、『ええ』と同じようにリユレス語で返す。それなりに予備知識はあったし、頭の弱い方ではないアルマリアは今日一日で何とかかんとか、教師の噛んで含めるような語調のおかげもあってか、簡単なものなら理解し使用することが出来るようになった。簡単なものなら、だが。

ふくよかな女性教師はにっこりと微笑み、

「では、本日のリュレス語の講義はこれで終わりました。お疲れ様でした」

なめらかな公用語で言った。

*

「大丈夫ですか、アルマリア様」

よろけるアルマリアを慌てて支え、エンナはこっそり彼女に同情した。

休む暇もなくクロツセル「リュファーニア聖王家の系図やら歴史やらを叩き込まれ、この国の慣習を習わせられ、独特のダンスやきたり、儀式や礼儀作法を仕込まれる。これがただの村娘であったなら裸足で逃げ出していたことだろう。だが立派な姫君であり、歴史を積んだエルビスの王族である彼女は、素晴らしいほど綺麗に吸収していた。この巨大な城の案内にも平然としていた。エンナとしてはこんなでかい城がいくつも世にはびこっていることは信じられないというか信じたくない現象だが、王侯貴族にとっては大したことではないのだろう。

聖王家の人間の居住する宮や、王と王妃が休む宮も、エンナからするとどこのバカが建てたんだ、と問いつめたくなるほど広く迷いやすくきらしい。

（そうだ、アルマリア様を光苑宮まで案内差し上げなきゃ……）
でも、まだ講義も残っているし。

午後でいいか、と考え直し、エンナはアルマリアの背を優しく撫でた。

「う、ごめんなさい。手間をかけさせてしまいました、ね……」
「いえ、こんなに詰め込まれたら当然ですよ。少し、休まれますか？」

アルマリアなら酷く文句を言われることはないだろう。というよりここまで弱音を吐かなかった彼女がすごい。意外に剛胆というか、根性があるというか。

雪解けのような、今にも消えてしまいそうなひとなのに。

「いいえ」

はっと顔を上げるとアルマリアは、異国の姫は穏やかに微笑んでいた。

先ほどまでよるめいてげっそりしていた様子など微塵見えない。初めて会ったとき同様、水面のような静かな眼差し。呑み込まれそう。

アルマリアはとても綺麗だった。
完璧なほど。

流れる黒髪は星が瞬くように美しくて。
なめらかな白い肌は抜けるようで。

そして、その、朱唇。
毒を呑むような。

「遅れてはダメなのでしょう？」

にっこりと、あでやかに苦笑。

エンナはつい、

「アルマリア様にはきつと赤薔薇がお似合いですッ！」

侍女魂を出して叫んだ。

……お姫様ってすごいなあ。

こんな何でもない場面で、あっさり臣下を魅了するんだから。
妙な感心をして、エンナは怪訝な表情をするアルマリアを促した。

??次は国歴史だ。

街中の聖女 1

「素晴らしいですわ、妃殿下」

ふくよかな頬を上気させ興奮気味に唾を飛ばす芸術学の教師に、アルマリアは気のない様子で。はあ。と呟いた。

ひたすらこの国の歴史?????それこそ国起こりから始まる国歴史では寝ないよう必死になり、宮廷舞踊ではリュファアーニア特有の滑らかかつ速いステップを失敗しないように必死になり、帝王学で仰天するような講義を聞き、漸く一息つけそうな芸術学になったと思ったら、いきなり絵を描かせられた。

「そう、でしょうか」

しかもヴィルヘルムの肖像。

アルマリアはうる覚えの表情をぺたぺたと筆で修正しながら、こつくりと首を傾げた。??まったく似てない気がするのだけれど。

「そうですとも！見事な筆致でございます。わたくし、感動致しました…！まさかこんなところでこのような才能と出会えるとは……」

くっ、とハンカチで目元を押さえる教師。

「……」

そうですか、と適当極まりない相づちを打って、アルマリアは講義の終了を待った。

あてがわれた部屋に戻り、髪を縛る髪飾りを取ろうとして、それがエンナが結いつけてくれたものだところまで思い出し、慌てて手を引っ込める。ふう、と小さく息をついてからふわりと彼女は背後を振り返った。

「城下に下りたいのだけれど、いかがかしら？」

音もなく佇んでいたエンナは、冷や汗をかきながら一も二もなく頷いた。

いい加減うんざりしているだろうアルマリアの美しい微笑は妙な覇気を滲み出していて、？？つまり一侍女に逆らえるはずもなかったのだった。

*

深い緑のドレスは、町娘のような質素さで、およそ姫君が着るようなものには見えない。複雑に結び上げていた髪も今は肩のあたりで緩く縛り、花飾りを一つ二つ、ちょこんとつけているだけである。それでも多分に上品な見目の彼女は、機嫌良さそうに軒並み連なる店を眺め歩いていた。敷き詰められたクリーム色や赤茶色の、不揃いな石畳を灰色の靴で踏みしめていく。

「あ、アルマリア様。いつたいどこにおゆきになれたいのです?」
「あら、私はここに來たばかりなのですよ? 案内して下さいな、エンナ」

ふふふふ、といかにも品良く笑い、精緻なレースが除く扇状に広がった濃緑の袖を口元にあてる。えええっ! とエンナは目を剥いて驚いた。アルマリアはここにこした。にここにここにこ。

こくん、と可愛らしく無言で小首を傾げた姫君に、エンナはついに根負けした。

「わ、分かりました。このエンナ、誠心誠意、真心お込めして案内させていただく所存にございます!」

高らかに宣言する侍女にアルマリアは目をきらきらさせた。なんて格好良い侍女なのかしら。

「では、まず…ここを左に曲がったところの、エルストリッド五番街に向かいますよ。あそこは宝飾店や扇子屋や、お菓子のお店がたくさんありますし……、っと」

人差し指を立ててエンナが言ったとき、丁度死角になっていた位置にいた女性と、彼女の肩がぶつかり合った。軽い衝撃に、両方が微かによろめく。アルマリアは目をしばたかかせて、エンナの身体を軽く支えたあと、ぱっと女性の顔を窺いみた。

「申し訳在りません、大丈夫ですか?」

侍女の不手際??とまでいかないが、似たようなものだろう??

を主人が請け負うのは当然のことである。だが、アルマリアは特に深く考えずにそう謝っていた。生来そういう性分なのだった。つまり、さつさと謝るに限る主義。

「……ええ、大丈夫です。私の方こそすみません」

小さな、硝子を擦り合わせたような高めの声で女性が呟く。長布で目元が隠れているせいで、いまいちどんな表情をしているのか窺えなかったが、鮮やかな紅唇は穏やかな笑みを形作っていた。

アルマリアはほつと胸をなで下ろし、もう一度謝罪してから「それでは」とまた歩き出した。

ふわりと野薔薇と木苺の匂いが鼻先を掠める。その匂いの、微かな違和感にぴくりと眉を動かせるが、アルマリアは首を振ってその感覚を霧散させた。……きつと、気のせいだわ。

ゆっくりした歩調で進む彼女の横を、エンナがぱたぱたと追いかけた。

ちなみにエンナは「すみませんすみませんすみません！」と女性とアルマリア両方に謝り倒しだった。

街中の聖女 2

この街が聖なるものだと言ったのか。

この汚泥に塗れた国の、もつとも穢れを溜めた街を。

誰が聖なるものなどと嘯いたのか。

*

「あらヴィルヘルムさま」

ばったり、とはこういうことを言うのだろうか。

小難しい顔で考え込んでいた夫を見つけ、アルマリアは小首を傾げた。

「こんなところにいらっしやっただけですね」

「姫、?????いえアルマリア。貴女こそどうなされたのです、こんなところに」

驚いた様子のヴィルヘルムがこちらへと向かってくる。アルマリアも器用にドレスの裾をさばいて、足早に近づいた。

ヴィルヘルムの傍らにひかえていた青年も吃驚したように目を剥く。それから慌てたようにあやふやに腕を動かしたが、アルマリアは特に気にせずヴィルヘルムの傍まで行った。

「城下を案内していただいていたのです」

「案内？ 誰……ああ、エンナにですか？」

多少ぼかんとしたまま、ヴィルヘルムはエンナを見、それでも目を白黒させながら聞いてきた。ええ、とにこやかに頷く。本当に奇遇なことだ。まさか出かけていた彼と出会せるとは。

ほんのり喜んでいると、持ち直したらしいヴィルヘルムは少し、眉をひそめた。

「アルマリア、ここは、あまりいらっしやらない方がよろしいかと」
「え？ なぜですか」

「私にとってはとても良い場所なのですが、アルマリアのような女性にとってはおすすり出来るような場ではありませんね」

何故かヴィルヘルムの言葉を聞いた青年がそつと目を逸らした。というか顔ごと逸らした。げっそりした表情である。女性ではなくてもおすすりしません……とか何とか呟いている。

アルマリアは再び首を傾げた。

「そんなにおかしな場所なのですか？」

「あ、アルマリア様、私ものすごく嫌な予感がするのですが！ ここは王子がおっしやる通り引きましよう！」

「何を武人のことを言っているのです、エンナ」

後から追いついてきたエンナは真つ青だ。くいくい、と袖を引っ張ってくる。どうしたのかしら。怪訝な気持ちでヴィルヘルムに続きを促すが、彼も曖昧に笑うだけで答えてくれない。

ますます不思議になってきたとき、ヴィルヘルムの後ろからアルマリアの日常ではなかなか耳に出来ないような大声が響いた。

吃驚して顔を横倒しにしてそちら側を窺う。

警邏隊の制服に身を包んだ男たちと、近衛隊の制服を着た青年たちが何かを数人係で運んで来るところだった。

あの、運ばれている白いものは何かしら。

そう思った瞬間、彼らの顔がしまったと言わんばかりに苦まる。ふわりと風が吹いた。

「つつつつなああああああ！」

耳元でエンナが盛大に叫んだ。

アルマリアは白い布の下からわずかに覗いたのは。

今が花と言わんばかりの少女の、?????死体、だった。

「……………まあ」

失神しそうな様のエンナの背中を宥めるようにさすりながら、アルマリアはぽつりと呟いた。

茶金色の髪は赤く斑に染まり、肌は青白い。そして何より、その腹から臓物が吹き出していた。

なんてこと。

ただ死んだ、というわけではないのだろう。

明らかに何かに襲われた『事故』である。

もしくは故意に襲われたのか。

(どちらであったとしても……………)

なんて惨い。

「すみません、アルマリア。もっと早く促すべきでしたね」

何を、などという無駄な問いはしない。

だが、アルマリアはゆっくりと、けれど強くかぶりを振った。

「いいえ。そんなことはありません。……エンナには申し訳ありませんでしたけれど」

慌てて白布を被せ直す男たちを見ながらそう言うと、ヴィルヘルムは僅かに眉を上げ、彼の隣にひかえていた青年は再び目を剥いた。……そんなに驚くことかしら。

「気丈ですね」

「そんなことはありません。ですが、私はエビリスの人間なので。

……それより、この方は一体どうされたのですか」

躊躇いながらも単刀直入に切り込んだ。ヴィルヘルムは一瞬沈黙し、困ったような顔で口を開く。

「……何者かに襲われた模様です。後ほどお知りになるとは思いますが????最近、多発しているのです、こつという事件が」

アルマリアは微かに瞬いた。

「……まあ」

思ったより大変だわ。

口元に手を当て、しばし考え込む。ふわり、と薔薇の匂い。何か

野に芽吹く実の匂いもした。??これは、何の匂いだったかしら。思いを巡らし、だがすぐ停止させる。いいえ、今はそうではなく。ぱっ、と濃緑のベルベットが翻る。しゃらりと精緻な薔薇を象ったレースが足首にまわりついた。

「アルマリア？」

「弔いを」

ぎよっとする男たちを無視し、白布の前に膝をつく。二度指を複雑に動かし、きゅっと組み合わせる。

「????????ご冥福を、お祈り申し上げます。どうか貴女にユレリヤ神のご加護があらんことを」

死はそんなもので安らぐものではないと、知ってはいるけれど。

「??????殿下！」

簡潔な呼びかけに、アルマリアとヴィルヘルムの両方が振り返る。呼んだ当人は面食らったような顔になり、

「あ、す、すみません。ヴィルヘルム殿下の方です」

恐縮そつに謝った。

街中の聖女 3

くたりとよろめいていたエンナだったが、静かに手を組み合わせる主の姿によろやく己を取り戻した。

「あ、アルマリア様……」

おろおろと呼びかけて、自分も同様に冥福を祈ろうとしてが、何故だか傍まで近づけない。

何か、踏み入ってはいけない領域が、石畳三つ向こうで展開しているようだった。

やがてゆつくりと濃緑のドレスが縦に流れる。白く細い指が袖の中に隠される。

アルマリアの背後ではヴィルヘルムが目を閉じていた。エンナは瞬いた。なんて珍しい。

?????この国の人間は、誰とも知れず殺された相手に黙祷することは少ない。

平民や商人ならともかく、貴族???上級階級にいる人間は、不慮に弑された人間を厭うのだ。

ただの事故ならまだしも、このような原因不明の事件の被害者は、葬式の時まで祈られることはない。いや、葬式の時さえ祈られないこともある。

庶民のエンナとしては眉をしかめたくなるような下らぬ陋習だ。気をつけていなかったからだとか、神に許されぬ死に方だというからだそうだが……そんなもの、当人のせいだけではないだろう。

けれど、そんな悪習を知らぬ異国の姫は躊躇いもなく膝をつき、そして元主でありにつくき幼馴染みである変態王子は黙禱している。

……違う。

そういえば、この男は、昔から死体を溺愛しているが、だからこそ?????なのかなんなのか、死者に対して敬意を払わなかったこととはない。ただ、ある時期を堺にそれを隠すようになっただけだ。

エンナは何だか嫌な気持ちになった。相変わらず好きにはなれないが、嫌いにもなれない。幼馴染みとはそういうもので、大抵相手のことを知り尽くしてしまうから、よっぽどのがない限り大嫌いにはなれない。ああ忌々しい。せめて一国の王子として、死体を溺愛するあまり自分の近衛隊を『検死隊』などに様変わりさせてしまつような暴挙は控えてほしい。本当にアルマリア様つきになれて良かった。

「?????なに?」

リカルドが深刻そうに報告した内容に、ヴィルヘルムがきつい声で問う。アルマリアの両耳を押さえて。

……。

「ちょっと王子！ 何なさっているんですかレディに対して!」

「……エンナ、君がいると話が面倒臭くなるからちょっと向こうに行つててくれないかな」

「んなんなんななつ??」

「まあヴィルヘルム様。エンナはとても素晴らしいのですよ？ 分かつていらつしやるのでしょうか？ そんなことおつしやらないでください」

「あ、アルマリア様……!」

「アルマリアがそうおっしゃるなら」

なんて素晴らしい主なんだ！

エンナは感動で涙が出そうになった。まさかあの実は傍若無人主を諫めてくれる人間がいるとは。

「?????ところでヴィルヘルム様、隊長様」

ふと、硝子細工の鈴を転がしたような、耳に心地よい声が呟く。水を溜めたような透徹とした眼差しは、両方に呼びかけたにもかかわらず一人だけを射抜いている。

「それでは、明日その森に行かれるのですか？」

「ええ、そのつもりですが……」

「……あの、妃殿下。私めに敬称などいりませぬので」

訝しげなヴィルヘルムに、困惑しつつ冷や汗をかくリカルド。エンナは軽くリカルドに同情した。彼とも所謂腐れ縁、つまり幼馴染みで、裏返せばそれは王子とも幼馴染みだということである。ヴィルヘルムの性格は熟知しているし、またどれだけ彼に振り回されたことか。リカルドはエンナ以上にヴィルヘルムの傍にいたことが多かった???というか今もそれは継続されているので多いといえるべきか???ので、エンナより被害度は大きい。

「では、隊長殿、と」

「いえ、あの」

「……お嫌ですか。それではお名前をお聞きして良いでしょうか？」

幾分くだけた口調でアルマリアが首を傾げると、リカルドはぼっ

と近衛式の敬礼をして慌てたように名乗る。

「はっ。ええと私はリカルド・デューヒエンと申します。妃殿下にお名前を捧げられること、光栄の極みにございます」

「ええと、私はアルマリアです。どうぞよろしくお願いしますね、??リカルド、さん」

「はっ」

リカルドが深く腰を折る。周りの隊員たちも隊長に倣うように腰を低くする。アルマリアは困ったように微笑した。おそらく彼らがただ挨拶しているわけではないと、理解しているからこそその苦笑だろう。警邏隊の人間はどうすればいいのか分からなさそうに手持ち無沙汰に彼女たちを見ている。

エンナは主同様苦笑しかけて、ヴィルヘルムがうんざりした表情なことに気づき、つい「ざまあみる」と思ってしまった。

ぼつ、と何かが鼻先を濡らした。まばたいて空を見上げる。決して暗くはなかったそこには、暗雲が低く垂れ込めていた。徐々に湿気を帯びて来る空気に思わず眉をしかめる。降られそうだ。

「???では、」

アルマリアはたおやかに微笑っていた。

いつものごとく。

大昔から語り継がれる神の愛し子のように。
美しく。

「私もおとします」

……珍しいことにヴィルヘルムが目を剥いて、リカルドが泡を吹いた。

もちろんエンナはさっさと現実逃避し、幼馴染み二人の珍しい光景を堪能していた。

*

分かっていらっしやるのでしょうか、という妻の言葉に彼は心中でひっそりと苦笑していた。

彼女は、ただ従順なわけでも、「お姫様」なわけでもない。見透かすような、だが映すだけで何も受け入れはしないような、深く透明な眼。

相変わらず彼女のその眼を見るとうつかり囚われそうになる。

(死体だったら本当に文句なしなんだが……)

聡く美しくそして世を知らぬ白雪姫。

そんな彼女が、まさかかようなことを言い出すとは。

自分としたことがひっくり返りそうになった。

「……姫？ 何、を、おっしゃいました？」

「ええ、ですから」

ぼん、と織手が叩き合わされる。絹をよりあわせたような滑らかな白。

「私も、その加害者の気配がある?????きなくさい、森へいきま
すね」

市井の言葉をゆうゆうと操りながら、アルマリアは何でもないこ
とのように言った。

*

手弱女の如く微笑しながら、アルマリアは己の冷静な部分が警鐘
を打つのを自覚する。

噎せ返るような甘い花の匂い。野の実の匂い。そして、この死体。
ぼつ、と。

一粒、雨が石畳を濡らした。

街中の聖女 4

「あら」

雨が降ってきた。

アルマリアはぼつ、ぼつと勢いを増す雨粒が降る空を仰いだ。

ぼつ、ぼつ。

ざあ、と。

瞬く彼女の瞼に、睫毛に、雫が降っては弾け跳ねる。

ぎしつ、と固まっていたエンナが慌てたように駆け寄ってきて、自分の上着を頭に被せようとするのを、アルマリアは苦笑して断った。

故国ではよく雨が降った。

ふと窓の外を見ていればいつの間にか雨の筋が出来て、庭にいればそれは彼女を濡れ鼠にする。

アルマリアは、それが決して嫌いではなかった。
だから。

「大丈夫、慣れていきますから」

不思議そうな顔をするエンナが可笑しくて堪らなかった。

リカルドはアルマリアが言った言葉を理解出来なかった。
というか信じたくなかった。

「ま、????ひ、姫、待ってください」

「リカルド、妃殿下、だ」

「ええい煩いですね何細かいこと言ってるんですか?????ていいんですか！ あなたの伴侶でしょうが！」

「駄目だし出来なさそうだから諦めているんだろう」

はあ、とヴェルヘルムがため息を吐く。

リカルドは戦慄した。

（こ、この周囲に迷惑をかけまくりしかしそれをまったく気にもとめずまるで爽やかに笑っている傍若無人王子が！ 諦め？！）

そりゃあ変死体が出てもおかしくなかるうよ！

そんなリカルドの心の叫びには気づかず、彼はまるで普通のヒトのように、首を抑える。こき、と鳴らして、優雅に雨の中というに足音ひとつたてずにアルマリアへと近づく。

「アルマリア」

「はい」

ふわり、と春の花のように柔らかかに、清艶に、美しく彼女は微笑む。

不覚にもリカルドはどきりとした。

何か侵し難い色をたたえた瞳は否を唱えさせぬ真綿のような威力があつた。つまり。

「もしかしたら私はあなたを守れないかもしれませんが。それでも構いませんか？」

「まあ、ヴェルヘルム様」

雪のように白い手が赤い唇を押さえる。
困ったように。

「当たり前ではありませんか。そこまでずつずつしくありません」

こうなるのは当然のことなのだろう、とりカルドは半笑いした。

……クビに、なったらあの変態王子、一生恨んでやる。

*

雨を洗い落とし、湯浴みをしたばかりで湿った黒髪を丁寧に拭い、清潔な夜着を押し付ける。

新たな主はやっぱり苦笑して、少し申し分けなさそうに着替えを頼んでくる。エンナは、喜んで、と微笑み、無駄のない手つきで着替えさせ、終ると茶器を出して紅茶をいれる。こぼれこぼれ、という微かな音に、アルマリアが心地よさそうに耳を澄ました。

「どござ」

かちや、と湯気立つカップを置く。アルマリアは嬉しそうに微笑

い、おっとりと礼を言った。

つくづく、珍しい王族だ、とエンナは思う。

大抵の王家の血を引くもの、また上級貴族の類はいちいち使用人に礼を言ったりしない。ふわふわと頭の緩い表情で貴族同士で談笑し、茶器を運ぶ侍女など見えてもいない。のだから。多分。

例外といえはあの変態王子ぐらいのものだった。

(……………うん、)

もしや、エビリスでは普通のことなのだろうか。

リュファアーニアの貴族が侍女を見ないように。

エビリスの王族は侍女に微笑むのか。

(……………どうなんだろう)

女癖の悪い男の貴族は女の使用人を誑かしたあげく無惨に捨てたりする。それは逆も言えることだが、大抵は女が騙されることの方が多い。いや、拒否できないことの方が、と言った方が正しかろうか。そういう輩はたまに見境がなくなり、自分より上の身分だろうが関係なく襲うことがある。けれどこの姫君は決して捕まらないだろう。あの高潔で無垢で清艶な微笑で躲すのだから。

すごい、なあ。

本当にそんなことがあったわけでもないのに、エンナはぼんやり感心した。

だって。

少なくとも。

もしエンナが彼女だったとしたら。

危険極まりない森に入るなんてこと、言えないだろうから。

なかなか離れないエンナの視線を訝しく思いつつ、なんとなく諫

めることも出来ずに、アルマリアはまんじりとした面持ちで紅茶をすすった。

仄かの林檎の匂い。口あたりはまるやかで、丁度いい温度。なるほど、エンナは紅茶をいれるのが上手い。国歴学の教師が言っていた通りである。

ほう、と息をつき。眼を閉じて残像を掘り返す。

赤く染まった無惨な腹。

淀んだ眼差し。

落ち窪んだ眼窩。

ぞわりと背筋を這いずる、あの感覚。

「?????.....どうして」

眩く。

エンナには聞こえないほどの小さな声で。

どうして。

どうして聖王国にいるの。

????????どうして。

それは確信と呼ぶには拙く、けれど裏返すにも難しい、こめかみを痛めつけるような。

どろか当たらないでほしいと願うような、予感。

暗い森に思いを馳せる。
明日赴く森は果たして、あの森と似ているだろうか。

街中の聖女 5

????森には魔物が棲んでいる。

「古いお伽噺みたいですね」

にっこりと笑って、アルマリアは身も蓋もないことを言った。
ヴィルヘルムが困ったように苦笑する。

「そうですね……まあ、伝承ですし」

「ですが、真かもしれません」

穏やかに微笑んだまま。

アルマリアははつきりと呟いた。ぱちりと脳裏に焼きつれるような痛みを伴う記憶が????????が蘇る。弧を描く口。アルマリアよりなお深い黒。浸食し、浸透し、破壊する声。

雨に濡れる霧がかかった森の中から、彼女は空を見上げた。

憎らしいくらいいの、曇天だった。

リカルドは非常にきまづい思いで最後尾を歩いていた。

同行者はエンナ、ヴィルヘルム、アルマリア、そしてクオルデイスという青年。

クオルデイスはアフォルググーツ。先日事件の被害にあったばかりのマリーシャグーツの兄である。

あの親から生まれたにしてはなんとという家族想いと感嘆してしまう正義漢だった。

守ることも死に目にあうこともできず妹を死なせてしまったと、酷く悔やんでいたらしい彼は、どこから聞きつけたのかこの視察に同行を願い出てきた。もちろん、ヴィルヘルムもリカルドも笑顔で首を振った。当たり前だ。一応文官らしいが軍人経験も戦闘経験もない紛うことなき事実上民間人に、一割でも危険の可能性がある場所に連れてはいけない。……アルマリアのことは諦めているが。彼女の花の如く静かな微笑に對峙すると何故か反論出来なくなるのだ。これだから美人は。

ともかく、彼にはお帰り頂くよう、丁重にお断りをたてたのだが。

『殿下、私は医学部で、人体の研究もしているのですよ。?????次に死体が運ばれてきた時は真つ先に殿下にお知らせしますね?』

この一言で、ヴィルヘルムがあっさり陥落した。

リカルドはしばらく食い下がったが、しかし哀しいかな部下であり主はこの国の貴人中の貴人、逆らえるはずがない。

そういうわけで、一見純朴そうなこの貴族の青年は、同行を許されたのだった。

「……………天気、悪いですねえ」

「雨ですからね」

「続くんでしょうか」

「さあ」

「……………えーと、おなか空いてませんか？」

「いえ別に」

「……………もし、お疲れになりましたら仰って下さいね。殿下はあまりそういう気遣いを持っていらしゃらないので」

「はい」

「……………」

会話が続かない。

リカルドとこのクオルデイスは、彼ら一行の一番後ろを、並んで歩いていた。前はヴィルヘルム、アルマリア、エンナの三人である。何故本来守られるべき人々が前にいるのかといえば、まず当のヴィルヘルム達が前をいきたいと言い、反論する前に後ろの方を頼むと王子が爽やかに笑い、王子をアルマリア様と二人つきりにするのは危険ですからとエンナが苦虫を噛み潰したような顔をし、アルマリアが「ごめんなさい、?????お願いしますね、リカルドさん」と微笑んだからだ。

……恐ろしい。

だが、リカルドはあまり心配はしていなかった。何だかんだでヴィルヘルムはああ見えて実は戦闘能力が高く、それはエンナも同様だった。どちらも需要がなさそうなのだが、……昔、黒歴史があったのだ。リカルドを含めた三人でしごかれた悪夢が。

思い出したくないことを思い出してしまったリカルドはぶるりと青ざめた表情で首を振ってから、ちらりと隣の青年を窺う。

正直、彼の能力値がどれくらいなのか分からないところが痛い。突発的事態の彼に対する接し方を決めかねてしまう。守ると余計に敷蛇なことになってしまう人物であつたらもう救いようがない。大抵の人間は庇えるが、……たまーに、ぶつとんだ性質の人もいるのだ。

が、まあ。今はそれは問題ではない。

そんなことより。

(か、会話が続かない……………っ！)

前列ではほのぼのとした会話が、とてつもなくゆっくりした流れで交わされているというに、何だろこの対比。重苦しい。重過ぎる。沈黙が重い！

リカルドはきりきりしてきた胃のあたりをそつと押さえた。ああ、気まずい。

「……あの、」
「！」

そんなことを思っていたら、なんと相手から話しかけられた。驚きである。リカルドは勢い込んではいはいと頷いた。

「なんですか？」

「あの、アルマリア様という女性は……？」
「……へ」

あ、アルマリア妃殿下？

何故あのお方の名が。

予想外過ぎて返事を出来ずにいると、前方で当のアルマリア振り返った。

「あの、誰か呼びましたか？」

「あ、いえ……」

「いいえ、何でもありません」

ぱちくりと答えかけたリカルドの言を、やや早口でクオルデイスが遮った。そうですか、と特に気にするでもなくアルマリアは向き直る。

リカルドは怪訝気に彼を見た。

「アルマリア様がどうかありませんでしたか？」

「どういう、お方なのですか」

「……はい？」

おいおいおいおいちょっと待て。うっかり惚れちゃったとか言わねえだろなこの坊ちゃん。

たらーと溢れてきた冷や汗をこっさり拭う。それだけは何としても阻止せねば。国が関わるコイなんてろくなことがない。というか周りにろくなことが起きない。

「あ、アルマリア様は、」

「ごくん、と生唾を呑み込み、極力普通に告げる。

「先日ヴィルヘルム殿下の奥方となられたばかりの、エビリスの王女殿下ですよ」

「いや、正確には元、かもしれないが。」

「ばっ、とクオルデイスは両目を大きく見開いた。

「驚愕、といういべきほどに。」

「(……………エ、ままさか……………?)」

「本気ですかー、と気が遠くなりかけたとき、小さな呟きが落ちた。

「エビリスの、“白雪姫”……………?!」

「それはエビリスの姫君の異名。その美しさを讃える麗句。

「はるか昔の貴いひとと重ねて名付けられた美称だ。」

「エビリス及び周辺の国内では知らぬものもないほど有名な通り名である。」

「それを。」

「何故こんなに険しい顔で言うのか。」

「クオルデウス殿……………?」

「????????…い、え。すみません、何でもありません」

(どこらへんが……?)

汗びっしょりですが。

だが、あえて追求することもあるまい。

「そうですか。ところであの方はあの微笑でこの視察に同行することになったんですが、おそらく肉体的に強いということはないでしょう。なので、もしクオルデイス殿が、腕に覚えがあられるなら、ほんの少し、気にかけて差し上げて下さい」

「あ……はい。わかりました」

代わりに言った言葉に、クオルデイスは妙にちから一杯頷いた。

……あーなんか面倒なことになりそう、とりカルドは自分の感にげっそりした。

街中の聖女 5 (後書き)

ええと、のちのち説明してくれると思いますが、王宮の文官が仕事してるところでクオルディスさんが人体研究しているといった「医学部」は、負傷者とかをばっしばっし直す病院的なところじゃありません。

医術省―医学部 病気系及び研究メイン。

―医務部 ばっしばっし直すぜ！

ミステリーでの、検察の怪しいおいちゃん(いや怪しくない人も居ますが)みたいな人が蔓延っている感じだと思えます。

街中の聖女 6

きいん、と金属が擦れあうような音がした。

アルマリアの目がひび割れそうなほどに見開かれる。きいん、きいん、と音は続く。打ち鳴らすように、それは幅を、強さを、鋭さを増して近づいてくる。

「……………べ……………ルサー……………」

戦慄く唇から漏れ出たそれに、ヴィルヘルムが驚いたように瞬いた。

「姫、??アルマリア?」

うっかりといったように呼ばれた呼称にも、己の名前にも反応しない。ただ、アルマリアはおぞましい感覚に、??行き場のない怒りにそのかんばせを歪めた。

どっしっ。

ここは、聖王国、なのに。

?????どっしっ。

「アルマリア ?!」

ぐいつ、と腕を引かれた。

ヴィルヘルムの手が彼女の肘の下あたりを捕まえている。

心配そうなに窺われる。独特な栗色の眼。深く、赤みを帯びた、その瞳。

どくん、と心臓が揺れ動く。振れ動く。駄目。これは、何かまずい。

気が、する。

アルマリアは滑り落ちそうになる雨除けの裾を握りしめ、にっこりと笑んだ。

「すみません、大丈夫です。……ヴィルヘルム様」

「はい？」

「音が、聞こえませんでしたか」

「音？」

先ほど響いたあの音。

今も絶えず鳴り響いている、これは。

「??????手を、」

「……え？」

下唇を噛み締めて、アルマリアは震えないよう己の腕を叱咤して、白魚の如き真白の手を夫の前に突き出した。

雨除けをくぐり抜けて滑り込んだ雨が頬を伝う。蒼いドレスはほとんど濡れていた。それはエンナも同様で、彼女の清潔なお仕着せのエプロンは黒地がほんのりと透けて見えている。立ち止まったからだろう、後ろについているリカルドたちが小走りに向かってきていた。

「手を、握っていただけですか」

森の緑は暗雲に暗い。きいん、きいん、と音がする。混じり合う。影に覆われてゆく木々と。

ざり、と地を引き摺るような足音が、聞こえた気がした。

ああ。

折角、ここまで来たというのに。

(どうして)

ここは、『聖王国』では、なかったのか。

決してあれらを受け入れない、残酷で潔癖な聖なる国。

なのに。

「……ええ、繋ぎましょう」

アルマリアははつと顔を上げた。

穏やかにヴィルヘルムが微笑んでいる。柔らかな陽光のような笑み。死体に向けている表情とは全く違う。それこそ王子然とした、??温かな。

「……はい」

アルマリアは、ゆっくりと差し出されたてのひらに自分のそれを重ねた。熱が伝わる。前にもこの手には触れたことがある。だけど、気づかなかった。こんなにこの手は骨張っていただろうか。こんなに硬かっただろうか。大きかっただろうか。温か、だっただろうか。

「ほんの少し、堪えて下さい」

「え？　?????!」

きいん、きいん。

金属を擦り合わせたような音。

ヴィルヘルムの眼が驚愕に見開かれた。

当たり前だろう、手を繋いだ途端頭痛がするほど大きな音が鳴り響くのだから。

「アルマリア……？　あなたには不思議な力が……？」

……どうして嬉しそうに聞くのかしら。

落ちた眩きと眼の輝きに拍子抜けしながら、アルマリアは「違います」と即答する。

「これは私の力ではありません。これは」

躊躇う。

けれど、アルマリアはぐっとヴィルヘルムを見た。

「これは、魔物が私に狙いを定めたのです」

叶って欲しくなかった、目論みは。

耳障りなこの音によって成就を保証された。

街中の聖女 6 (後書き)

雨除けはそのまんま雨を除けられる布製の何かです。
平安時代の被衣かすきの簡易版みたいなものです。

そして傘は傘であります。洋風な、日差しを遮るみたいなあの上品な見た目の傘です。高級品です。だって骨組みしてありますから！

街中の聖女 7

握りしめた手が、熱を帯びる。

心臓がばくばくする。ただこれ、あの婚礼の日に感じたようなものではなく。

(はやく、???はやく言わなくちゃ)

あれがやってくる。

私を、喰らいに。

「リユファアーニアを『聖なる国』とお呼びするならば、エビルスは『魔性の国』です」

ぎょっとエンナが目を見張る。それを横目に苦笑してみせてから、アルマリアはやや早口に続けた。傍目には何の変わりもないように、ヴィルヘルムから抜いた指で、エンナ、クオルデイス、リカルドの順に彼らの手を握っては離していく。一瞬奇妙な感覚がしたのは、おそらく気のせいだろう。アルマリアは見掛けは淡々と、言葉を紡いだ。

「地形と、加護の問題でしょう。リユファアーニアと違って、エビルスはあまり開けた国ではありませんし、何故かは知りませんが、昔からよく魔物が出るのです。こんな分かりやすい森だけではなく、祠や街の死角にも」

最も守られた場である王宮にさえも。

「……魔物は、もうほとんど滅びたと、聞きますが」

信じられないという表情でリカルドが茫然と眩く。だが彼はあの異質な音を聞いた。そしておそらく。

「先ほどから私にだけ響くこの音は、魔物が的として定めた人間に鳴らす、彼ら独特のマーキングかと思います。生憎、私は魔物ではないので、正確なところは知れないのですが」

きいん、きいんと響く耳障りな音に共鳴して、さらに恐ろしい、胃を引き裂くような狂声。

「そして、今私に狙いをつけたこの魔物はおそらく、??アンベラルサー」

リカルドの武人にしては理知的な目をひたと見据える。

「鈴を持った、人食いの熊のような姿をした魔物です」

彼は、あの狂声を聞いた。

……アルマリアが最後に握った手は、彼のものだったからだ。

アルマリアは唇を噛み締めた。もう、時間がない。あれは、直ぐ傍まで近づいてきている。

なんてこと。

なんてこと、と彼女は苛立ちにも似た感情に白く細い指を握りしめて赤く染め上げる。まさか、魔物の存在すら滅びたと認識している国で、本当に出るなんて。おかしい。こんなこと、あるはずがないのに。あつてはならないのに。どうして。どうしてなの。

(私の……)

私のせい？

じわじわと抱いていたそれは、破裂するように膨れ上がる。罪悪感と失望。まさか、そんなことはないだろうと。否定しその考えを

なくしてしまいたいのにはそれは粘り強く彼女の頭にこびりつく。

アルマリアには、この美しく穢れを厭う『神聖な』王国で、こんなものが出たのは、自分のせいに思えてならなかった。彼女が異国の人間だからそう思うのではない。

アルマリアは、そういう性質なのだ。

昔から。

ずっと。

あの綺麗な綺麗な牢の中で、怯えていたように。

他国に移ったくらいでは、何の意味も成さなかったのだ。それほどに、この性質は厄介な、もの。

(?????……いいえ、)

深く沈んでいった思考から無理矢理現在へと切り替える。今は落ち込んでいる場合ではない。

「殿下、」

「ヴィルヘルム、ですよ。姫？」

「……ヴィルヘルム、様。今直ぐこの森の北に走って下さい。エナとクオルデイスさん、リカルドさんと一緒に」

「?????……は？」

こんな時でもいちいち訂正する夫の妙なこだわりで脱力しかけながら、きつぱりと願う。

眉を跳ね上げて変な顔をするのはヴィルヘルムだけではなかった。

「ひ、妃殿下？ ちょっとお待ちください。まさかあなたは反対に逃げるなんて申されるわけでは……」

「あら。その通りです、よく分かりましたね」

これから言おうと思っていたのに。

吃驚して小首を傾げると、リカルドは真っ青になった。エンナな

んて泡を吹いている。ぱたりと雨除けから雫が滴り落ちて、水たまりにひとつ、より大きな波紋を作った。けれどそれも広がれば広がる程天から降る雨が水たまりをその叩く。

アルマリアは唯一顔色の変わらないクオルデイスに向き直った。

「ごめんなさい。あなたは妹さんの為にいらしたのに、要らないご迷惑をおかけして」

「何をおっしゃいます。僕は好きでできているのです。貴女様がお気になされることはありません」

ぴしゃりと切り返され、面食らいながらも「でも、ごめんなさい」と呟く。この方、こういうひとだったかしら。もっと暑苦しい人柄だと思っていたのだけれど。と、そこまで考えて彼がここまで随行出来た経緯を思い出す。……いえ、こんなひとだった気もするわ。

雨足は強くなっていく。暗い緑の葉はしつとりと濡れ、先から大粒の雫を零している。涙のようだ。

??涙。

ふと、アルマリアはエビルスの王妃の顔を思い出した。彼女の、綺麗で苛烈な瞳を。

「そんなことよりアルマリア様！ 駄目ですよ何だかよく分かりませんが逃げなければいけないのなら一緒に逃げましょう！」

必死な表情に、再び、苦笑が漏れる。優しい侍女。もしエビルスであったなら、魔物に目をつけられた人間は真っ先に忌避されるだろう。特に、それが毎度のことであるならば。

「いいえ。魔物は、『餌』に対して、そう性急に事を運ぶことはありません。どうしてだかはやっぱり分からないのですが。ですが他の『餌』以外の人間は彼らにとって道にひっそりはえる雑草

と同じです。踏みつぶしてしまうか、深く考えずに食べてしまうでしょう。ですから」

ですから、とアルマリアは微笑む。

「ですからリカルドさん、どうかヴィルヘルム様方を連れて、お逃げ願います」

「??????:……!」

針を呑み込んだような顔だ。

まるで一生の別れのような表情。大袈裟だ。この国は魔物に免疫がないからそうなのかもしれないけれど。

「リカルドさん、お願いします。私はエビリスの人間なので、こういうことは慣れております。ですがあなた方は違いののでしょうか? ならばあなたは早く、この国のお世継ぎ様をお守りするべきでしょう」

「?????: 出来ません!」

鼓膜が震えるような大喝だ。びりびりと耳が揺れる。これは、近衛隊の人間も鍛えられていることだろう。すごいわ。アルマリアは怖いと思いつつズレた風に感嘆してしまった。が、彼女自身ズレたことに気づいてはいない。

「お願いします。私は大丈夫ですから」

「こんな王子はほつといても生きてます! 大丈夫です! 一番不安なのは貴女様なのですよ妃殿下!」

「おいちよつと待て。さりげなく酷いことを言っていないかおまえ」

「殿下、事実でしょう。そんなことどうでもいいのです! 私もりカルドに同意ですよアルマリア様!」

「おまえたちな……」

「?????何故、アルマリア様と一緒に逃げられないのです?」

喚き立てる武官も侍女も突っ込む王子ともども無視して、クオル
デイスが思案気な面持ちでアルマリアを見た。

ゆっくりと深呼吸する。

「目をつけられた人間は、そのマーキングのせいで彼ら自身の鼻に
しかかかない独特の匂いを放つのだそうです。そうなればどんなに
逃げても逃げ切れることは出来ません。王宮にだって追いかけてきま
す」

クオルデイスが藍色の目の片方を瞼の向こうで丸くした。どうに
も気取ったように見えるのは彼自身の奇妙な空気のせいだ。

「そんなに……?????」

だから早く逃げて、とどんどん大きくなる音と笑声に祈るように
指を握り込む。

「……アルマリア、駄目ですよ」

不意に心臓が止まりそうになった。

困ったような、穏やかで優しい声だった。あの狂った笑声を一瞬、
かき消すほど。

ヴィルヘルムは声のままの柔らかな眼差しでアルマリアを射る。

……どうしてか、アルマリアは彼のこの表情に、この声に、この眼
差しに弱かった。気張っていた気持ちが一瞬で緩んでしまう。このままの
どやかにお茶が出来そうと錯覚してしまうくらいには。

ふわりと頭を優しく叩かれる。ほん、ほんと撫でるように。

「それは駄目です」

「何故で……??」

問いかけた時。

ずくん、と額のあたりに激痛が奔った。

金属音が幅を狭める。喰らい尽くすような獣の笑い声。

刹那、闇色の影がアルマリアの背後から駆けた。

まるで視界の全てを覆い隠すように、伸びて。

街中の聖女 8

「うう、と闇が迫りくる。

(?????きた)

痛む頭を押さえ、覆い尽くそうとしてくる闇を睨む。

「え、な、何ですかこれ……?!」

エンナが狼狽し、ぐいつとりカルドの服の裾を掴む。そのリカルドはいまいち事態を理解していなさそうな表情で隙なく構えていた。さすがはあの王子の近衛隊隊長である。

???喰う、

???喰う、

???ちり、ちりりん、り、

???喰ろつて、く、

???喰ろつ、て、やるう、ぞ、ふ、ふふ、

???おいで

???りり、りん、りりり、りり、

???おいで、くふ、ふ、

???おいで吾が獲物、

???く、ふ、くふふふふふふふふ、

ぞわりと肌が粟立った。

アンベラルサー！

鈴を持った人食い熊。

いまだ終ることなく浸食し続けるこの闇は、おそらく獲物を正確

に捕らえるためのものである。決して、取り逃さないように。？
？捕まえ、いたぶり、なぶり喰らうために。

(逃げなくては……？？逃がさなくては！)

どう考えてもこの場合悪いのは自分だ。あの“匂い”と感覚が何か確かめたいがために、こんなところまでやってきて、むざむざ魔物を誘発してしまった。まさか、聖王国で、こうなるとは？？本の少し訝つてはいたが？？ないだろうと高をくくっていた。なんてこと。なんてことなの。

……どうやって、自分は、魔物に追われる性質なのか。

口内に苦い味を広がる。？？来ない方が、良かった？ けれど。

あの、無惨な死に様が脳裏をちらつくのだ。

同時に本能が、直感が、警鐘を鳴らす。行かねばならぬと。行かねばもっとどうしようもないことになる。

『貴女のそれは、貴女だからこそ持ち得る生きるための術であろう』
『よ』

……遠く、懐かしい声がした。

泣きそうになる。

そうだ。これは。

アルマリア＝フラットランド＝ラ・エビリスの義務。

あの魔物に侵された国で、もっとも魔物に付け狙われてきた自分の。

「??????走ってください」

どん、とアルマリアはリカルドの背を押した。

エンナが吃驚したように目を見開く。そこからは、あまり恐怖は見えなくて。だから、アルマリアは少しほっとして、いつものように柔らかに微笑う。

紅茶をありがとう、と言ったときのように。

生憎アルマリアの力ではリカルドはびくともしなかったが、眉根を寄せたクオルデイスに腕を引つ張られると、さすがの近衛隊長もわずかによろめいてしまっていた。

咎めるように睨みつけるリカルドの視線を全く意に介せず、クオルデイスはじつとアルマリアを見据えた。

アルマリアは首を傾げる。

……何か、今、彼の目に複雑な色が過った気がした。

(まあ、非常時ですし)

広がる浸食に侵された腕を見る。まるで絡み付くように、黒い影がアルマリアの白い肌に染み込んでいた。眉間に皺を寄せるが、これが獲物以外のものにつかなくて良かったと、微かに安堵する。

「アルマリア様」

「ありがとうございます。お願いしますね、リカルドさん、クオルデイスさん」

「っアル、?????」

?????く、ひ、くふふふふ、

おいで、吾が獲物

闇が加速する。

(???ええ)

アルマリアはぐつと奥歯を噛み締めた。

(ええ、??返り討ちに、して上げましょう)

???そして暗黒に呑み込まれる。

*

こつ、と踵の高い靴が白い石の道を叩く。
ふわりと木苺のような香りが漂い、噎せ返るような薔薇の匂いが
充満する。

灰色のストールがたなびく。
厚い布製の、妙に長いベールは、降り続ける雨に濡れていた。
傘もささずに、彼女は歩く。踊るように。
「?????せいせい、苦しむがいい」
赤い唇が、苦し気に歪んだ。

*

どすん、と尻餅をつく。濡れた地面を拳が滑る。ぬるぬるとして
いて気持ち悪い。
絡み付く闇を気にしながら、アルマリアは立ち上がるうとし、?
????

「あいたたたた……」

ぴしりと動きを止めた。

零れ落ちそうなまでに目を見開いて、彼を凝視する。

「ヴィ、ヴィルヘルム、様……？」

茫然と呟けば、ヴィルヘルムは痛そうに腰をさすっていた手を上げ、にこやかに微笑んだ。

「ああアルマリア。貴女は大丈夫でしたか？」

「?????な、」

りいん、と鳴る鈴の音すら気にならない。

わなわなと唇が震え、ざあっと彼女の顔色は青ざめた。

「何故あなたがここにいらっしやるのですか?????!」

ヴィルヘルムはにこにここと、ただ笑っていた。

「ッ、クオルデイス殿！ 何故妃殿下を……！」

「それをあのお方がお望みになられたからです。それより、あなた方は殿下をご心配召されるべきでは？」

一見無表情なクオルデイスの言葉に、エンナトリカルドは揃って「そんなことどうでもいいんです！」と喚いた。あきらかに主君に

対する敬意とか情とか信用とか色んなものが欠落している臣下である。

クオルデイスは微妙に呆れたような面持ちになった。それを見て、エンナは思考する。

(……殿下はおそらく、アルマリア様とともにあの何だかよく分からない気持ち悪いことこの上ない闇に呑まれたんでしょう。ということはお二人は一緒、と見て……いいの？ それとも一緒に呑み込まれても出る場所は違うとか？ ていうかあれってまさか魔物の口だったりしないよね？ ちょっとだったらどうしよう絶対胃袋の中であの馬鹿王子は死体漁りし始める？ いやもしかしたら死体になりそうなアルマリア様を愛で始める？！ あの変態的変態的変態的な愛で方で！ いやー！ それ駄目！ 絶対駄目！ ありえない！)

あああああどうかこんな時くらいその阿呆な性癖はしまつときやがれあんの変態男！

大分口調も思考も入り乱れ、エンナは変態行為をする王子を勝手に想像して怒りをたぎらせた。

「リカルド！」

「うわあっ！ な、何だ」

「いきましよう今すぐ行きましよういいから行きましようさもくばアルマリア様があのだ変態の魔の手に！ 魔手に！」

「ド変態つて殿下のことか…？ でもさすがにこんなときに……と
いとか何故」

「こんな時だからこそ死体を探し始めるんですよあのだ変態野郎は
！ 早く！ 早くアルマリア様をお助けしなくては……っ！」

エンナの中ではこんな状況下でさえ魔物より王子の方が危険度の高い存在なのだった。

ぐっ、と拳を握りしめる。

(アルマリア様、今エンナが助けに参りますからね！　どうかそれまではご辛抱ください…！)

あくまで「ヴィルヘルム王子」を危険視しての思いである。

「…あの、エンナ殿は何故そういう思考回路に…？」

「あれも私同様、殿下には苦勞させられてきましたので…」

そっとしておいてやってください、トリカルドがほろ苦く言った。そしてすぐさま眼差しが真剣味を帯びる。

「お聞かせ願えますか、クオルデイス殿。何故、あなたは妃殿下のお言葉に従われた？　どんなにそう妃殿下が望まれたとて、あの場にかの方をおいていくべきではなかった。少なくとも、私は傍にあらねばならなかった。??これでも、近衛隊なので」

あの時、残ろうとしたリカルドは、クオルデイスの思いがけない豪腕によって思いつきり先へと押しやられた。とんでもない失態だが、それはあとで諫められるべきで、今は彼らを探し彼らの安全を確保すべきだ。そして。

(この男…???)

本当に妹のためにここまでできたのか？

アルマリアに対する態度が、何か、あまりにも忠実過ぎる気がする。

と。

「私が妹の仇のためにきたのは本当ですよ」

まるで心を読んだかのような答えが返ってきた。

「ただ、??アルマリア様がそうすべきだと仰った。たとえそれが

私にとって望まぬことであっても、この血は逆らえない。それに、

(血…?)

一体、何のことだ。

王家に対する、という意味ならば、それはヴィルヘルムにも向けられるはず。だが、彼のそれは自国の王子ではなく、嫁いできた可憐な姫君にのみ、向かっていた。

訝るリカルドに、クオルデイスは本日はじめての笑みを浮かべる。

「幸いなことにも、今は殿下がお傍にあらせられる。ならばきっと問題ないでしょう」

……どうにも凶悪そうにしか見えない笑みだった。

*

真っ白な湯気が、陶器の器から立ち昇る。

フォークすら持ったことがないのではなからうかと疑ってしまうほど華奢な織手がぱたりと本を閉じる。

薄藍に染まる窓外を見て、彼女はその麗しいかんばせを微かに曇らせた。

「……あの子は、どうしているかしら」

ぼつりと零れた呟きに、密やかな笑声が部屋中に広がる。

「????? おや、貴女が追い出したのだろうか? 今さらじゃないか

ね
「

いやに楽しそうなのその声を見無視して、彼女は無表情に白磁のカップから、抜けるような朱色の紅茶を口に含んだ。

街中の聖女 9

ふるれ、ふるれ。

泥の色すら惑わす王都。

聖なる光にあてられて。

塵芥の闇へと堕ちてゆけ。

*

エンナは鼻息荒く歩を進めた。がつ、がつ、とたわみ、溶け気味の木の根をかき分ける。その後ろを二人の青年が何とも言えない表情でついていつていた。

雨は小ぶりになり、さあさあと、まるで霧雨のように吹いている。これならアルマリア様たちも少しは動きやすいだろうか、と埒もない考えが浮かんだ。

「……………エンナ殿、先ほどから迷いなく進んでいらっしやいますが、……………あの、当てはあるのですか？」

殿下方の、という言葉を、エンナはぐるんつと振り返って遮る。
??当てですと?

「あるわけないでしょう!」

きつぱりと、彼女は断言した。え、と男二人が固まる。虫の声すらしない森中で、ざわざわと木が揺れる音が、虚し気に響いた。

数秒、時が流れる。

「…とりあえず、エンナ。もう少し言葉遣いを……」

「あら申し訳ありません、クオルディス様。以後このようなことはなきよう申し上げます」

「リカルド殿、エンナ殿。そのようなことはどうでもいいのです、??というか、」

「分かっております。少々現実逃避したかったですよ。エンナ、おまえ、じゃあ何でそんなに自信満々に歩いている」

苦いため息の後の問いに、きよんとしてからエンナは不敵に笑った。

「“空気の悪い方”に、向かってるのよ」

エンナは昔から恐怖の対象や人の心の機微に敏感な娘だった。恐ろしいものの空気は、まとう陰気な威圧感は、手に取るように分かってしまう。昔はただ嫌がるだけであったが、今ではそれすら利用しなくてはあの王子についていくことは出来なかったのだ、こうして充分したたかに育ってしまったのである。悪い空気を一分の隙なく見分けられる程度には。野生のカンのようなものだ。

「あー、そうか……で、本当にこっちなのか?」

「たぶん、よ。多分。正確な位置なんて分かるものですか。ああ神官が一人でもいたら良かった。リカルドはまっつったく素養なかったわね」

「おまえもなかっただろうが」

眉をしかめつつ足は休めない。いまいち理解しきれていない表情のクオルデイスにリカルドが手短かにエンナのカンを説明する。それでも納得できなさそうにしながら、しかし留まることはなくついてくる。それを見て、ふとエンナは不思議な気分になった。

そういえば、この方もあまり貴族らしくない。

いや、ある意味においては貴族らしいのかもしれないが、近年よく見る傲慢さが無い。

(……： 医術省、それも医学部なんて、それなりの能力がないと入れない。……： 裏から入るバカが、滅多にいないくて、実力で入った上で容赦ないあの省にいらっしやるからかな。でも、グリーズ男爵なんてバカの第一人者じゃない。そんなのの息子が、よくこんな普通に育つわね)

微妙に失礼なことを思い、ちらりと青年を見る。色素の薄い灰色の髪に、思慮深気な眼は深い藍色。光の加減で翠にも変化する。ひよろりとした医術服をまとった姿は、吹けば飛ぶほど、なんてことはないがリカルドに比べればいかにも弱そうに見えた。のだがしかし、彼はあのリカルドを、片手で引つ立てた。あの時はそれぞれどこではなかったので見過ごしていたが、それは結構なことだろう。何しろ仮にもリカルドは近衛隊のうちのひとつ、序列二位の威を誇る第二部隊の長を務める人間だ。そんな簡単に動かされるような鍛え方はしていないはず。……： まあ今ではかの名高き第二部隊も『検死隊』なぞと言われているが。違う意味で有名になっている。哀れな隊長には、毎日のように警邏隊から苦情がきているらしい。

曰く、「くるのはいいが、殿下の変態癖を何とかしてほしい。隊員が怯えて困る」とのことだそうだ。哀れ。ああ本当にアルマリア様つきになれて良かった！ こんな時でも幸せを噛み締めるエンナであった。

「……リカルド殿、エンナ殿は……」
「気にしないであげてください……あれも、うちの殿下のことで本当に苦労していましたので」

本日二度目になるような意味合いのことを、またもリカルドがほろ苦く言ったことを、目尻に涙すら輝かせてうっとりとするエンナはさっぱり気づいていなかった。

アルマリアは真っ青になっていた。

「ヴィ、ヴィルヘルム、様……！何故、」
「まあ落ち着いてください、アルマリア。ほら、雨除けが落ちていきますよ」

狼狽するアルマリアの頭に、ふわりと雨除けがかけられる。吹いていた雨のせいで、頬に貼り付いていた髪を払われた。すっと離れていくヴィルヘルムの人差し指をぼうつと目で見送る。

にっこりと、リュファニアの第一王子が微笑った。

「大丈夫ですか？」

あまりにも優しい声音で。これが死体にうつとりと頬を赤らめている人物とは、ついぞ思えなかった。違い過ぎる。

けれど彼にとって、もっとも愛おしむものは死体なのだ。……数多いが。

なんとなく、淋しい気持ちが出来する。もっと、打ち解けては貰えないだろうか。

そう考えてからはと我に返る。何を思っているんだろう自分は。恥ずかしさにくっ唇を噛んでから、にっこりと微笑み返す。

「はい、落ち着きました。ありがとうございます、殿下」

「何のことでしょう」

「たくさんあります。けれどとりあえずは、雨除けを拾ってください。……」

するりと言葉が流れ出る。雨除けはどんどん霧雨に濡れる。ぬかるんだ地に座り込んだまま、彼女はふとドレスの裾を気にした。……まずいわ。これ、エンナが選んでくれたものなのに。泥が染み込んでしまっただろうでしょう。私はともかく、誰かに怒られたりしないかしら。

密かに焦っていると、剣だこの出来た、顔に似合わず硬そうな

のひらが差し出される。

驚いて見上げるとヴィルヘルムが、満点です、とでも言いた気な微笑で片膝をついていた。

「お手をどうぞ。今はあまり綺麗ではないので、申し訳ないのですが」

仄かに困ったように言う。その表情すら完璧だ。

（ヴィルヘルム様って……王子殿下というより、お伽噺の騎士のような仕草まで似合うのね……）

面白い方、と柔かに笑う。小さな笑声にヴィルヘルムが眉を寄せた。ほんのりと不安そうに。

「ありがとうございます。それではお言葉に甘えて」

そつとてのひらを乗せてみる。重さはおかずに立ち上がるうとしたら、くいつと引つ張られた。目を丸くして、踏み外しそうになりながら何とか立ち上がる。どうやらぶつからずに立てたらしいことにほっと息をついて手を離してもらつと。

と。

妙に近い位置にヴィルヘルムの顔があった。

「ぶらついてもよろしかったのですよ。ちゃんと受け止めますから」「それは……でも、申し訳ないです」

首を傾げてそつと足を引く。すると雨除けの上からぼん、と頭を撫でられた。

ばちくりと目をしばたたく。

……なんとというか。

(私、幼い子供みたいにされてる……?)
なんとなく微妙な気分だった。別に不快ではないが、妙にこそばゆい。故国ではそんな扱いをされたことがなかったから。

故国。

魔性の国、エビリス。

ふと、何か胸苦しいものが押し寄せてくる。これは郷愁か懐古か。否、そんなに良いものではなかった気がする。いつだって、この身は魔物に狙われていた。

??魔物。

(あ、ら……?)

鈴のような音も、声も、ほとんど聞こえない。おかしい。ここはあの魔物の、“範囲内”のはず。アンベラルサーは確か片目が盲目で、もう片目は光しか映さない魔物だったが、その分五感に優れているのでさくさく見つかってしまったかと思っていたのだが。??というより。

(ヴィルヘルム様が、一番危ないはずなのに……!)
獲物でもなく“範囲内”に入ってしまったものは、即座に斬殺される。新しい玩具を手に入れた子供が、道ばたの生まれたての蟻を気づかずに踏みつぶすみたいに。

けれど、獲物の自分も、彼も、見つかっていない。魔物が現れてすらいない。音も薄い。これは一体全体どうしたことだろう。今ま

で幾度も襲われてきたが、こんなことは初めてだ。

「最初の質問に答えると、どうしてかはよく分からないですよ」

ヴィルヘルムが喋る。その瞬間、喉元を清涼な空気が流れた気がした。または穢れを払われたような。

どくん、と心臓が鳴る。まさか。

「ヴィル……、」

「貴女をひとりにするわけにはいきません。ですから袖でも掴もうと追ったはいいのですが、気づけば落ちていまして。まさか本当に一緒にいられるとは思いませんでした……良かった」

いえよくありません。

つい言ってしまうようになったが、さすがに自分を心配して追ってくれたらしい人物にそれは止めておいた。……危険なのが。

（これではエンナたちとはぐれてしまったみたい……ど、どうしたら……ヴィルヘルム様だけ“外”に出すことは出来ないかしら）
こんな時にクロがいてくれたら、とうっかり思ってしまう。弱気になるはず、頼りそうになる。駄目だ、もう自分はリュファアニアの王子妃なのだ。いつまでも甘ったれていられるわけにはいくまい。そもそもあの友達には全然恩を返していないのだから、これからたくさん恩返す心算でいなければ。

「さてアルマリア。もうすぐ魔物が襲ってくるんですね？」

「え、あ?????はい。そう、なのです。申し訳ありません……！」

はっと頭を下げる。そうだ。自分が、彼を巻き込んでしまった。

この国の第一王子を。異国から嫁いできた自分を、穏やかに気遣っ

てくれたひとを。

齒がゆい思いで唇を噛む。

再び、謝罪が口を突く。

「申し訳ありま……」

「アルマリア。これは貴女のせいではありません」

けれどそれは、少し強くて、だけど優しい声に遮られた。
はじめてあつた時と同じ。柔らかな。

……ふと、こんなにも拒まれることがない安堵を、この国にきて
怖い程たくさん味わっていたことに、気づいた。
目まぐるしく変わるこの数日の中で、幾度も。

何の含みもなく、微笑んでもらっていたことに。

街中の聖女 9 (後書き)

気付いた事実にはんやりとするアルマリアの手を、なだめるようにヴィルヘルムが覆った。

ほんの少し、心苦しそうな表情で。

「むしろこの国の事件に、異国からきてくれたばかりの貴女を巻き込んでしまったのでしよう。こちらこそ申し訳ない。エビリスの方々に、合わせる顔がありませんね」

「！ さん、」

「それから」

反駁しようとして、つん、と額を突かれた。やっぱり、ふつと息がしやすくなる。

眼差しの先には死体愛好家の名に全くふさわしくない穏やかな微笑。

「私は、もしかしたら貴女を護れないかもしれない、と言いました。けれど」

けれど？

首を傾げるアルマリアの雨除けをくぐって、ヴィルヘルムの指が耳たぶに触れる。そっと、頬を撫でられる。

「けれど、出来うる限りで私は貴女を守りましょう。何故なら貴女は私の妻なのですから」

雨が、止んだ気がした。

否、それはただの錯覚で、ともすれば魔物の“闇”が近づいてきたせいかもしれない。だがアルマリアにとってそんなことはどうでも良かった。

極上の絹糸のようだと言われる、アルマリアの睫がやにわに震える。

この方は。

魔物に狙われ愚をおかしたこの身を守るといのか。

ただ、アルマリアという人間を。

妻というだけで。

(……そんな)

喉が震える。それはおかしなことだった。途方もない、言葉のように思えた。そもそも騎士でもなく近衛兵でもなく、この国の最上の立場にある血を引いた人間が、口にする言葉ではなかった。

エビリスではこのようなものは捨て置く。それが普通なのだ。自衛は悪ではない。たとえ悪だと誰が言っても、アルマリアは思わない。この身で受け続けてきた恩を返せるならば、喜んで差し出そう。何度だって。

だが、だが、だが。

ひゅう、と嫌な風が吹いた。ぶわりとうなじから脂汗が吹き出す。ちりいん、と耳障りな鈴の音が響く。ずっと聞こえてこなかった唾い声も。アルマリアは自然と懐を押さえていた。

そうして、喘ぐように、咳く。

「そん、な」

そんなことがあって良いものか。

アルマリアの替えなどいくらでも効くだろう。だけど彼はそうではない。聖王国リュファアーニアにとって、この先ずっと、魔物のい

ない国として彼の民が幸せであるように。なくてはならぬ存在。
????その血に含まれるものすらも。

「だけど、
だけど、嬉しい。」

エビリスの白雪姫。そう、嫌遠される自分に。

そんなことを言ってくれるひとはいなかったし、言って欲しかったわけでもなかった。だけど、ヴィルヘルムが、アルマリアのことを妻と呼んでくれたのが嬉しかった。そうやって、あんなに死体に愛を注いでいるようなのに、それでも目を向けてくれたのが嬉しかった。

なんて恥ずかしい。そんな場合じゃない。??今にも、魔物はそのあぎとを開く。

「アルマリア?」

「……ありがとうございます、ヴィルヘルム様。ですが、お願いします。そのお気持ちだけで充分です。どうか、逃げてください?少しでも」

胸元を押さえる。

大丈夫。

私は大丈夫。

だって散々クロに助けってもらった。散々、魔物に狙われてきた。

にっこりと、アルマリアは微笑んだ。

艶やかに。

「殿下、もうひとつ、お願いしても良いでしょうか」

「……ヴィルヘルム、ですよアルマリア。??何でしょう」

やっぱりヴィルヘルム様は食えないお方だわ。

心内で苦笑して、だが見た目だけはそのままに。アルマリアはヴィルヘルムの耳元に口を寄せた。

「?????、?????」

ヴィルヘルムの愁眉が訝し気に寄る。どういふことかと問われる前に、一歩、後ろへ下がってアルマリアは彼から距離をとった。

目を剥き手を伸ばす王子に雨除けを投げる。
預けさせてください、と囁いて。

?????みいつけた、

笑み綻んだ口元をそのままに、ゆっくりと振り向いたアルマリアを、巨大な熊の姿をした魔物が呑み込んだ。

*

「?????ッ」

がくんっ、と長いベールを羽織った女が、入り組んだ街路の狭間で膝をつく。途端に噎せ返るような甘い匂いが霧雨の中に混じっていく。彼女はその秀麗な面を歪めて、苦し気に口元を押さえた。りん、りん、と街の表に出る店のベルが、閉店を示すように鳴り響く。ざわめきがどつと彼女の耳に押し寄せて来る。

その、ほとんどが幸せなさざめきの中。

獣が唸るような耳障りな声が路地に充満する。

ゴミ捨て場を兼ねるこの路地は、ただでさえ良い匂いがしない。

だというのにさらにその甘い匂いが溜まっていく。

そんな臭気に包まれれば堪ったものではなかるうに、彼女はそこから動かない。

頰れるようにして、細い身体を折り曲げながら、己を蝕む苦痛に動けずにいる。

「……? あんた? ?????おい、大丈夫か?!」

荒く息を吐く彼女に気付いた、店仕舞いをしていた男が驚いたように駆け寄っていく。慌てたような手振りで見づく彼に、彼女はふわりと朱唇を笑みに形作った。

「……大丈夫、です。お気に、なさらず」

そんなことを言われても、と眉を寄せる人の良さそうな男の目から逃れるように彼女はゆっくりと立ち上がった。

「あ、おい……動いちや駄目なんじゃないか？」
「いえ……本当に大丈夫なので……では」

戸惑う男をおいて足を引き摺るように歩き去り、彼の目が届かぬ位置までいってから、呻く。

「……………お、のれ……………」

*

「こつち！ な気がするわりカルド！」

「エンナ、あんまりキレるな……さすがに殿下もこんな時くらい、」
「落ち着いてられますか！ ああああのバカ王子は、こつという時こそ本領発揮とばかりに輝く爽やか笑顔でおぞましいことするのよ
おおおお！」

「いや、そん」

……………なはずはない、と言えなかったらしいリカルドである。

クオルデイスは呆れた風情で二人を眺めていた。……………ここまで主を罵れるとは、いつそあつぱれというべきか。というか何故殿下はこんなに信用があらせられないのだろう。クオルデイスは遠い目になった。自国の第一王子象が崩れていく。

死体愛好家ヴィルヘルム。そのあざなを知らぬものはこのリュフアーニア内において数えるほどしかないだろう。だが、そこまで末期とはさすがに思っていないかった。

(……別に、おかしな方ではないように思えるが)
医学部で死体解剖をざくざく行っている彼の感覚は微妙にズレていた。

「……………」

ふと、医術服の白い胸元を握りしめる。雨に濡れたそれは、あまり良い感触ではなかった。だけど、そんなことは気にならない。前で不穏なことを呟き始めたエンナが止めるに止められずにいるリカルドの手を焼かしている。

鈍い、痛みが奔った。

『兄様、あのね、もうすぐね』

くすくすと、嬉し気に微笑いながら、秘密を打ち明けるようにして囁いてきた妹の姿を、今もよく覚えていてる。

朗らかに笑う姿は、我が妹ながら可愛らしく、意外にも、困ったものだと苦笑を禁じ得なかったほど行動的でしたたかだった。

それは、彼と、彼の妹と、今は亡き母と三人だけの秘密。

舌を噛み切りたくなるような哀絶とは正反対の、微かな、??だが確実にそうと理解させられる痛み。

仄かに身体の芯が熱い。

それは、遥か遠い、母様ははさまの話。

歌うような、母の語り口を覚えている。目を輝かせて、強さを求め始めた妹の心底幸せそうな顔を覚えている。

「……マリーシャ」

あともう少しだったのに。

あと、ほんの、数日。

おまえが生きていれば?????

「???そう思いませんか?! クオルデイス様!」

エンナの呼びかけに、クオルデイスははっと我に返った。

「え、あ???はい?」

「ですよね!」

「ちよつと待てエンナ。クオルデイス殿は多分聞いていらっしやらなかったと……」

「リカルド。あの王子の性格をあなたはよおおおく知っているでしょう。なんと、しても、取っ捕まえなきゃいけないのよ!」

だから主旨が違う。

そう言いたいのだらうリカルドが、情けない顔で額を覆う。

クオルデイスはなんとなく微妙な気分になった。

(……なんというか……)

「エンナ殿、殿下の前に、まず魔物が……」

「魔物より殿下の方が危ないに決まっていますではありませんか」

きつぱりとした迷いなく口調に、クオルデイスは黙らざるをえなかった。

……それは侍女の発言として間違っているんじゃないだろうか。思ったが、やはり彼は何も言えなかった。

とりあえず、ぬかるみにずるつと足を滑らせそうになったエンナを慌てて支えるリカルドが、さらにこけそうになるのを支えることに専念したのだった。

ふう、と白煙が揺れた。

まるで煙突から漏れ出る煙のように。

それは、鮮やかな色をした紅茶から溢れていた。だからそれを白煙というのはいささか語弊があるだろう。その白い湯気は細くはなびき、やがて影の薄い青年のもとまで届く。

「……空気が、悪いわ」

清廉極まる部屋の中で、真白と表現するに似つかわしいその美しさ。

清楚な一室で一点、清艶な彼女は、眉ひとつ動かさずに呟いた。

ふ、と笑声。

同時に僅かに張りつめていた空気が緩む。そして、細く細く流れ

ていた湯気は一瞬で丸まり、またふわりと揺れ動いた。

「まったく貴女は少々の変化にも敏感だ。少しはその繊細な凶太さを反転させたら如何かね」

無礼と彼女なら手打ちすることも出来よう台詞にも、何の感情も示さない。ただ、音もなく上等な紅茶を含むだけ。

その様子を、しかしこちらも全く気にせず飄然と青年は笑みを刷く。

ゆらりと、その薄い影が揺れた。

室内の大きな姿見の前で、彼は酷く曖昧に映っている。

「……いつも思っただけけれど」

「うん？」

「おまえの存在は著しく名とずれてはいないかしら」

沈黙が降り積もる。

「?????それこそおかしな発言だ。この身がどういうものかなど、一体何の意味があるのかね？」

くすくすと笑う声は微かに低く、微かに高い。

どうにも印象に残り難い不可思議な声だった。

彼女が黙すると、彼はふっと口を閉じてから、その蒼い瞳を細める。

「?????あの子は相も変わらず、厄介なものに好かれるようだ。」

自ら突っ込んでいる気がしなくてもないがね」

待つて。

待つて待つて待つて。

兄上。ああ、お伝えしなくては。一刻も早く。兄上?????兄様にだけは。

待つて、待つて。お願い。

まだ保つて。私の身体。どうか、兄様のもとにまで。ああ。

私の?????様。

あなたのお顔を、たった、たった一度で良いから。

ああ。

たすけて。

どうかたすけて、兄様。

?????????どうかかのお方を、たすけて兄様。

ヴェルヘルムは呆然とその様を見ていた。

黒々とした闇が雨に濡れぬかるんだ地を染め上げる。蜘蛛の巣の如く広がるそれは、どう見ても禍々しくしか感じ得ない。

(……………どう、)

どういう、ことだ。

投げかけられた雨除けを握りしめ、飽和しそうになる頭を何とか回転させる。ぞわりと木々があわめいた。嫌な音だ。壊死した骨の軋む音の方が、よっぽど可愛い。

アルマリアが吞まれた。

暗黒を宿す、魔物の口内へ。

救いようのないほど由々しき事態であるし、理性と優先事項という感情の足枷を省いた上で言わせてもらおうのならば、絶望してもおかしくないほど憤ろしい。けれど。

けれど、どうしてかそんなに衝撃は大きくない。

未だ混乱してはいるが、闇を引きずり去りゆく魔物から距離をとるくらいは出来る。

浅く息を吐いて、ヴィルヘルムは思考する。

おそらく、それは。

『ヴィルヘルム様。どうか私の生を信じていただけませんか。私自身を信頼なさらなくても構いません。ですがどうか、私はまだ死ぬぬとお心に留め置きください。そしてどうか、どうか。どうかヴィルヘルム様は直ぐにお逃げください。たとえそのリュファーンアの血にかかる加護をもってしても、あまり魔物に近寄るのは懸命ではありません。??私、必ず戻って参りますので』

世にも稀な天音で囁かれた、あの寸前の言葉があったからこそ。

ふわりと、古の神々の如く柔らかに地を蹴って、彼女は魔物に呑まれた。微笑んだまま。

けれど同時に彼女は言ったのだ。戻ってくる、と。

その生を信じると。

(我が細君は、酷いことを仰る)

青筋が浮くほど強く、雨除けを握りしめる。

貴女を信じなくていい？

(貴女は私を誰と思っている)

笑止千万。

「……妻を信じぬ夫がどこにいる」

たとえおままごとのような、抱くべき感情のない関係であったとしても。

*

「まったくまったく」

ふ、ふ、ふ、と彼は笑う。

暗い杳と知れぬ不可思議な道を歩く彼の足から、細く長い影が伸びている。

地を踏むごとに、その爪先は微かに黒に沈み、しかし次の瞬間には波が引くように元に戻る。

足音はない。

響くのは秘めやかな笑声と。

「待っておいで、白雪姫。相も変わらず魔物に好かれる哀れな娘」

ただ高く打ち付けられる、ステッキの音のみ。

*

魔物の中というのは、いわゆるごくごく一般の生物の口内とは大分趣が異なる。

(趣、と言つていいのか微妙だけれど……)

微かに仄光るきらきらとした燐光を無視すれば、ただの闇だ。蕩けるような、闇。

それこそ彼ら魔物が外界に垂れ流すあの“闇”のように。真っ黒で。

沈みこみそうになる。

感覚が一切掴めない、忌々しい場所だ。

(……場所、とも言わないかしら)

気を緩めれば直ぐさま溶けそうになる思考をなんとか動かして、彼女は小さく、唇を噛んだ。

どこだ。

闇色の地に、魔物の体内に、手の平を押し付けて、アルマリアはその美しいかんばせを歪ませる。

漆黒の髪が揺らぎ、舞い、彼女の表情を隠す。

呻き声、が。

心臓を掻きむしられるような壮絶極まりない呻きが耳朶を打ち鳴らす。これが魔物だ。これが魔物の叫びだ。憎悪だ。快樂だ。?? 決して植物連鎖に加わる生物には否定し切れぬ、食欲だ。

(?????いいえ)

狂ったような呻きに騙されるな。これは、食欲でありながら、快樂。生存本能でありながら悦樂。

人の血肉を喰らい魂を貪ることへの尽きぬ欲。残虐なる魔のもの、唯一確かな感情。

アルマリアは深く息を吐き、それからぐつと立ち上がった。黒の上を歩く。ずぶり、ずぶり。決して快いとは言えぬ感触を耐えて進む。

魔物というのは、大抵獲物を丸呑みにする。

その体を溶かし、最も好み欲した“魂”を喰らうのだ。

だから彼らにとって肉体はあまりご馳走にはなり得ない。ごくたまに人体の一分を好んでわざわざ剥ぎ取って摂取する外道?? 魔物に道も何もないかもしれないが?? な趣味を抱くものもいるが、少なくとも、この歪んだ熊のような魔物にはない。現に今彼女を呑み込み溶かしてしまおうとしているのだから。むしろそういう死体を喜ぶのはヴィルヘルムの方ではなからうか。

「……ヴィル、ヘルム様、は」

大丈夫かしら。

ふと、アルマリアは身を震わせた。自分は良い。きっと、否、おそらくここから抜け出すことも助かることも出来る。この身体は、そういう風に、、、、、、、出来ている。

だが、ヴィルヘルムはそうではない。たとえ聖王家の血をもってしても、喰われてしまえば終わりだ。ヴィルヘルムはアンベラルサ一の獲物ではない。少なくとも今は、だが。

獲物ではない限り、彼らは出来る限りの残虐性を駆使して人を喰らうだろう。

昔からそうだった。理由など分からない。説明することなんてもっと無理だ。出会えば逃げ切るだけでも僥倖であろう生物を前に、どうして捕獲など出来ようか。

ただ、人が絶対に分かっているなければならないのは。

魔物が人の魂を好むという、一点だ。

(聖王国の方々は、魔物の存在すらお知りにならないようだったけれど……)

耳鳴りが酷い。引きちぎられそうな気分だ。けれど、この音が近ければ近いほど、“隙間”がある。

魔物の最も弱い部分。

????????????????いん、

耳障りな音が、心臓を痛打した。

鼓動が早くなる。アルマリアは思わず耳を抑えて、ぐっと目を瞑った。??怖い。何年経っても、何度このような目にあっても。恐れをぬぐい去ることなど出来はしない。

だからアルマリアは、いつも思い浮かべる友の顔を思い出そうと
した。
けれど。

思い浮かんだのは、穏やかに微笑むあのひとの顔で。

「……………え？」

耳鳴りが止む。これはどういふことだろうか。まさか聖王家の力
だとしても？

??いいえ、いいえ。
それよりも。

瞼を押し上げる。浮かんだ顔を反芻する。

どうして。

どうして、ヴィルヘルム様、を。
私。

「どう、して」

分からない。これは何。どうしてクロを思い出そうとしたのに、
ヴィルヘルム様を。

ぐるぐると頭が混乱する。混乱して混乱して。

だけど全く分からなくて、彼女はその疑問を取りあえず胸の奥に
仕舞っておくことにした。……そうよアルマリア。今はそんな些事

を気にしている場合ではないわ。

決意を新たに、再び膝を付く。そろそろ手を這わせて、唸り声を確かめる。

どくん、と手の平の下が脈動した。

懐をまさぐる。陶器で出来た、真っ白の短刀を取り出す。それから抜けるように透明な液体が入った、清潔な瓶を。

瓶のコルクを抜き、手の平の下に慎重に垂らす。??ズン、と唸りが酷くなった。怒り狂うように、激しさを増す脈動。その恐ろしさを無視して、今度は短刀の鞘を抜く。

白刃が闇に光った。

ふう、と息をつく。

そうしてアルマリアは袖の奥に隠れた、雪のように白い腕の内側に刃を当てる。

躊躇いもなく、彼女は刃を走らせた。

*

「?????!」

背筋に悪寒が走る。クオルデイスは額を覆い、止まりかけた息を

浅く吐き出した。

「クオルデイス様？ 如何なさいました？ 顔色がお悪うございませよ」

「気持ちの悪い雨ですからね。少々休みませうか？」

躡りかけた彼に、エンナとリカルドがそれぞれ案じてくる。クオルデイスはなんとか苦笑を返して、大丈夫ですと首を振った。

そう、大丈夫だ。

自分、は。

(アルマリア様……っ)

何だ。何だ今のは。

彼女の身に何が起きた？

あの魔物の闇に連れ去られた時ですら、何もなかったのに。

何故、今。

「クオルデイス様、本当に大丈夫ですか？」

恐る恐るエンナが聞く。控えめなのはおそらく、クオルデイスが曲がりなりとも貴族だからだろう。最近の貴族というものは、本来の己の位置というものを忘れがちな傾向にある。嘆かわしいことだ。霧雨に濡れべたつく髪を無造作に拭い、クオルデイスはもう一度大丈夫ですと答えた。

「すみません、ご心配をおかけしました」

「いえ、殿下に比べれば全然ですので。お気になさらず」

「比べる相手が間違っているぞ……。クオルデイス殿、本当にきつくなったら仰ってください。我々はわりと強行軍になれています」

それ故加減が上手くないのです」

リカルドが微かに眉を寄せて言う。それでも軍人然とした面持ちなのが可笑しかった。

クオルデイスは手近な樹に片手をついた。……ぬめっとしていた。

マリーシャ。

遠い、空の彼方へ消えた、彼女の心を憶う。

僕の妹。同じ願いを抱いた肉親。母の想いを継いだ者。

分かっている。

おまえの願いは分かっている。

だからどうか、君だけでも安らかにいてくれ。

(……頼むから、この雨がおまえの憤りでないよう祈っているよ)

まるで叱りつけるような嫌な雨に、彼はげんなりと肩を落とした。かぶりを振り、思考を切り替える。

「?????エンナ殿、まだ見つかりませんか？」

「ううん……、もう、少しな気はするんですけど。………なあんか、嫌な気がばっしばしするんですよねえ」

むむむ、と顎を掴んでエンナは考え込む。が、足はざかざかと前へ進む。まるで迷いない進度だ。

「……あの、リカルド殿。本当に何故エンナ殿は、」
「ああ、ですからあれは野生のカンのようなものですから。あまりお気になさらずに。というか殿下のご趣味同様、首を突っ込まない方がいいもののひとつです」

クオルデイスが問いかけた疑問を、リカルドはあっさり退け、ははと乾いた笑みを浮かべる。聞くな、とでも言いたげな表情にクオルデイスはそっと目を逸らした。

と、ふいにリカルドの眼差しがきつくなった。エンナを見れば彼女も険しい顔をしている。

「……………クオルデイス殿、走れますか？」
「??、はい」

問うことなど必要なかろう。

返事を聞いた瞬間駆け出した二人を追って、クオルデイスもぬめついた大地を走り出した。

一直線に。

*

「?????ふむ。無理は貴女的美徳だが、し過ぎて良いものではないと。何度言えはわかるのだからね」

街中の聖女 12

?????かの王国は美しい。

けれども周りにうずたかく積まれたこの腐臭の在処を何とする。

何故に穢してはならぬと人は言う。

何故壊してはならぬと人は言う。

何故、慈しまねばならぬのだ。

汚いものなど山ほどある。

ならば少し波紋を落とすことくらい、なんだというのだ？

*

右胸が疼く。

それは、妹との絆の証とも言えようか。??否、それは数日前のことだ。

だとすればこの痛みは何だ。自問し、けれど彼はその正確な答えを知っている。己に流れる血が知っている。

ああ。

麗しき、エビリスの白雪姫。

一刻も早く、御身のお傍へ。

実を言うとエンナは自分の直感に従いたくなかった。

そりゃあ、曲がりなりとも王子だ。自国の王子。向かえに行かない訳にはいくまい。だが。

(……あの変態王子なら勝手に自分で何とかするでしょーよ！)
思い出すのは幼い頃の悪夢の日々。

たとえば、紹介された目の前で、「君は死んでないじゃないか」と真顔で言われたり。

たとえば、初めて雷狼と称される元帥にお会いしたその瞬間、あの馬鹿王子の変態発言で王宮から迷子になって鹿と殺りあうほど野性味溢れる森に吹っ飛ばされたり。

たとえば、その延長線上で侍女を目指している筈の自分が如何にも軍人然とした面持ちの少年とともに元帥直々に指南されることになったり。

たとえば、何故かそれに馬鹿まで加わって、当時の侍女頭にこっぴどく、それはもう凄惨なまでに叱られてしごかれたり。

たとえば、王子の見た目に馬鹿惚れした馬鹿娘達に「じゃあ、君の脳髓、調べてもいいのかな？」とか何とか意味不明なことを言うては退けて何でかその恨みがこっちに向かったり。

……………ああ。

(ありえない)

思い出すだけで腹が立つてくる。大体何故皆してあのアホ面に騙されるのだけしからん。ていうか玉砕しても私の方にくるな！

(馬鹿に惚れる馬鹿、ああいや。もういや。今あの王子滅んでくれないかしら本当に！ ああああでももしアルマリア様があんな変態に惚れてしまわれたらどうしよう！ いやー信じらんない信じたくないでも愛のない結婚もあのお方の年頃には残酷なものかもしれないけどもいやー！)

そういえばアルマリアは全く、ヴィルヘルムの嗜好について非難しなかった。気にならない、といよりどうでも良いということなのだろうか。だとしたらやはり彼女は大物だ。ただのお姫様ではない。いやそれはなんとなく分かっていたが、改めてなんというか、身にしみた。

……………ということやはりあの変態の妻になれるのは彼女しかない。

否、一応はもう夫婦の括りに入っているのだが。心を通わせられるかどうかはまた別問題なのが雲上人の結婚というものだ。だが、庶民のエンナからしてみれば、少々の想いくらいはあった方がよいのではないかと思う。あとで愛人の暴走やら血筋が曖昧な赤子などが現れては大問題だ。継承権もだが、エンナの立場からすると主に侍女間で。そういうごたごたは本当に面倒臭い。絶対嫌。ただでさえろくでなしの第一王子に苦労しているのに、これ以上厄介が増えて堪えるものですか！

「????? エンナ、思考馱々漏れなんだが……」

「あら失礼。?????!」

ほほ、と口元を覆ってから、はっと目を見張る。

「いたわりカルド！ 口惜しいことに！」

「何故口惜しいんだ僥倖だろうが！ って、つまり殿下お一人ってことか?!」

「それ以外にどういう答えがあつて?!」

「そんな……っ」

ぎよっとするリカルドをエンナが睨めつけ、クォルデイスがこの世の終わりとも言いた気に呻く。

そんな彼らに、徐々に影の近づいてきた王子が振り返り。

「……………おい。聞こえているぞ」

呆れた風情で呟いた。

*

遠い、遠いお伽噺を語りましょう。

それは、遙か昔のことであり、ほんの指先一つ分以前のこともありましょう。

むかし、むかし。あるいは思い出。

ある一匹の魔物がおりました。

彼は驚いたことにごころがあり、
ひとのたましいを恐れていました。

きらきら。きらきら。

ひとのたましいは綺麗です。

淀んだものとてありましょう。けれど魔物にしてみたら、
目も眩むほどの美しさ。

それが清いという訳ではなく。
むしろ泥にまみれてこそ。

魔物は思います。

ああ、これを食べてしまったら、己は消えてしまうのではないかと。

ああ！　なんと浅はか！　なんと無知！

ただ同朋と同じように、躊躇いなく食べておけば良かったのです！

だというのに魔物は恐れてしまいました。

はじめて獲物と定めたひとりの少女の魂を。

彼女はとても美しく、そして聡明な娘でした。

私はこの魔物に食べられる。

そう、理解し覚悟した上で、彼女はじっと魔物を睨みました。

『食べるのならお食べなさい。けれど私の心までは食べられぬでしょう。だってあなたは魔物なのだから。だからあなたが私の全てを食べることなど不可能なんだわ』

娘は良いました。

耳鳴りも酷いだろうに、ただ、魔物を睨めつけて言いました。

魔物は恐れました。

眩しいほどの彼女のたましいと、そのことばに恐れしました。

『ああ、ああ、そうだとも。我におまえは食せない。ああ、ああ、なんとということだ！　おまえは初めての獲物だったのに！』

魔物は嘆きました。

嘆き、嘆き、けれど少女を手放しませんでした。

美しい娘は疑問に思いながら、彼の傍にすることにしました。食べられないと知ってからなんとか逃げ出そうと試みて、そのたびに失敗します。

悔しがる娘を、魔物は物珍しく思いました。

なんと、ひとは奇怪な生き物だ。

彼は興味を引かれました。そうして、娘に疑問を投げかけます。

『ひとは皆、おまえのようなものなのか？』

『そんな訳ないでしょう。馬鹿なこと言わないで』

娘の答えは素っ気有りません。けれど彼は満足しました。

しばらくして彼は娘に木の実を持ってきました。警戒する彼女に無理矢理それを食べさせます。

娘は驚きました。

美味しいわ！ と叫び、それから何故こんなことをするのかと魔物に問いました。すると魔物は言いました。

ひとはものを食べずにいたら死んでしまうものなのだろう、と。娘は驚き、やはり疑問に思いましたが、その瞬間何故か魔物を厭う気力をなくしました。

時は過ぎます。

当然のように、当然のように。
残酷に。

ある日、魔物が出掛けて帰ってきたら、美しく聡明な、もう少女というよりひとりの立派な女性とでも言うべき美女に成長した彼女が、樹のうろの中で死んでいました。

魔物は驚きました。
驚き、怒りました。

何故、どうして、なにゆえ彼女が死んでいる！

急いで彼女の身体を確かめれば、両腕を、両足を、頭を。

無惨にも獣に食べられていたのです。

魔物は人を丸呑みにします。獲物でなくとも、出来る限りの残酷さを伴って痛めつけてから、やはり全て余すことなく食べるでしょう。けれど彼女は残っていました。襲ったのが獣でしたから、残っていました。

魔物は咆哮しました。

滾るような怒りに、全てを焼き尽くそうとさえ思いました。

そうして彼は考えます。

彼女を己に残すには、ならば食べればいいのか、と。

けれど彼女のたましいはもう有りません。

そもそも魔物は彼女のたましいが眩し過ぎて、食べれなかったのです。

また再び苦悩し、しかし彼は諦めませんでした。

もはやそれは、狂った魔物のさらなる狂気とでも呼びましようか。

魔物は娘の、残った身体を引き裂きました。

胸を、心臓を、胃を抉り、ばらばらに引き裂きました。

そうしてそのはらわたを、初めて彼は口に含みました。
ばりばりと、ばりばりと。
大腸を、肝臓を、肋骨を。
泣きながら彼は食べました。
嘔いながら、彼は食べました。
食べて、食べて、食べ尽くして。

そうして漸くこころを持ってしまった魔物は気付きました。

彼は娘に?????

……それからその魔物は、ひとのたましいではなく、臓物を求めるようになりました。

ただ、ただ、ひとのはらわたを食べ回るのです。
それも美しい娘の臓物を。

ふふ、これでお伽噺は終わりです。怖いですって？ ああ、それはそうでしょう、怖くなくてはなりません。

何故ならこれには寓意が込められているのですから。……いえ、違いますね。寓意は私達ひとには関係ないでしょう。込められているのは、発せられているのは警告です。

皆さん、魔物はこのように恐ろしいのです。

ただの魔物だけではなく、このような残酷な魔物には気をつけなくてはけません。決して心を許されませぬよう。

決して、見つかり捕まりませぬよう。

*

「?????つんの、馬鹿王子?????????つっつっ!!」

きい?????ん、と雨すら吹き飛ばすような怒声とともに、
ヴィルヘルムの頭に何かがつんと激突した。

「……エンナ、おまえ、いいかげん私を何だと思ってる」

ずきずきと痛む頭を押さえ、腰を屈めて飛んできた何かを拾う。

……木の実? それにしてはものすごく痛かったが。微妙に泥がつき、濡れて酷く嫌な感触が伝わってくる。そうしている間にも袖や頭髪がさあさあと降る雨に濡れ、べたついて気持ち悪い。

ため息をついて不機嫌にそれを放ると、リカルドはなんなく受け止めた。その右眉が驚いたように上がる。

「これ、ルジエンナの実ですよ。木の実の三大珍味です。泥と毒と涙のしょっぱさを併せ持ったような味がするらしいですけど……滅

多に見つからないのに、エンナおまえこれどこでいつの間に拾ったんだ？」

「さっきよさっき。丁度落ちていたから」

……その味は果たして食べて良いものなのか。というか。

「そんなことはどうでもいい。それより?????」

「殿下！ アルマリア様は、一体いずこに……っ?!」

言いかけた時、胸ぐらを掴む勢いでクオルデイスが詰め寄ってきた。仰け反りながら、ああ、と頷く。

「魔物の中に、吞まれた」

びし、と空気が固まった。

一気にズン、と彼らの顔色は悪くなり、どす黒い気配が押し寄せてくる。予想通りの反応だ。

エンナが何か罵倒を吐きたそうな凄まじい形相で口を開いたが、険しい表情のリカルドがその口を塞いで押しとどめる。ヴィルヘルムはそれを一瞥したのち、目の前の男をじっと観察した。

おかしいほど青ざめ、微かに身を震わせている。無論、雨のせいではなからう。

(……この男)

ヴィルヘルムが目を眇めた瞬間。

憎悪の眼差しが、彼を痛打した。

意外なほど強い感情に眼を剥く。かろうじて抑えていたのである。それは濁流の如く吹き出してヴィルヘルムを襲う。同時にクオルデイスは今度こそ胸ぐらを掴んで引き寄せた。

「ッ何故……!! 聖王家の血を引く貴方がついておられながら、

なん?????」

「まあ待て。おまえはアルマリアの生を疑うか」

掴んで引き寄せられたまま、ヴィルヘルムは冷静に、冷酷に、クオルデイスを見る。

この男は、何だ。

同行を申し出られた時は特に不審には思わなかった。したたかな男だ、とは思ったが。ただ、同行者の顔を見た時の、あの表情。アルマリアを見た時の、驚愕と疑惑と、歓喜にも似たあの眼差し。

「クオルデイス」アフォルグ「グルーツ。おまえは何だ？」

クオルデイスの青灰色の瞳が揺れる。質問の意味が、半分分からず、そしてもしこれを聞かれているのなら、という色を宿した揺れ方だった。

「……少なくともアルマリアの愛人ではあるまいが」

「?????つてそんな訳ないでしょうがこのド変態！」

「……エンナ、おまえは何でそう空気を読まないんだ。少しは自重しなさい」

「んなつ???! ああああのですねえ、殿下にだけはそれ仰られたくありません！ 空気読まないのはどなたですかどなた！」

ぎゃあぎゃああと喚くエンナの口はいつの間に解放されたのか。ちらりと見やればリカルドが疲れた顔で額を覆っている。

一方クオルデイスはというと、呆然とした顔で、停止していた。雨で貼り付いた髪が微妙によれて見える。

「……クオルデイス？」

「あ、あい……？ ある、アルマリア様の……？ あ、あ、あ、ありえな、」

「……解った。冗談だ。そう気負うな」

そんなに動揺することか。

（まあ、アルマリア程、そういった言葉と無縁に見えるものもないが。というよりあの方は色恋沙汰にうとそうに思える、のは気のせいだろうか）

仮にも王族にありながら、そういったことにとんと無頓着だ。にっこり微笑む姿はまるで穢れなど知らぬよう。白骨のように白い肌が、ほんのり色づく様はそれなりどころかとても可愛らしい。つくづく何故彼女は死体じゃないのか。惜しい。

ヴィルヘルムは、雨除けを投げて寄越した妻の、どこか必死な強さに眼を細めた。

あの凍ることのない微笑みが、もう一度見たいものだ。

ヴィルヘルムは珍しく、生者の証でもあるその笑みなるものを渴望する。

「言いたくなければいい。アルマリアを害するつもりも、私達に敵意がある訳でもないのなら」

言い捨てれば、吹きすさぶ霧雨をもともせず、クオルデイスは弾かれたように顔を上げ、それこそ必死な態で否定する。

「もちろんです……っ！ そんなこと、ありえません！」

「それは分かったからもういいと言っている。それは、アルマリアを助けてからだ」

はっ、とりカルドが構える。遅い。

ゆらりと、先程逃げたばかりの魔物が遠くで揺らめいたのを、
イルヘルムは冷ややかに睨んだ。

アルマリア。

私は貴女を信じている。貴女の生を信じている。

(だが、もうひとつの願いは聞けないと、分かってくたださることを
祈っているよ)

*

つう、と。

白い肌から、真紅の血が流れ落ちる。未だ乾ききらぬ鮮血。
慣れた痛みにも、それでも眉を寄せ、は、と息を吐く。浅く、小さ
く。

無感動に滴るそれを見て、彼女は腕の位置を移動させた。
すなわち先程瓶の中身を垂らした位置まで。

ぼた、とアルマリアの血がひとしずく、そこに落ちた。

街中の聖女 断章 綺麗なものが優しいだけとは限りません(前書き)

微残酷描写注意です！ あくまで「微」ですが、お食事中などにはおすすめしませんすみません！

街中の聖女 断章 綺麗なものが優しいだけとは限りません

昔語りをしよう。

誰もが記憶の片隅に残す、しかし多くは曖昧として判然とせず、
ほぼ忘れられかけた、他愛もないそれぞれの過去の話だ。

それが誰にとってどんな意味があったのか。
そんなことは気にするべきではない。

ただ、そんなこともあったのだと、思い出すだけに止めるのが、

?????正しい昔話というものだ。

*

ほんの、少し以前の話だ。

『アーリイ、どうして貴女はそう反省しないのかね？』

ふう、と口調のわりには適当な、どこか面倒そうに聞こえる声
音で、彼は言った。

彼女は落ち込んだように俯き、ぺたりと地べたに座り込んだまま、
ただ黙っていた。

反論する言葉が、なかった。

『……ん？ いや、反省はしているのか。ううむ、なんといったか
ね。精進？ いやそれも違うか。まあ、何でもいいことだがね』

ふう、と。

今度は紫煙がくゆる。

古びた、細工だけはきめ細かく丁寧な煙管から伸びたそれが曇り
空に溶けていく。

『……アーリイ』

アーリイ、と彼は昔、自分をそう呼んでいた。もっと分かりやす
く、よくつけられる愛称ではなく、アーリイと。

彼女は別段それが嫌いな訳ではなかったが、ただほんの少し不
思議に思っていた。

アーリイ、と彼女をそう呼ぶ時、つまりは彼女を呼ぶ時彼は、ほ
んの少し懐かしいような苦いような表情を浮かべるからだ。

『貴女は弱い』

よわい。

彼女は泣きそうに顔を歪めた。けれど泣かない。泣き方など知ら
なかったから。どういふ風に涙を流せばいいのかわらなかつたから。

?? 本来、それは誰に教わることなく知らねばならないことだったけれど。

彼女は問うた。

ならばどうすればいいのか、と。

どうすれば、自分は、赦されるのか、と。

幼い弱さ。その問いこそが弱いと、本当は分かっているながら。

『赦される必要があるのかね』

彼は彼女を見もせずと言った。衝撃だった。赦されてはならないのか、と彼女は思った。その様子をちらりとだけ一瞥した彼はつまらなそうに煙を吐く。

壊れた雲のようだった。

『そもそも誰がどのようにどうして貴女を赦すというのだね。赦す、という行為は、一般を示す時に使うことなど出来まいよ。それはただ、便宜上、とでも呼ぶような偽りであろう』

……では。

では、自分は、何をすればいいのだろう。

赦されないのなら、生きていてはならないのか。それともずうつと生きて、己という存在に苛まれ続けるべきなのか。

『アーリイ、そういう考え方を止めなさい。そういう風に都合よく他者を捉えてはまるで意味を成さないと思わないのかね。まあ、思わないならそれでも構わんがね。だけど、アーリイ。どうして何かをしたいと望むのか。貴女の血と、立場と、負うべき罪と、責務と、そして唯一他に縛られながら自由を許される魂の根底から、全てを理解し感じそして考えるがいい。それで道が見えてくる、なんて甘いことも、知るべき全てを理解出来ることもないだろうが、それで

もそれは貴女に必要なことだろうよ。希有な魂を持つ子。穢れ、清く、それ故に美しい血を宿す娘』

謡うような声音に震える。睫が、唇が、頬が。

稚い少女には重く難解過ぎる言葉の羅列に、だが彼女は確と理解の証を見せる。

己の立場。この身に流れる血。多くのものに縛られながら、けれどどう動くことも出来る魂。

たましい。

それを、誰かはこころの祖と呼び。

誰かは、精神の在処と呼ぶ。

少女の頭の上を滑るように紫煙がくゆり、今にも降り出しそうな空へ霧散する。

『アーリイ』

困ったような、呆れたような声。だけど。

『ほうら、顔をあげたらどうだね。??私のアーリイ』

その目はいつだって慈愛に満ちていたから。

だから、彼女にとって、彼だけは信じ愛すことの出来る“誰か”だったのだ。

*

それよりもさらに以前の話だ。

『いつ?????ひ、あ……ッ、あああああ!!』

硝煙も鉛玉も刃すらないのに、まるで一昔前の戦場のような悲鳴が上がっていた。

その、美しい茨の森で。

どっしって。

どっしって。

どうして。

どうしてあれがいる。どうしてあんなものがある。どうして。

どうして自分達が襲われているのだ。

『あ、う……うあああ！！　ね、ねえ、姉ちゃあん……ッ！』
『ロディー！！』

怯懦に見開かれた弟の目は、まるで狂人のおぼつかない。けれどそんなことどうだって良かった。まだ。まだこの子は生きている。そう、爆発しそうな己の心臓を押さえつけたのに。

『ッあ?????????!!!』

血飛沫が、舞う。

肉片が頬に当たった。

労働者階級には充分に上等な、つまりは酷く簡素で暖をとるぐら
いしか脳のない白い衣服は赤黒く??否、茶色に変色している。靴
はもう脱げてしまった。つまりは裸足で、日に灼けたくるぶしは、
裂けて血だらけになっていて。

びちゃ、り。

人体にこれほどの水分が含まれていたのか、と場違いな感想を抱
いてしまうほどの、赤。

ねばつくそれは、手の平に貼り付き、嫌な音を立てて地面に伝う。
どろりと膝に飛び降ってきた鮮血が重力に負けて零れ落ちる。彼女
の皮膚に吸い付きながら。

『……あ、ああ、あ』

がたがたと可笑しいくらい身体が震える。ぼと、と汚いものがへばりついた白い何かが落ちる。

変わり果てた弟、の。

???骨。

ひっ、と喉が鳴る。嫌。嫌だ。どうして。ロディ。そんな、そんなこと、ある訳がない。だって。だって。さつき、さつきま、で。一緒に苺を摘んで。明日はベルメールおばさんのところでパンを焼く手伝いをしなくちゃいけなくて。朝は鶏の卵に喜んだばかりだったのに。

そん、な。箸が。

けれど気絶寸前の彼女の前で、その白い弟の欠片すら呑み砕かれる。

『?????あああああああああああああッ!!』

絶叫が、閉ざされた天をつんざいた。

それからさらに、遙か昔に巻き戻る。

『ねえ、リアンフェルデ。あなたのたましいは美しいわね。清冽で、残酷で。なんて清らか』

ふふ、と天の使いの如き甘やかな声が、軽やかに笑い声を上げる。

『羨ましい』

真っ白な羽が部屋中を満たしている。??いいや、羽？ 羽ではない。

飛び交うのは確かに羽。けれど埋め尽くすのは白い花。

蕩けるような金糸の髪 of 青年はふつと唇を笑みに形作る。

『けれど貴女は夜闇の如く恐ろしく、愛らしい』

『愛らしい?! ふ、うふふ。ああ、もう、あなたって本当におか

しな頭をしているわ』

『欺瞞でも高貴だと言った方が良かったと?』

『憎いわ。綺麗、と誉めるのが女性には有効だと思うのだけれど。まあいいわ。そんなことを言われても仕方ないもの』

だって、当然のことだものね?

まるで傲慢に、けれど彼女は自嘲する。

もし彼が一言、たった一言でも選択を間違えば、彼女は美しく、凍土の如き怒りを表しただろう。その凄絶なる美貌をもって。

『ねえ、加護というのはとても利己的よね。それが本物だとすれば、なおさら』

『享受する側としては利用出来るなら利用するだけなものだけだね』

『ああ、そういうところ、本当に綺麗よ! なんて美しく、愛らしさの欠片もない男かしら?』

『では貴女のそれは、結局どういうものになるのか、お聴きしても?』

おどけるようにして問われた言葉に、彼女はまたもふふふ、と笑った。

『やあね、そんなことを聞くの?』

くす、くす。

軽やかな笑い声が上がるたび、ふわりふわりと白い花びらが舞い踊り、穢れない白の羽は宙に浮く。

『利己的極まる、呪いでしょう?』

そうして、白い部屋の扉は閉ざされる。
美しい二人の人の子を残して。

*

さて、昔語りもこれで最後だ。

これは、ほんの少し、それこそ一桁にも満たぬ前。

ひとり、死体を愛でる王子がいた。

彼は動かぬ冷たい身体を抱きしめた。

腐り落ちようが腐臭を滲ませようが、何の関係があるのだろう。

恍惚とする彼にはしかし、ひとりの少女と少年がいた。

彼らはその王子のおかしな性癖に、揃って悲鳴と苦言を喚いた。

ひとりはごくごく当然のように、この下変態がとばかりに怒鳴りつけ。

ひとりはごくごく真面目に、だからそれは死者への冒瀆ですこの馬鹿王子と幾分柔らかな口調でくどくどと叱りつけた。

けれど王子は微笑むばかり。

微笑み、穏やかに筋違いな嗜めを返して頭蓋に頬擦りをする。

二人の臣下を見つめる眼差しは至って優しくまるでどこからどう見ても完璧な王子様の風情。

しかし彼は遺体を離さない。

どんなにどんなに言われても。

ただただ微笑んでいるばかり。

さてはて彼の心は一体いずこにあるものか？

*

ぱたん、と分厚い本の表紙を重そうに閉じて、彼はため息をついた。

そもそも、兄と比べることが間違っている。効率だ何だと教師は言うが、内臓される性能の基準が違うのだからそんなこと言われても困るというものだ。

大体自分は小難しい本より巷のご令嬢がうふふほほと花の如き毒を含んだ愛らしい笑みで交わされる、七面倒くさい会話をはたで聴き、たまに引つ掻き回したりする方がずっと好きだ。大昔の詩人が綴った大仰な詩集に耽溺するのも良い。街で安く売られるぺらぺらとした紙に甘ったるい詩もどきを自分で紡ぐのも楽しい。

だが、こんな茶黒い教本はまっぴらだ。なんもかんもがつまらない。人には向き不向きがあるのだから、少しは勘弁してもらえないだろうか。

何も兄と同じことでなくとも世に貢献することも、恩を返すことも出来よう。ひとつのことに固執してどうする。それで上手くいく

なら有りかもしれぬがこれでは時間の無駄だ。浪費は麗しやかに行使してこそ意味がある。薔薇の一本分の価値もないことに使うことはない。人生甘い砂糖菓子のように生きねば。

などと彼なりの言い訳をこねくり回しながら、彼はふと眠た気な瞼を跳ね上げた。

ひらりと風に煽られて落ちた一枚の手紙。……仮にも一応同じ敷地内に住んでいる家族に、何故わざわざ封筒に入れた手紙を寄越すのか。いまいち頓珍漢な奴らの多いこと。

その筆頭であることにはほとんど気付いていない彼は、ふむ、と小さく頷いた。

「なあるほど。それなら近いうちにお茶会を開く準備をするべきか」

麗らかとは言い難い曇り空が、茶色い本棚に影を作った。

街中の聖女 断章 綺麗なものが優しいだけとは限りません(後書き)

街中の聖女 13

この胸の空洞を埋められるのなら、何をしたとて構うものか。

たとえ記憶の内の彼女が泣こうとも、彼女が消えたことには変わりはない。

彼女がこの世にいないのなら。

全て壊してしまえばいい。

*

ぱきん、と雪の結晶が割れるような音が、した。

慣れたその音色に瞼を下ろす。足下が崩れ落ちるような感覚。閉じた目裏が黒から白に切り替わる。発光するみたいに。

再び目を開けた時には魔物の体内は壊れ、その裡に宿された闇が崩壊していった。

アルマリアは落下する。

断末魔の悲鳴が耳に木霊した。

耳朶が壊れそう。それぐらい、凄まじい。びりびりと肌に響く。壊れ逝く魔物独特の、目眩がするほど濃厚な甘い臭気が鼻孔を突いた。

けれどアルマリアはただ、一回だけ瞬きをして、硝子の破片のように壊れていく魔物の闇を見つめやる。

ちいさく、呟く。

「ごめんなさい」

魔物という存在が好きではなかった。むしろ恨めしいほど。大嫌い、と言っても過言ではない。

それは昔からのことであつたけれど、この年になつても一向に改善される気配はない。

恐ろしくて、恐ろしくて。

それでも自分が引き寄せる限り、自分が倒さなきゃいけないと、幼い彼女は思っていた。

持続されたその意識は変わらず少女に根付き、けれど魔物を殺す感触に吐き気を覚える。

魔物は決して、人にとって善ではない。

けれど魔物もまた、捕食者なのだ。人が魚を狩るのと同じように、魔物も人を狩る。けれど酷く残虐に。

人の括りに入る彼女は、だから魔物を好きになれないし、痛い目にあつてばかりの身としては心底憎い。恐ろしい。

しかしそれでも彼らを殺す時、一抹の罪悪感を覚えるのだ。

彼女は、アルマリアは、思う。

なんて。

なんて弱い。

役に立ちたくて、死にたくなくて、守りたくて。

己を襲う、魔物を殺す。なのにそれに嫌悪感を覚える。なんて。

袖の間から血が滑った。どうやらまだ止まりきっていないらしい。

アルマリアは苦笑した。

?????好きなだけ享けるがいい。壊す変わりに、幾らでもこの血を下げ渡そう。

たとえこの忌まわしき血がその身を蝕むと知っても、彼ら魔物はアルマリアから立ち上る匂いに惹かれ、そして毒の如き血を欲してしまうのだから。

???匂い。

アルマリアは不意に胸を圧された。崩壊する熊の形を模していた魔物から、雨に濡れた木の実の香りが漂ってきた。湿り気を帯びたどこか陰鬱とした匂い。何処か、ここ最近で何気なく嗅いだことのあるような。

(……どこ、で)

意識が散乱する。落下していることを忘れ、重力と風に身を任せることが疎かになる。

その一瞬で、ふと彼女は体勢を崩した。

「えっ?????あ、きゃ、」

がくん、と腰が折れる。首が変な音を立てた。風圧が強くなる。アルマリアは真っ青になって、声にならない悲鳴を上げた。

……やってしまったわ、と心のどこかが冷静に嘆いた。

*

不意に耳をつんざくような悲鳴が轟いた。

ぎよつとして耳を塞ぎつつ、音源を凝視する。と、歪んだ熊のような見た目の魔物が、黒煙をあげながら崩壊していく。??否、あれは煙ではなく、……もしや、あの闇のようなものなのだろうか。破片が飛び散るように、はたまた溶けるように。

????何故かヴィルヘルムは急に嫌な予感に襲われた。

ぼかんとするリカルド達を置いて駆け出す。一刻も早く行かねば間に合わぬ、と何かが警鐘を鳴らした。

「?????て殿下?! いきなりどうされたんですか?!」

エンナの怒声じみた問いも無視してただ走る。草の根をかきわけ、木々を潜り、大音声で悲鳴を上げる魔物の前で急停止する。

ヴィルヘルムは気付けば両腕を広げていた。空を見上げる。霧雨に混じって、黒い影がものすごい勢いで落下してきていた。

その影を正確に視認した瞬間、?????

どすん! と激しい衝撃に襲われた。

危つく膝をつきかけたが、どうにか受け止められたらしい。ふう、と安堵の息を漏らす。

「……………ヴィ、ヴィルヘルム様?!」

「間一髪、ですね。アルマリア?」

衝撃にか何にか、数秒固まっていた妻は、はっとヴィルヘルムを見上げたかと思うと仰天したように彼の名を呼んだ。

ヴィルヘルムはにっこりと微笑んだ。

その様子を遠目に見ていたエンナは驚愕に顎が外れかけていた。

「……………え、はあ?! でで、殿下が生身の人間をたす、助けるなんて! ちょ、ちよつとねえ見たリカルド?! 俊速、俊速だったわよ今の!」

「……………エンナ、俺はそんな白昼夢は目視していない。ということ戯れ言はおいといて妃殿下のもとへいくぞ!」

「何さりげなく現実逃避してるのよ! 気持ちは分かるけど!」

「……………分かるんですか……………」

ぼそりと呟かれたクオルデイスの言は無視だ。

あり得ない。あり得なさ過ぎる。何だあの紳士的な笑顔は恐ろしい。ぶるり、と背筋を駆け上ってきた悪寒は恐らく人という弱い種族が本来備えているべき危機察知能力の賜物であろう。

(何。何何何。何事?! どういう天変地異なの?! そりゃ、気付けば助けくらいは寄越すでしょうけど、それならリカルドを全力疾走させるでしょうあの変態なら! なのに、あの、小さい頃から死体の元に向かう時しか走りやしなかった殿下が、駆けた?! いやーッ、信じられないまさかあの魔物復活したりしないでしょうね?!)

音もなく走るリカルドの後を同じように、??いや、宮廷女官としてさもありき所作で滑るように現主、元主のもとへ急ぐ。霧雨は

相変わらず不快だが気にはすまい。今は何よりかの姫君の無事を確かめることが先決であろう。

零れる嘆息は王子に向けて。昔から死体以外に執着を見せなかつた彼はおざなりに優しく微笑むことはあっても、それで令嬢方の心を掴もうとすることもなく、むしろ怖がらせて、だのに平然と手を振るような男だったのだ。無論それもある種の優しさ、乃至は防衛手段だったか、否定しきることは出来まいが。

ヴィルヘルムは微笑む。信頼と厚意を誂えて。裡に秘める諸々の思いを隠して。

(ただの死体好き、でも充分変態なだけ！)

食えない男は、だから嫌なのだ。面倒だし。

エンナは食えないもう一人の新顔を盗み見る。

先程あんなに具合が悪そうにしていたとは思えない表情で、クオルデイスはただ一心に、アルマリアを目指していた。

「え、あ、あの……お逃げください、と」
「逃げましたよ、戻ってもきましたよ」

狼狽えながら問うと、ヴィルヘルムはにこにここと微笑んだまま言った。

……それは、逃げたとは言わないのではないかしら。
思ったが、何かヴィルヘルムの笑みが妙にそら恐ろしく感じたので違う言葉を探す。

探してから、はっと今の己の状況に青ざめた。

「あ、の……申し訳有りません。こんな……受け止めて、いただき

て」

横抱きにされ、しっかりと彼の腕の中にいる自分は、もしかなくとも多大に迷惑をかけている。そもそも重いだろうに。一国の王子に自分はなんということをしているのだと、羞恥以前の問題でアルマリアは心臓が止まりそうになった。申し訳有りません、と再び謝罪する。下りようと身体を動かすが、思いのほか強い腕に止められる。訝しみ、恐る恐る見上げると、柔らかな陽光のような色をした髪が額に触れ、アルマリアの黒髪と混じる。その様を目にした瞬間、かつ、とどうしようもない恥ずかしさがこみ上げてきた。己の闇色の髪が、ヴィルヘルムの美しい色を、汚してしまったような気がして。

「ヴィル、」

「先ずはご無事で何よりです、??姫」

姫。

耳朶に落とされた呼び名に、強烈な違和感を覚える。

おかしい。つい数日前まではそう呼ばれていた筈だ。アルマリアと呼ばれるようになったのも、そのほんの数日前のこと。何もおかしなことはない。現に自分はいい殿下と呼びかけたくなる。だといふのに何故こんなに奇妙に感じるのか。

それに。

それに、とアルマリアは胸元に手をやる。

今、彼の声が妙にひやりと感じた。のは何故だろう。

「姫」

再び、そう呼ばれる。アルマリアはさっと面を伏せた。伏せてからはっとした。ど、どうして。

(どうして目を逸らしてしまったの私！)

弁解しようと口を開きかけ、

「私は貴女の生を、言葉を、信じました」

ぞつと背筋が凍るような声音にびくりと身を硬くした。

「貴女の仰る言葉を信じました。貴女を、信じました。ですが、姫」

秀麗な顔が近づく。額が擦れ合う。頬が、息が、触れ合うほど、近くに。

ヴィルヘルムの笑みがある。

「けれど姫。貴女は私達を信じていらっしやらないのですか」

鼻先にヴィルヘルムの唇が掠める。玲瓏と響く声が、熱くて。けれど怖い。??ああ。

ああ、これは。

と、アルマリアはここに至って漸く気付いた。至近距離で、押し寄せてくる熱に目を瞑りそうになりながら。

ああ。

ヴィルヘルム様は、怒っていらっしやるのだわ。

けれどその理由が分からない。心当たりがないのではなく、有りすぎるから分からないのだ。

ついてきてしまったことか。

危険な目にあわせてしまったことか。

魔物などという存在をおびき寄せてしまったことか。

嫌われて、しまったのだろうか。

怖い、と思った。ヴィルヘルム様に嫌われるのが恐ろしい、と。けれど同時に、胸の奥が、腹の底が、水底に沈むように冷えるのが分かった。慣れのようなものだった。今日までずっと抱いてきた緊張が弛み、失せるようだった。

もう、嫌われてしまったのなら。もう、こんなに気負うことはなくていい、と。昔からふと顔を出す甘えが芽吹く。好かれない、と思っても、とうに嫌われていれば好かれる努力も放棄する、昔からの癖が。

「どうして何も仰ってくださらなかった」

強い口調で、ヴィルヘルムは額を押し付けてくる。ぐりぐりと。頭突かかれているようだ。

何も？　????何を？

アルマリアが、魔物を引き寄せやすい体質だということ？

分からなくて、ただ唇を震わすと、ため息が伝わってきた。重く、けれどくすぐるようなそれに、痙攣する。

「分かっていらっしやらないのですね」

「……何、を」

ふと、自分と呼ぶ声が、耳に届いた気がした。どこか必死な????これは、エンナ?

無事だった、とほっとしたのもつかの間、不意に圧迫感に襲われる。

きつく、ヴィルヘルムに抱え上げられたまま、きつく抱きしめられたらしかった。

より息が近くなる。熱い。ヴィルヘルムの呼気が、熱い。

「あれらを倒す手段があったのならそうと仰ってください。きちんと、具体的に。逃げろ、ではなく、どこそこで待っていて、とせめてそう仰ってください。貴女が、」

貴女が？

アルマリアは何も言えなくて、ただ、ヴィルヘルムの声を、必死で求める。聞き逃すことのないように。

気付けばきつく、彼の服を握りしめていた。

「貴女がひとり、あれに吞まれた時、私がどんな気持ちだったか分かりますか」

え。

その言葉の、意味するところを気付けぬほど、アルマリアは鈍くない。けど上手く噛み合ない。己にその配慮を向けられることの違和感が拭えない。

ああ、きつと、気のせいだと。

だってそれではまるで。

「肝が冷えるかと思ったのです。吞まれた瞬間、本当に貴女が食べられたのかと。驚き、？？どれほど恐ろしかったか。貴女は分からないのですか」

「そ、れは、」

「?????心配申し上げたのです。私は死体を見るのは好きですが、死体になられるのは好きではありません。それから自分の肝を凍らすのも。自分では観察対象にすら出来ませんからね」

至極真面目に彼は怒る。

アルマリアを。
心配、して。

「しん、ぱい」

本当に？

何故。どうして。私なんか、そんな、本当に。心配、だなんて。じわじわと冷えた身体が熱くなる。理解出来ない、信じられない。そう思うと同時に、たとえそれが大したところなくとも、たとえ真実ではなかったとしても、その言葉を向けられたのが、どうしようもなく嬉しかった。

ヴィルヘルムから向けられたのが、嬉しかった。

「そうです。心配を、貴女はかけたのですよ」

鼻先と鼻先、額と額が擦れ合う。ヴィルヘルムが喋ることにその息がかかって。??まるで、存在を確かめるかのように。

「も、うし、わけ……ありません。わた、し??でも」

「でも？」

「そ、んなお言葉を……向けていただくよう、な人間では、ありません、のに」

途切れ途切れになってしまふ声に、決してヴィルヘルムは苛立たなかった。ただ、ふと沈黙する。

「……貴女は、心配されることに、慣れていらっしやらないようですね」

優しい声が、降る。もう怒っていないと示すかのような。

「それではこう言いましょう。これならきつと貴女も私の心配を受けてくださるでしょう。??貴女はエビリスとリュファアーニアの和平の証。未永く両国が共にあるよう、託された未来を繋ぐが為。未だ子も授かっていない貴女が、こつも早くお隠れになってしまつては、どれほど大変か。分からぬ貴女ではないでしょう」

アルマリアは瞬いた。

とても、とても深く納得出来る。どこか不安な先程の言葉より、余程。

だから彼女は破顔した。ヴィルヘルムの顔のすぐ下で、晴れやかに。

「??はい。申し訳ありませんでした。肝に命じておきますので、どうかご容赦ください」

ヴィルヘルムが苦笑する。どこか困つたように。もどかし気に。けれど、アルマリアが微笑んだことに安堵したかのように、目を細めて。

「まったく、貴女は本当に、恐ろしい」

恐ろしい、と言いながら、けれどその声はとても優しい。だからその意味を思つて一瞬びくりとしてしまつてから、けれど彼の皮肉なのだろうとアルマリアはほうと全身の力を抜く。

ふわり、と額に柔らかな口づけが降ってきた。

驚いて目を見開けば、今度は唇に。触れるだけの、穏やかな口づけ。

小鳥がついばむように、甘く、優しく。

「ん……、ふ?????あ、の。ヴィルヘルムさ、」
「????????うちの妃殿下に何をしたらっしやいますかこの変態
がああああ!！」

ずこん、という間抜けな音とともに、ヴィルヘルムの唇が離れた。
ついでに顔も離れる。

驚いて瞬きすると、憤怒の形相のエンナが駆けてくるところだっ
た。続いて、呆れ顔のリカルドに青ざめたクオルデイス。

「……つて、あ、大丈夫ですか、ヴィルヘルム様!」

「……大丈夫です。また木の実か……エンナもいい加減芸がないな
……」

「攻撃手段に文句をつけないでいただきたいですね! はいはいは
いさっさとアルマリア様をお放しくくださいませ!」

ヴィルヘルムはため息を吐くと、ゆっくりアルマリアを下ろした。
アルマリアは赤面した。そうだ、ずっと抱え上げられていたのだ。

……恥ずかしい。忘れていたなんて。

羞恥に縮こまっていると、心配顔のエンナが頬に触れてきた。

「大丈夫ですか、アルマリア様。何か、お怪我など……」

「大丈夫です。……心配、かけてしまつて。ごめんなさい」

エンナの綺麗な目が見開かれる。間違えたか、と青くなると、彼
女は嬉しそうに笑った。

「いいえ。殿下に比べれば、まったく問題ありません。ですがアル
マリア様。ごめんなさい、よりありがたいの方が、私は嬉しゅうご
ざいますよ」

言外に、心配したけど気にしていない、と言われ、アルマリアは再び胸の裡が温かくなるのを感じた。こんな風に。思ってくれる相手は、たぶん、アルマリアにはひとりしかいなかった。ヴィルヘルムの“アルマリアが納得出来る”言葉のおかげでもうあまり違和感はない。だけど未だ、ほんの少し、こそばゆい。

「……ありがとうございます、エンナ」

アルマリアはそつと笑った。どうしてかうまく頬を動かさなくて、ぎこちないものになってしまった気がしたけれど、エンナがそれはそれは嬉しそうにしたので、多分大丈夫だったのだろう。

視界の隅で、何故かヴィルヘルムが変な顔をしているのに気付いて首を傾げる。どうされたのかしら。

「まああのよく分からない生物のことは良いのです。それより殿下に何もされませんでしたか?!」

「……え?」

「あの方は変態中の変態……こほん。失礼致しました。変わり者です。何か無体なことを働かれましたら、遠慮なくこのエンナに仰ってくださいね! 撃退……いえ説き伏せてさしあげますので!」

……何か不穏な発言が入り乱れていたのは気のせいだろうか。

何だかよく分からなかったが、アルマリアは「ええ、大丈夫です」と曖昧に頷くに留めた。

リカルドが困ったように笑ってアルマリアを見る。……労われているようだ。

これまたよく分からずに視線を移ろわずとクオルディスの眼差しにかちあった。ぱちくりと瞬く。

彼の白い医術服は泥まみれになっていた。灰色の髪が額に貼り付

いている。

「アルマリア、様……」

震えるような声だった。

どこか、泣きそうで。ようやく探し人を見つけたような、眼。

「クオルデイス様……？」

「ご無事、で」

よかった、と押し殺すように彼は言う。

アルマリアは手を伸ばした。そうしなければいけない気がして。

?? 何か、とんでもなく、酷いことをしてしまったような、気がして。

そっとクオルデイスに向かって足を踏み出す。

一歩。

そうして、その瞬間霧のように吹いていた雨が、止んだ。

『油断大敵、不意を突く。暖炉の傍で毛布に包まるまで、気を抜いてはいけないよ。そう言ったことを、貴女はもう忘れていいのかね』

呆れたようなその口調は、懐かしいたったひとりの声だった。

街中の聖女 14

雨が、降る。

かの美しき血が隠した全てを暴く、雨が。

*

アルマリアは己の目を疑った。
大きくその眼を見開き、呆然とその男を見る。

「……クロ？ 何故ここに、」
「??????誰です」

思わず零した彼女の前に、素早くクオルデイスが後ろ向きに立ち
はだかった。常には考えられぬほどの俊速にヴィルヘルムとエンナ
がそっくり同じ表情で微かに眉根を寄せ、リカルドが鼻を鳴らす。
各々の性格が如実に現れた反応である。が、アルマリアはそんな周

困の反応なぞさっぱり気にしていなかった。ただ、腰を屈め、平手を構え、まるで傭兵のような体勢でアルマリアを守るかの如く目前の影を見据えるクオルデイスに戸惑っていた。

(……クオルデイス様は、医術省の方でしたような)

何故こんなに戦闘慣れしていそうなのだろう。

それに、どうして。

「お下がり血に繋がれた獣。よくよく目を開きなさい。果たして私が相対すべき相手かね？」

嫣然と、一笑。

黒薔薇のような微笑を浮かべた彼は、黒と白の縦縞の中衣の上に灰色のウェストコートを着込み、銀のネクタイを風に流して羽織った漆黒のフロックコートのボタンを一つも止めずに影に溶けている。耳に久しい声に知らず息を呑んでから、ふと彼の頭部を見てアルマリアは嘆息した。

「クロ、また帽子が破れています」

「うん？ ああ最近是指摘してくれる相手がおらんからね。まあこれも世の流れ、というものだろうよ」

そんなわけがない。

ピカピカに磨かれたステッキと対照的に、古ぼけ、明らかに手入れしていないと分かる穴空きの山高帽。

相変わらず大事なところが適当な彼にほっとして、アルマリアは呆れながらも嬉し気に微笑んだ。そうすると、彼も同様に懐かしいあの人を食ったような老獪な笑顔になる。アルマリアがずっと好きな顔だ。幼く、いつも失敗ばかりだった彼女を撫でてくれる時の表情。

アルマリアはそっとクオルデイスの肩に手の平を置いた。ピクリ

とその肩が動く。

「……アルマリア様？」

「あの、大丈夫です。私のエビリスにいる知り合いですから、??
魔物、でもありません」

何故クオルデイスがこんな行動を取ったのか。

未だはつきりとは分からない。だが、彼を警戒してのことだとい
うことは歴然であったから、アルマリアは宿めるように、クオルデ
イスを後ろから覗き込んだ。数秒の空白をあけて、するりとその姿
勢が戻る。視線を合わせるようにして目を追わずと、今度は見上げ
る形になってしまった。ヴィルヘルムと同じくらいの背だが、思慮
深気な藍の眼が沈んで見えることと、色素の薄い灰色の髪が相まっ
て、どうにも吹けば飛びそうな儂さを覚える。そこいらの花のよう
な令嬢方など足下にも及ばない繊細な秀麗さだ。陽の色の髪で柔ら
かな日差しと共にあるような?? 実際は死体と共にあるわけだが?
? ヴィルヘルムとは大分違う。そんなことを考えていれば、当のヴ
ィルヘルムが彼に歩み寄った。ゆっくりとその口が開く。

「挨拶もせず、不躰に失礼致します。このような森の中で、あなた
は一体何をなさっておいでですか？」

につこりと微笑んだ社交用の顔が眩しい。が、普通、挨拶もせず
などという口上はうっかり喋ってから言うものだ。言わない為に口
にする文句ではない筈なのだが。

クオルデイスほどではないが、さすがにそれなりの警戒はしてい
るらしい。そりゃあ、こんな怪し気な身なりの男がいきなり現れた
ら不審だわ、とアルマリアは思った。

くい、と袖を引かれて振り返るとエンナもヴィルヘルムと似たよ
うな表情で微笑んでいた。後ろに下がるよう言っているのだろう。

素直に無言の指示に従う。リカルドはヴィルヘルムの左方にさりげなく移動していた。……ここで主君の前に出て変わりに質疑しないのがリカルドである。

「ふむ、リュフアーニアの第一王子。死体愛好家ヴィルヘルム殿下。奇矯な方向に突っ走りまくっているというのは本当のようだね。ふむ、ふむ、面白い。中々に変わり者の嫁となったものだねアルマリア」

何故か頻りと感心した風情の彼にげんなりする。祝福してくれるならもつと分かりやすく言っただけ。少なくともここはリュフアーニアで、ヴィルヘルムはその第一王子だ。と、自分でも言っている癖に全く頓着しない不敬っぷり。その上現在妃殿下の位についているアルマリアをさらりと呼び捨てにしている。隣でぶわりと何かそら寒い気配がして、アルマリアはエンナを見れなかった。怖い。

「クロ、ヴィルヘルム様の質問、聞いてました？」

「聞いていたとも。だから今から答えようとしているのではないかね」

薄氷の眼を細めて心底不思議そうに首を傾げられる。頭が痛くなってきた。

(……ああ、そうでした)

彼はふたりで居る時は兎も角、ふたり以上でいると、激しく会話の噛み合わない酷く面倒な相手だった。

まったくどうして忘れていたのか。いや、そもそもあまり彼とアルマリアがそれ以上の人間その他諸々と話す機会はなかったような気がする。だからすっかり失念していたのだろう。

「さて。お初にお目にかかる、ヴィルヘルム殿下。アルマリアの背

の君。私はクロプツエン「ルーサー、エビリスの魔鏡の主。王妃の守人。鏡より出ざる者。すなわち人ならぬ夢現の間をたゆたうもの」

クロプツエンは優雅に一礼した。流れるような所作。その身に染み付いた次第を窺わせるような完璧さ。アルマリアは幾度も彼に礼の仕方だけは嗜められていたことを思い出した。

「という訳で、然様に綺麗な言葉遣いをしなくても問題あるまい。楽に喋っていただきたいが、どうかね」

「ならばそのように」

「うん。では次に何をしていたか、という質問だが、それはあまり正しくなろうよ。何しろ私はたった今ここにきたばかりなのだから」

「今？」

ヴィルヘルムが怪訝気な声を出す。そんな馬鹿なと言いた気なりカルドが口を挟んだ。

「そんなあつさり入れるような森では、??いえ、入れたとしてもここまでそれなりの距離があると、」

「うん、人の道を、人の足で歩けばその通り。だが私はこの通り、人ではないのでね」

この通り、といっても見た目は充分人間だと果たして彼は分かっているのか。

ため息をつきそうになって、ふと鼻につく臭気と、奇妙な怖気に身を震わせる。

なに。

この、悪寒は。

まるで、人の血のような匂い、と。

気持ち悪いくらいの甘い香り。

(また、魔物でもいるの？ でもこのリュファアーニアでそんな、日に何度も現れたりなんて、)

する訳ない、と思いい切れな。何故なら今ここには自分がいる。

魔物を惹き付けてしまう、自分が。

青ざめて、きゅつと片方の肘をもう片方の手で握りしめる。だが、

「どう致しましたか？」とエンナが心配気に聞いてきたので、慌てて力を緩めて何でもないとかぶりを振った。

大丈夫。

きつと。何でも、ない。

「ではどうやって、」

「こうして」

リカルドの疑問にクロプツェンは腕を広げて応えた。

彼の背後、その腕を広げた空間に、揺れるような影が広がる。微かに反射し、波を見せるそれはまるで???

「……鏡？」

傍らのエンナが呟く。アルマリアは久しぶりに見たそれに、ほうと息を漏らした。

懐かしい。

アルマリアが魔物に食べられそうになって、這々の体で逃走しているところからともなくやってきたクロプツェンがこの“鏡”で連れ帰ってくれたのだ。

「そのようなものだよ。?? 現の夢鏡。映ることの出来るものから、いつでも移動出来る。好きなところへ、好きなように、鏡に憑くもののみが知り得る道を開いて」

クロプツェンが再び腕を振る。すると、ひゅん、と崩れるように“鏡”は消えた。

「本題だがね。何故ここにいるのかという問いとしてよいならば、アルマリア。貴女が無謀に無茶をしているようだったから様子を見に来たのだよ」

「……………私?!」

アルマリアは密かに仰天した。まさかここでこちらに話があると
は。

ヴィルヘルムも意外そうに片眉を跳ね上げた。

「……………離れていても分かるのか?」

「それがエビリスの魔鏡というものなのだよ。ヴィルヘルム殿下は兎も角、貴女は知っていただろう。何故にそれほど驚くかね」

「え、??でも、あの、私はもう、リユファーニアの」

「アルマリア。血の呪縛がそれほど容易く解かれる訳などなからうよ」

ぎくりとした。

静かで老成した声は、いつも、決して、易しくはない。

流してはならぬことを突きつける。

「さあ私への疑問は解消されたかね。ならば君達は先ず、思い出しなさい。何故、この森にやってきた?」

「え、」

何故、この森に?

じやり、と湿って粘り気を帯びた草と土を踏みしめる。上品な色

味の靴がさらに泥に塗れた。

何故、と頭を働かせる。

それは。

この森に。

変死体の手がかりを?????

「……………手が、かり？」

呆然と落とせばクロプツェンは教え子を誉めるような、それでいてどこか面倒そうな笑みを浮かべた。

「うん、よく思い出した。そうとも、貴女達は変死体の事件の手がかりを少しでも得る為に、きなくさいこの森までやってきたのである。ならば今直ぐ街へ向かいなさい。そうして探しなさい、アルマリア。貴女が肌で感じた匂いのもとを」

匂い、という言葉にはつとずる。

それは、この腐り落ちた果実のような甘い匂いのことだろうか。

けれどそれはどういうことだ。この匂いのもとを探す？ 確かに

この異臭は凄まじいが、時たま匂わなくなるし、犬ではないのだから探し出すことなど出来ようものか。

そんな思いが顔に出ていたのか、クロプツェンは可笑しそうに苦笑した。

「いいや、分かるとも。何故ならそれが貴女の生きる為の術であるのだから」

アルマリアは眼を見開いた。

私の、生きる為の術。それは、つまり。

「魔物のせい、ということですか……?!」

けれどあの少女の遺体は残っていた。否、彼女だけではない。他に数多くいるのであろう死者の身体も、無惨ながらも残っているのだ。

魔物は人の全てを食べる。

だから、そんな、筈がないと。

「思い込みは視野を狭める、と昔言ったことはなかったかね。だが、まあ、今回は例外でもある。これは恐らく??人と魔物の仕業であるろうよ」

リカルドとヴィルヘルムの顔色が変わった。だが彼らより顕著であったのは、クオルデイスだ。

一切の表情が掻き消え、眼差しが暗い闇を帯びる。エンナの表情が険しくなった。怒気に怯えるかの如く。

ああ、そうだ。

アルマリアが見たのは、彼の妹なのだ。

そう思った瞬間、酷く息苦しくなった。生々しく、かの少女の死がアルマリアの脳を痛打する。

クオルデイスは今にも駆け出しそうだった。けれど。

「?????落ち着きなさい追尾獣。半身を亡くし気が立つのを否める気はないが、早計はいけない。取り返しのない間違いは自ら起こすものではないよ」

クロプツェンの一言に、藍の眼が見開かれる。

「何故、知って……いえ、そもそも、どうしてリュファアーニアの事件のことを、その内実を知っていらっしやる？」

「それは私が魔鏡の主だからだよ。それ以外の何もありはしまい。事件のことを知ったのは先程、この森に入っただことだ。これも私が私だからとしか言いようがない。詩的に言うなら鏡だからとでも言うべきかね」

詩的も何もない適当さで手を振り、クオルデイスの脇を通り抜けてクロプツェンは酷く緩慢な動作でアルマリアに近づいた。見上げるとふわりと頭を撫でられ、さらには頬の輪郭を赤子にするかのような手つきでなぞられる。瞬いて、困惑顔になればかつてのたったひとりの友はにこりと微笑んだ。

「助けをあげよう、アルマリア。眼を閉じなさい」

「え、??はい」

戸惑いながらも言われた通りに瞼を下ろす。ふつと何か柔らかいものが眼の上に触れた。こそばゆいその感触に、口づけられたのだと気付いて赤面する。……もう子供ではないのに。

居心地が悪くなった時、ずきりと頭の芯が痛んだ。

思わず耳の横に手をやる。その次の瞬間、酷い耳鳴りに苛まれた。(こ、これのどこが助けですか……っ)

ずきずきする頭を押さえて恨めし気に見上げる。が、クロプツェンはにこにここと笑ったままだ。

「さあお行き。もう分かるだろう、道行きも、目的も」

分からないですってば、と言おうとして、不意に心臓が一際大きく軋みをあげた。悲鳴と、怨嗟。憎悪に哀切。把握し切れない感情と叫びが脳裏に響く。

飛び散る鮮血を訴える声。
死に逝く魂を喰らう色。
狂気に食まれた感情。

絶叫。

「……っ、クロ！ 何ですか、これは！」
「それが元凶なのだろう、と言っているのだよ。……うん？ そうだね、兎に角森を出て、街の北、マルディーン通りの人の少ない道を行きなさい。間に合うように、?? 疾く」

言い捨てて。

睨む彼女の視線の先から、クロプツェン＝ルーサーはその身を消した。

がながんする頭を振り、無理矢理前を向く。エンナが先程の会話から察したのか、背中を支えてくれた。

「アルマリア、」
「いき、ましよう」

心配気に眉を寄せたヴィルヘルムの言を笑顔で遮る。……大丈夫。これくらい、なんともないわ。それよりも、早く。

「クロの言ったことは、多分、正しいでしょう。クロは無駄なことや面倒なことを嫌いますから、不毛なことは言いません」
「信じない訳ではありません。ですが、アルマリア、貴女は……」
「私は大丈夫です。どこも」

そう、どこも。
腹を裂かれ命も魂も奪われ若くして亡くなったあの少女達に比べれば、頭痛くらい、耳鳴りくらい何だと言っのだろう。

アルマリアは微笑った。
夜に咲く花のような笑みで。

エンナの背を支える力が強まる。リカルドが放心から帰ってきたクオルデイスの腕を掴んで引っ張ってくる。ヴィルヘルムはアルマリアの笑顔をとっくりと眺め、

「……仕方ありませんね」
諦めたように微笑んだ。

ほっと知らず抱いてきた緊張を緩める。ヴィルヘルムはそんなアルマリアの頬を、先程のクロプツェンのようになぞり、黒い前髪をごくごく穏やかな手つきでかき上げた。白い額が外気に晒される。ふるりと身震いしてアルマリアは一瞬目を瞑った。

と。

「?????え、」

びき、と固まる。

アルマリアは真っ赤になった。

つい先程まで風に震えるほどだった額が、熱い。

ヴィルヘルムは至極満足気にここにこしていた。

「あ、の。ヴィルヘルム、様？」

「私は貴女の夫ですから」

いえそういうことではなくて。

強く口付けられた額にひたすら赤くなりながら、けれど何か反論すべき言葉が見つからず、力なく俯いた。エンナもすぐ傍にいたのに、まったく頓着せずこんなことをするヴィルヘルムは、もし死体好きですらなかったらものすごく大変な相手だったのではなからうか。そううつかり気付いてしまい、アルマリアは何だか複雑な気分になった。

「さて、それでは私がアルマリアと共に行くから、リカルド。おまえはエンナとクオルデイス殿を頼む」

「???は」

やや呆れた面持ちでリカルドが敬礼し、ぐいっとクオルデイスを引っ張る。

「私もクオルデイス様も、護衛はいらないかと存じますが……ああ

アルマリア様、すっかり殿下の毒牙に」

ぼそりと嘆いて、しかしエンナは素直にクオルデイスの背後へついた。まあまあと宥めるようにリカルドが苦笑いする。もう大分落ち着いたらしいクオルデイスも困ったような表情でリカルドに腕を離してもらっていた。

「では森を出ましようか、アルマリア」

まるで散歩に誘うような気軽さで、ヴィルヘルムはアルマリアの手を握った。

ぼかんとしてから、アルマリアは頭の痛みも忘れて晴れやかに大きく頷いた。

*

恨めしい。

この汚濁に塗れた清さの全てが。

街中の聖女 14 (後書き)

クロの本名はクロプツェンです。クロはアルマリアがつけた愛称です。犬っぽいです。

失礼しました。

食べて、食べて、食べ尽くして。

そうして漸くこころを持ってしまった魔物は気付いたのです。

彼は娘に?????

*

マルディーン通りは、ひやりとするほど人寂しかった。

??いや、人っ子ひとり、いやしない。

ヴィルヘルムに手を引かれ、頭痛を堪えながら辺りを見回す。痛みと比例して、異臭がはつきりと嗅ぎ取れるようになってきた。不本意だが、クロプツェンに感謝すべきなのだろう。

すっかり陽も暮れ、灰色と朱に染まりつつある石畳を踏みしめて、転げるように走る。かん、と踵が地面を鳴らし、爪先がじんわりと痺れた。痛い。頭痛よりずっと分かりやすい疼痛に、己の体力の無さを思い知らされるようである。情けない。

アルマリアは乱れた息を無視して、ヴィルヘルムの背中に呼びかけた。その背中が振り返ることはなく、ただ常と同じ柔らかな声に続きを促される。彼女は一度喉を湿して遠慮せずに口を開いた。

「ヴィルヘルム様、クロの???魔鏡の主の言葉をどう思われますか」
「それは変死体のことですか? それともクオルデイスについて?」
「!」

示された選択肢にくつと息を呑む。

クオルデイス「アフォルグ「グルーツ。クロプツェンは、彼のこ
とを追尾獣と称した。血に縛られた獣、とも。

それは一体どのような意味であるのか。

アルマリアには分からなかった。もちろん気にならない訳もない
けれど。

「変死体の、話です」

それはきつと、後でも良いことなのだ。

強く、噛み締めるように云うと、ヴィルヘルムはふっと蕩けるよ
うに微笑った。こんな時なのに、まるで死体を愛でる時のような甘
やかな眼差しに魅せられる。心臓が止まりそうになった。

「そうですね、俄には信じられません」

頭痛をこらえて続きを待つ。雨上がりのせいか、妙にべつとりと
した空気が暑苦しい。周囲の建造物が火にあぶられるように赤い。
影が濃かった。アルマリア達のものも、そびえ立つ家々のものも。

「と、いうよりも、そもそも魔物が存在していたことの方が吃驚し
ましたが。人でなければせいぜい、獣か牙持つ生物か。その程度の
予想しかしていなかったの、……まさかお伽噺に出てくるような
魔物とは。予想外でした」

予想外でした、ですましてしまつところがさすがヴィルヘルムである。

苦笑しかけて、ふと微かな違和感に首を捻る。

?????お伽噺に出てくるような？

そういえば、この国の人々は魔物の存在などまるで知らぬ気だ。そんなもの、悪戯好きな子供を戒める言葉の中にしか存在しない、とでも言うかのように。

信じていない。

空を飛べる人がいたら面白いわね、と笑い合うように。

そんな悪い子は魔物に食べられてしましますよ、と母親が子を叱るように。

幼い頃は信じていても多少育てば「あつたらいいのに」程度の認識になつてしまふ。そんな。

こちら側からしてみれば心底居心地の悪い浮遊感にあてられる、常識。

(それでは、???本当に。この国、には)

森には魔物が棲んでいる。

アルマリアはその文句に、古いお伽噺のようだと言った。

それは、少々の皮肉と、この清らかな王国でもそのような言い習わしがあるのか、という意を込めてだ。きっと守られ穢れを嫌うこの国には魔物なんて閉め出されているだろう、と。だからきつとりユファアーニアの人間は魔物が存在することを知らぬ者も多いだろうと。

だけど。

だけどおかしい。

聖応国だからといって???否、だからこそ。その守りを敷く聖王

家の直系、それも王位継承者が、全く知らないなんて。

予想外だなんて。

(……だって)

たとえエビリスを除いても、リユファアーニアの周囲の国には、当然のように魔物は居るのに。

古いお伽噺というそれに、揶揄する気持ちが入ったのは、エビリスでは森だけなどではなく至るところに魔物は現れるし、魔物は棲んでいる、ではなく潜んでいると形容する方が正しいからだ。棲んでいる。まるで妖精に対するような言い方。

「魔物のせい、というのもまた信じ難いことですが、クロプツェン殿は人と魔物の仕業だとおっしゃいましたね。それが、どうにも？ 嫌な心地です」

「……嫌な心地、ですか？」

「ええ。どちらか一方ならばまだ理解、というか納得の仕業があるものの、どちらも、というのは。それも人と魔物。どのような場面においても、大抵敵対するもの同士でしょう。おかしなことです。まあ、変死自体、奇妙ではありましたが」

ふむ、と眉根を寄せるヴィルヘルムは、常になく真面目な表情をしている。アルマリアはふと、クオルデイスを思った。人と魔物の仕業、と告げられた時のクオルデイスを。

「……ヴィルヘルム様もクオルデイス様も、魔物の仕業とお聞きになられた時より、人と魔物と断じられた時の方が、張りつめておられましたのは、何故ですか」

つい問うてしまうと、彼は不意を突かれたように眼を丸くしてから、答え辛そうに言った。

「……魔物ならば、無茶であろうと狩るのみです。獣と想定した時と同様、理性も感情も求めません。もともと違う種族ですから。けれどももし人だったなら、それは法で裁かれるべきことである以上に被害者と近い者達が憎しみも恨みも余儀なく抱いてしまうことになる。獣ならば、悲嘆。人ならば？同族ならば、憎悪。当然の心理でしょうね。もちろん獣であろうと魔物であろうと憎みも恨みもして良いでしょうが、感情も言葉も通じる相手ならば余計、思いは強くなりやすい。特に怒りは」

アルマリアはヴィルヘルムの、幾分遠回しな言葉にはっとした。つまり。

人殺し、なのだ。野生の中ではない、人の中の無意味な殺意。

「何故あの子を殺した、と問いたくなるのが被害者側の心情でしょう。相手が人ならば。恐らくクオルデイス殿もそうなのでしょう。だから、あのように怒ったのではないでしょうか。加害者と以前私は言いましたが、当初あの森に行こうと決めたのは、そういう動物が街に降りてきているのではないかとそちらの方を疑っていたからです。あるいは加害者が隠れているかもしれない、とも、思っていました。おりましたが。血の跡があの子に向かっていたようなので。どちらかと言えば獣の方が救われるのかもしれませんが……たとえば道半ばで死した人間に祈ることを知らないリユファニアでも、親が子を、恋人が恋人を、友が友を、兄が妹を想う気持ちくらいは、あるのでしょうか」

静かな声が告げる内容は、死体愛好家と揶揄される者の言葉とは思えぬほど、人思いだ。カツ、と左右に別れた道を、踵を鳴らして曲がる。そうすると急に匂いが増した。身体中を蝕むような腐臭。??そうだ、これは、腐臭だ。甘く、果実が腐り落ちたような、ぞつと背筋を走る悪寒が、止まらない。これ以上進みたくない、

という思いを振り切って、ヴィルヘルムに繋がれた手をきつく握りしめる。

アルマリアは青ざめながら、ですが、と零すように呟いた。

「ですが、ヴィルヘルム様」

獣であった方が報われる。

ああ、そうかもしれない。

けれど、本当にそうだろうか。誰にとってもそうだと、言えるのだろうか。

だって、今、頭に叩き込まれてくる叫びは。脳裏に響く怨嗟は。

「獣であろうと魔物であろうと、はたまた人の手であろうと。それは、決してどれなら救われる、ということには、なってくれないのではありませんか」

まるで歯が立たない相手に対する絶望のように、聞こえるのだ。

吐き気に霞む視界に、はっとしたような色を含んだ、ヴィルヘルムの瞳が映り込む。それはすぐに、申し訳なさそうに細まる。きゅ、と宥めるように優しく、握る手の力が強くなった。その温度が心地よくて、アルマリアはほっとした。思わず頬が緩む。

その、時。

「ええ、その通りね」

脳裏で何かが、それこそ絶叫するように弾けた。
頭上から刺すように降ってきた声に顔を上げる。

陽が落ちていた。

いや、落ちつつある、と言った方が正確だろうか。燃えるような陽が、高い家々の屋根を照らしている。影がたなびき、固定され、細く伸びる。赤い空。だというのに、見上げた先ではおぞましい色の闇が、彼女を取り巻いている。けれどそれよりも遙かに、一際強く、太陽が彼女を染め上げる。

燃える橙に、闇。

逆光になっているのに、はっきりと輪郭が眼に見える。

翻る長布。

噎せ返るような薔薇の匂いと、木の実の匂い。

灰色のストールが風に舞い上がる。

眼に痛いほどの、白い???長髪。

そして、その、朱唇。

「ごきげんよう、白雪姫。随分とお幸せそうね」

上弦の月が笑う。

金の瞳。

美しい女が、落ちゆく太陽を背に、赤い家の頂上で立っていた。

*

アルマリアは茫然と彼女を見つめた。瞬きすら出来ない。

??誰?

あれは、誰。

どくどくと心臓が早鐘を打つ。けれど頭痛は止まった。そうと示すように止まった。

(助け、とは。こういう意味、ですか……!)

もうエビリスに戻ったのである。友に向けて、唸るようにそう思ってから、奥歯を噛み締める。

女の背を、身体を取り巻く闇。まるで、魔物の障気のような。

不意に、彼女は高く笑った。

地べたまで侵食するような甲高い笑い声。ヴィルヘルムが一步足を引き、片手を伸ばしてアルマリアの前に割り入る。女はうっそりとアルマリア達を見下ろした。また唐突に、飽きたように笑い声が止む。

「悪女ね、白雪姫」

艶やかな唇が弧を描く。舐めるような声音が、耳へと響く。白く細長い指がその唇をなぞる。ぞっとするほど、妖艶に。

薔薇の匂い。

噎せ返るような、濃い、野生の薔薇の匂いがする。
胸焼けがしそうなほど、甘ったるい。

……どこかで、嗅いだことがあるような、甘ったるさ。

(???これ、は)

「ねえ、お答えなさいな。それともまだなのかしら。まだ、分かっていないの?」

「……いい、」

「いいえ。分かっておりますよ、異国の方」

絞り出すようにいらえかけたアルマリアを遮るように、酷く穏やかな声でヴィルヘルムが言う。見れば、その表情も驚くほど柔らかだ。まさに聖王家の一員に相応しい、慈愛に満ちた笑み。神の血を声を心を戴く者。

女は不快そうに眉をひそめた。一瞬で表情が切り替わる。

「……どうして異国だと分かったのかしら。リュファアーニアの死体愛好家」

「貴女が公用語をお使いになっているからですよ」

当然のように答えるヴィルヘルムが気に入らなかったらしい、彼

女はふん、と鼻を鳴らした。

「当てずっぽう？ それともリユファアーニアの人間は公用語を使えないのかしら」

「いいえ。けれど少なくとも、彼らは私達？？聖王家に対しては、リユレス語を使うでしょうから」

「そこには白雪姫もいるけど？」

「なおさら。姫が公用語で喋るよう頼むまで、彼らはリユレス語を使います。慣れていただくために。？？リユファアーニアでの典礼では、リユレス語を使用しますので」

そういえば、と思い出す。婚礼を終えた次の日には、もうリユレス語の聖書を渡されていた。慣れずに上手く祈りの言葉を紡げなくても、皆微笑んで許してくれるのが、申し訳なかったのを覚えている。

「はッ、典礼。典礼、ね。くだらない慣習だわ」

絹糸のような白髪をなびかせて、彼女は蔑む如く吐き捨てた。ぞわり、と黒い靄のような闇が膨れ、彼女の身をさらに覆う。

鬱陶しそうに長布？？あれは、もしかべールだろうか？？を剥ぎ、女は赤く染まる空へと投げた。そのまま落ちていくかと思いきや、？？黒い手が、それを掴んだ。

にこり、とそら寒い笑みで、彼女がアルマリアを見る。もうヴェルヘルムなど、どうでも良いと言うように。

？？ああ、そうだ。そういえば、彼女は白雪姫、と呼びかけていたのだ。先程から、ずっと。

とん、と黒い足が、黒い体躯を回転させて、女がいる場所まで舞い降りる。

黒い男だった。

長い、獣のたてがみのような黒い髪。襪襦布をひつかぶったような池の泥を閉じ込めたような色の装束。黒い足。毛立った黒い両腕。裸足だった。けれど黒かった。

時々見る、肌の黒い国の人とは違う、純粹な黒だ。

そしてその指には、ぬめりと生光りする、鋼のような爪が備わっていた。

いや、備わっていたというのは不適切だろうか。一本は先が欠け、一本は折れ曲がっている。

どくん、と鼓動が波打つ。

なんだ、あの、禍々しい、ひとは。

「ねえ、獣に殺されるも魔物に殺されるも人に殺されるも、どれがどれだけマシだなんてないと言ったわね？」

うふふ、と少女のように笑う。ああ、この人は、一体どれほど異なる笑みを見せたのか。そのどれもが、どうしてこんなに恐ろしいのか。

金の瞳が不穏に輝く。もう陽は半分ほど落ちてしまった。??

ああ。

月が昇らなかつたらどうしよう、と、そんな、埒もあかないことが脳裏を過る。

「ええ、その通りよお姫様。安穩と、あのエビリスでひとり幸せに生きてきた魔性の娘。魔物に食べられ骨すらなくなるのと、人に殺され通じる筈の言葉も通じぬ憎しみを抱くのと、」

つう、と白い指が男に向かう。
そうして気付く。

彼女の爪は、血のように赤黒く塗られていた。

男は無感動に、その指を受け入れた。

??ぎいい、と鈍い音を立てて。

その赤い爪が、男の頬に食い込む。

「な……」

さすがに驚いたように、ヴィルヘルムが低く漏らした。アルマリ
アも眼を見開いた。

けれど、食い込むばかりで、その頬から血は溢れない。

爪にそれほど力はなかったのか、それとも男が丈夫なのか。
そんなことをされたことがないアルマリアには、分からない。

「獣に無惨に殺されて、肉片と砕けた骨のみが残るのと」

ビツ、と女は見もせず、男の頬から顎へと食い込ませた指を裂
くように引き下げる。

「どれがマシだなんて、分かるわけじゃない。そんなの、やら
れたものがその人にとって最悪ってだけでしょっ？」

くす、と笑んで。

彼女は男の手からベールを掠めとる。いささか鬱陶し気に、何の
意味が合ったのか、また被り直して、

「慧」

秘めやかに、朱唇を揺らす。

アルマリア達の背後を示して。

しゅん、と黒い影が飛ぶように動く。まるでクロプツェンの鏡。

(?????!)

はっ、とアルマリアは息を呑んだ。ヴィルヘルムの手から逃れ、男の進行方向であるう方向に走る。ヴィルヘルムの疑問と制止の声が聞こえたが、気にしていなかった。

だん、と痛むほど強く足を踏みならず。ぞくりと寒気が背筋を駆け上がった瞬間、ぱつと振り向く。

間近に黒い顔があった。

後方から届くエンナ達の足音に詰めていた息を吐き出し、男を睨む。

「……………駄目」

無駄な言葉と知りながら、低く呟いた。肩が揺れる。走ったせいか、酷く息が乱れた。???いいや、走ったせいだけではない。緊張と、恐怖で。

ああ、この男は、なんなのだ。

こんな、まるで。

??まるで。

『……………もつを……………』

「……………え?」

沼底から響くような声だった。ひび割れて、くぐもり、奇怪。

『臍物を、寄越せ』

「アルマリア！」

ヴィルヘルムが驚くほど必死な表情で、こちらに向かってくる。けれど、その前に、男の爪が、彼女の臍物へ向かう。女の笑声が聞こえた。アルマリアは茫然としながら、その言葉を反芻する。??臍、物？

ちらりといつか耳にしたお伽噺が耳朶に蘇り?????

「アルマリア様!!」

絶叫と共に強い力で腰から引き寄せられた。

数秒何が起きたのか分からずただ瞬きを繰り返してから、おそるおそる腰を引いてくれた相手を見やれば、真つ青な顔をしたクオルデイスが、アルマリアごと尻もちをついていた。

「クオルデイス様……?」

「大丈夫ですかアルマリア様！」

「エンナ……、リカルド？」

今にも倒れそうな表情のエンナと、真つ青を通り越して真つ白な顔色のリカルドがふらふらと近寄ってくる。ぐっ、と肩を掴まれて首を傾げると、彼はちいさく何事か呟いた。……おそらく、申し訳有りません、であっていると思う。けれどそれが何を指しているのかは分からなかった。

最後にヴィルヘルムがやってきて、ひったくるように頭を抱えられる。狼狽えて身じろぐがびくともしなかった。

「ヴィル、」

「心配をかけないでくださいと、言った傍から、貴女は」

震える声が、唇が、耳に触れる。あ、とアルマリアはどうすればいいのかわからなくなつて、ヴィルヘルムの腕の中で視線を泳がせ、漸くその言葉に思い至つてから、ごめんなさいと落とした。

「美しい茶番ね」

は、と棘を持った囁きが、脳髓を貫いた。アルマリアは慌てて立ち上がり、彼女を見上げる。

「慧」

また、不可思議な音で、彼女が男を呼び寄せる。すうつと身を引き、再び飛ぶように彼は女のもとまで戻つた。

「……あなたは、」

膝が笑いそうだ。喉を潰すみたいにして、呻く。

「そのひとは、」

その質疑を待っていたとばかりに、女が微笑う。うっそりと。

「いったい、なんなのですか」

ごう、と風が鳴った。殴るように駆け抜け、家々の屋根を揺らす。太陽が落ちる。

夜がくる。

「ねえ、愛しいものを殺されるのは、たとえそれが自然の摂理だったとしても、ただ憎いのよ」

くすくすと、言葉とは裏腹に、軽やかな笑みが、耳障りだった。隣で、エンナが怯えたように後ずさる。

「お伽噺を知らない？」

「おとぎ、ばなし」

「そう。エビリスでは、特に有名よね？」

「そ、れは」

「ごくん、と唾を呑み込む。何故か、聞きたくない、と思った。それは女の口調のせいなのか。」

アルマリアは男を見た。黒い、黒い男を見た。

まるで、魔物のような、匂いの。

「こころをもった、まものはなし」

うたうように女が言う。

先程ちらついた記憶が鮮明になる。

あれは。

「それともこういった方が思い出しやすい？」

????? 食べて、食べて、食べ尽くして。
そうして漸くこころを持ってしまった魔物は気がましました。

彼は娘に?????

「人に恋をした魔物の話」

????? 彼は娘に恋をしていたのです。

遠いお伽噺の音が、生々しく、耳に響いた。
まるで、落雷のようだった。

三日月の朱唇が笑みを零す。
???????寒気がするほど、美しかった。

*

彼は“異物”であった。

魔物にはこころというものが無い。無い、と。少なくとも無いとされている。人の中でも??魔物の内でも。

魔物にとって“こころ”というものは精神の異常であり、感情であり、“魔物以外の生物には必ず存在するもの”だった。つまり魔物には“そういうもの”がないわけで、それ故彼らは“それ”を求める。即ちこころの祖たるたましいを。視認できぬ何ものかを。

それが魔物であり、終生拭えぬ本質である。

?????だが、だが、だが。

彼には“こころ”があつたのだ。

生まれ落ちた時から確とその身に宿していたのである。

それはあまりに異質なことであり、詰まるところ同族に排除されるに十分な理由であつたのだつた。

そも、魔物というのはそれほど同族意識に厚い生き物ではなかったが、かと言って決してともに行動しないわけでもない。生物を差別なく喰らう彼らも、同族ばかりは例外だ。というよりたましいのないものを襲つても仕方がないのだろう。

ただ、それでも微かな情はあるものだ。

けれど彼らと同じ生き物でありながら、別の性質も持つ彼は、魔物の中で孤立していたのである。

己の眼に異に映るものを煙たがるのは、ある意味自然の摂理であろう。至極残酷な、まさに人の性に連なる感情ではあるが。

まあそういうわけで、彼はひとり、仲間と遠く離れた森の中、大きな木のうろを住処にひっそり過ごしていたのだが。

ある日、彼は捉えてしまった。

あどけない人の子の、清濁併せて故美しきたましいを。

???????? いや、それとも囚われたのか？

それこそいくら“こころ”があるうとも、己にはないその何かに焦がれて。

人に恋をした魔物のお話。

エビリスを中心に、各国で細々と知られるお伽噺のひとつだ。否、寓話と言った方が正しかろうか。

特に魔物の出現率が高いエビリスでは、決して、いいや少しでも魔物に囚われることのないようにと、痛切な願いを込めて一度は語られる話だ。街中で吟遊詩人に、救護院で村医者に、家中で母親に。エビリスの民で知らない者は、恐らく居ないだろう。それくらい、有名なお伽噺だった。だが。

「……………どう、いう」

「どういう？ そのままだわ」

くすりと、といっそ無邪気なほど笑う、けれど毒々しい女の背後で、白い月が淡く浮かんでいる。しかしその青ざめた月も彼女の白い髪に隠されて、アルマリアの瞳には映らない。

夜だった。

昂然と輝く星々すら呑まれそうなほどの夜空が、息苦しかった。

何か、何か、酷く嫌な予感がした。嫌な??けれど気付かなければいけないような、何か。

取りこぼしては、いけないもの。

「あれはね、お伽噺なんかじゃあ、なかったのよ」

クオルデイスが一步前に出た。人を殴ったこともないような手が、僅かにアルマリアの前を阻む。まるで番犬のようだ、と想ってから、護ろうとしてくれていたのだと気付いた。瞬間、こんな時だというのに叫びそうになった。血の気が引く。嫌。やめて、と喉からそんな訴えが吐き出そうだった。

こわい。

(……………なさけない)

護られることが、この女より、怖かった。

金の眼が皮肉気に煌めく。星のように。

冷たく。

「これはね、愚かにも人間の女に恋をして、そしてたかが獣に殺されたのよ」

何が楽しいのか、彼女は酷く愉快そうだった。アルマリアは一瞬思考が停止した。網膜の裡で光が爆ぜて、胸の奥深くまで混乱が来る。女のすぐ傍で沈黙したままの、黒い男を思わず見つめた。

恋？

そんな、??まさか。

(だって、あれは、お伽噺で……………)

魔物は、人を喰らう、もので。

魔物が、人に、恋情を抱く、なんて。

「……………どうして？」

ヴィルヘルムがそつと眼だけでこちらを振り向く気配がした。あまり馴染みのない話だからか、エンナやりカルドが困惑しているのを感じる。

だが、クオルデイスは何故か、小さく息を呑んでいた。

その反応が意外で、アルマリアはほんの少し奇妙に思った。まるで

で、魔物と多少近い距離にいる人達のような。
そんな懷疑が過つたのは一瞬。

「どうしてその方を食べなかったのですか」

アルマリアは問うた。全身が冷たく、けれど指先だけが熱かった。
そこに心臓が移ったのかのようだった。

聞かなければ、と。急かされるように、思った。

長く黒い前髪に隠れた、淀んだ瞳がアルマリアを見る。??手を。
手を、握りたい。誰かの??ヴィルヘルム様、の。

女の赤黒い爪が眼に痛かった。あんなにも凝っているのに、艶めいて、月を裂く。

『……食べる……?』

木枯らしのように浮いた声が、聞こえた。

男だ。黒い、??認めるならば、魔物である筈の男の声だ。クオ
ルデイスが一層背を屈ませる。リカルドの殺気がほんの少し、怖か
った。

ごくり、と唾を呑む。

『あの、娘を? イレーネを? 何故? 何故食^{なにゆえ}べる?』

「え……」

滔々と、まるで意識の他にあるような口調だった。夢現^{ゆめげん}を漂^{めぐる}うよ
うな。

??何故?

その娘は、得物ではなかったのか?

(いいえ)

人は。

魔物の、食糧ではなかったのか。
人が、魚を食べるように。羊の肉を食べるように。草の種を見分けて食べるように。

「魔物は、人を、食べるのではないのですか」

虚ろな眼差し。

全てがどうでも良いと言いだげに、けれど憎悪のような感情を孕む、その。

昏い、眼。

ああ、深い、夜が。
押し寄せて、くる。

『……ああ、娘。おまえは、美味しそう、だな』
「?????!!」

アルマリアははっとした。ぞくりと背筋を悪寒が走る。憎らしくも懐かしい、故国では慣れた感覚。

そうだ。自分はそういう者だった。どうして失念していたのか。彼が魔物なのだとしたら、自分は今最も餓えを満たすに魅力的な“たべもの”だろう。思わずじり、と後退する。と、微かに揺れた拳を、暖かい手の平に包まれた。視線を向ける。険しい顔をしたヴェルヘルムのものであった。それだけで、ほんの少しの安堵が広がる。大丈夫、と今日幾度繰り返したかしの言葉を再び呟く。

『だが、たましいは、いらぬ。娘、臍物を、寄越せ』

「え、??ぞうも、つ? なん、」
「慧。がつつかないで。品がないわ。確かに白雪姫は上等だけど、さすがにあんたでも食べたなら死ぬでしょう。もうすぐこちらでそれなりの臓物が集まるから、ちよつと待つてなさいな」

いささか不機嫌そうに女が爪の先を伸ばした。くい、と男の顎が摘まれる。……僅か、その伸びた爪が黒い皮膚に食い込んでいるのが分かった。どうして、とアルマリアは眼を細めた。他人事なのに、妙に生々しくて、痛ましかった。どうして、この人は、こんなことが出来るの。どうして、あの人は、何も言わないの。どうして。

この人達は、仲間ではないの?
それに??

(それに、どうして知ってるの)
私の血が、魔物を殺すと。

「……臓物が集まる、とは。どういふことです」

ヴィルヘルムの押し殺したような声に、クオルディスが眼を見開く。え、と戸惑うエンナが、不意に青ざめた。

「……エンナ? どうし、」

「……アルマリア様、何か、今??すごく、嫌な気持ちに、なりました」

「……………え?」
「今迄も、心臓止まりそうでしたけれど。何か、すごく??怖い、ような」

そう言って、ぎゅ、と胸元を押さえる。アルマリアはそつとヴィルヘルムの手を解き、エンナの方へ屈み込んだ。弱く笑って、エンナは大丈夫ですと言うように首を振る。大丈夫な訳がない。酷い顔

色だ。どうして、急に。

(??あ、れ?)

ふとアルマリアは気付いた。風が、吹いていない。ずっと。大したことではないかもしれない。けれど、何故かそれが居心地悪くて堪らなかった。そう、エンナが、嫌な気持ち、というようなもの。

「……こんな平和ボケの国にもカンの良い子がいるのね。ふ、ふふ。そうね、こんなところで、ちんたらしてる暇はないんじゃない？」

王子様

「……どういうことですか」

「怖いわ。ねえ、慧」

「……………」

「無視しないで。不愉快ね。??そうよ、もうすぐ集まるの。たくさん死んだから」

くるくる変わる表情が、吐き気がする程気味が悪い。

死んだから、という言葉に、クオルデイスとリカルド、そしてヴィルヘルムの三人が気色ばむのが分かった。言葉も出ないくらい喉を詰まらせてから、クオルデイスが、まさか、と呟く。まさか。その否定を乞うような口調に、酷く胸がざわめいた。死んだから。それは、何が??誰が?

女は嗤う。

美しく、うっそりと。

「ミュンチェス六番街コキユートス裏、マルグリット大聖堂墓地、鶏と兎亭フアラール夫人の服屋の間にある路地、ええとそれからあそこがあった?」

歌うように紡がれる地名は、未だリュファアーニアに不慣れなアルマリアにはほとんど覚えがない。だが。

「???エルストリッド五番街、扇子屋サルストリトスの、裏?」

震えるようなクオルデイスの言葉には、酷く聞き覚えがあった。

茫然とする。だって。それは。

???ああ、だけど。

記憶に蘇る声がある。余りにも近く、そして最も信用に足る声。

“???人と魔物の仕業であろうよ”

「ああ! そうよ、それ。それが確か、最後だったかしら。とびきり丈夫な臍物ね。それもこれもほとんど替の為にだったのだけど、漸く私にも益がくるわ」

くすくすと心底嬉しげに彼女は嗤う。

嗤う。

嗤う。

嗤う。

???万感の悪意を込めて。

「貴女が殺したのか! マリーシャ、……彼女達を!」
「そうよ??」

けるりと女は答えた。二の句が継げなくなるほどあっさり。恐らくクオルデイスもそうなのだろう、続きを口に出来ずに絶句している。当然だ。どうしてこんなに簡単に肯定されると思うだろうか。

「何故、殺したのです。あのように、無惨に。一体何の意味があったと？」

クオルデイスより幾分冷静にヴィルヘルムが聞く。けれど冷え冷えとした眼差しが紛れようなく怒りに揺れている。

女はことんと小首を傾げた。

「魔物を呼び寄せる為よ」

当然でしょ？ とでも言いた気だ。アルマリアは眉をひそめた。

「魔物、を……？」

「そうよ。別に美しい娘じゃなくても構わなかったのだけど。まあそれは半分替の為ね。臍物を与えてやったのよ。？？その王子様もご存じないみたいだから程度も知れるけど、リュファニアは大陸一の聖性を持っている。知っているでしょう？ 白雪姫。膨大な守りが敷かれたこの地にはあんまりにも魔物が少ないのよね。居ない、と言った方が確かしら。だけど一歩外に出れば魔物なんてうじゃうじゃしているわ。そういうのを、無理矢理この国に突っ込ませて、蹂躞させるにはどうしたらいいかしら？」

蹂躞。

ああ、まさに、その通りだ。アルマリアは思った。

彼女の言葉通り、数々の“変死体”は、確かにこの穏やかな国を歪ませる。

「ただの死、じゃあ意味がないの。民の心内を曇らせて、怯えさせ。そうして内臓の一部だけを彗に上げ、あとはそのまま。すると魔物に殺されたにも関わらず残った魂が抜け出ていくのよ。その甘い匂いに惹かれて魔物がやってくる。そうして少しずつ、外からも内からも聖性が食い破られる。それがあとちよつとで完成。それだけで意外と簡単よね。ああそうそう、首に噛まれたような痕があったでしょう。あれは彗じゃないのよ。私が噛んだの」

「?????え？」

「どういうことだ。
この人は、人間なのではなかったか。
アルマリアの疑問が見てとれたのか、応えるように女が顎を引く。」

「ね？ お幸せな白雪姫。私、人間の、匂いがするかしら」
「何を言って、……………にお、い？」

クロプツエンの示した激痛が止んだのはこの人に会ったからだ。
そして、あの、黒い男がこの女の後ろにいたから。
だがそれだけか？ 人と魔物。二つしか、選択肢は、ない？
本当に？

「……………でも、も。魔物、だったら。そんな、」

（ “そんな”？ ）

自分は何と繋げるつもりなのだろう。アルマリアが長年怯え恐れ忌んできた魔物の姿は、大分型から外れてしまった。ならばこの女が魔物で、何が不思議なのだろう。

???でも。そうしたら、クロが言っていた“人”は誰？

「残念外れ。私はちゃあんと人間だわ。でも、」
「！ ま、??さか。貴女は、」

くすくすと女が言いかけた時、圧されるようにクオルデイスが叫んだ。眼を向けると、彼はこの数日でもついぞ見れなかった驚愕の面差しで女を見つめていた。途端、彼女は詰まらなさそうな顔になる。そうよ、と面倒そうに朱唇が動いた。

「そうよ。多分、当りだわ」

言っでござんなさいな、と彼女は妖しいまでの貌かおで促す。アルマリアは息がつけなかった。ただぼんやりと、どうして彼に分かったのだろうか、と思った。彼は、きつと、魔物なんて知らずにいた筈なのに。

彼は呻いた。

呻くように、言った。

「貴女は、魔物を喰べたのか」

街中の聖女 17 (後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2240/>

純情白雪姫

2011年8月2日16時16分発行